トシテ和好ノ意無キナリ、敵國只ダ公理ニ憑リ力ノ有ル所ヲ盡シテ以テ兇暴ヲ懲創シ、我ガ國旗ノ辱ヲ洗フノ一方アル事ヲ得ルノミ。兩國ノ大事方ニ此極ニ迫レリ惟貴……之ヲ再思セヨ萬遷延スルコト能ハザルナリ。

右ハ花房公使ノ手許ニテ場合ニ應ジ可然起草シ且ツ施行スベキ事ナレドモ大意ハ右ノ如クナルヲ要ス。

右最後書ハ問ヲ實行セントスルノ場合ニ至ラバ我軍機ヲ誤ラザル爲ニ豫メ、特ニ郵船ヲ發シ急報ヲナス事必要ナリ。

又各國駐在ノ使臣又軍艦ニ對シテハ相當ノ報知ヲ爲シ以テ局外國ト交際ノ禮ヲ全クスル事ヲ怠ラザル可シ。

明治十五年八月廿日

朝鮮事件ニ關スル考察

北京　森有禮

清國政府朝鮮ヲ其屬國ナリト揚言スト雖ドモ、本月十日總理衙門談判中ニ、朝鮮ノ地ハ清國ノ所領ニ非ズ、故ニ彼國ノ內政ニ干預スル事能ハズ、亦其外交ノ事ニ至テモ彼ノ自主ルニ任スト明ニ言ヲ發セシヲ以テ觀レバ、其所謂屬國ノ實更ニ見ル可キ者無シ。夫レ內政外交ノ權利ヲ全有スルノ國ハ、其政體勢力等ノ如何ニ拘ラズ之ヲ獨立自主ノ國ト云フ。是レ公法諸家ノ皆其說ヲ同スル所ニシテ、且ツ歐米諸國現ニ此ノ理ヲ公認シ、其ノ外交ヲ掌理ス。卽「エヂプト」ト「セールヴヰヤ」等ノ國ニ對シテ掌理スル所ノ交際是ナリ。名家腓力莫爾氏其編著スル所ノ萬國公法第二編第一章第六十三條ニ此理ノ大意ヲ論述セリ。夫レ公法ノ理既ニ此ノ如シ。而シテ我政府ノ朝鮮ヲ認ル處亦タ獨立國ヲ以テスルアルニ因リ、今後凡日本朝鮮ノ間ニ係ル事件ニ付テハ、清國政府ヲシテ片言モ容ルヽ事能ハザラシムルガ爲メニ、去十五日總理衙門ニ告致スルニ別紙ノ照會（要略）ヲ以テス。又之ヲ用テ十四日衙門ヨリ接收セシ覺書卽別紙（要略）ノ

末文兩國所屬邦土不相侵越トノ異議ヲモ同時ニ打チ消シタリ。

余ハ最初ヨリ專ラ親ト寛トヲ主トシテ衙門ノ諸官ニ接シ、若シ或ハ朝鮮ノ隣緣ニ係ルヲ以テ之ニ就キ事ヲ穩和ニ整頓セント欲スル意モ有ラン歟ト之ヲ謀ルノ機會ヲ彼ニ許シタレドモ、彼等憤發ノ氣色ナク、亦更ニ朝鮮ノ禍福ニ意ヲ注グノ狀ヲ顯ワサズ、思フニ是レ支那內都不治ノ形勢他ヲ顧ルノ餘力無キニ歸スベシ。

朝鮮獨立ノ實ハアリト雖ドモ淸國屬官ハ名ヲ冒ムルニ由リ、獨リ「セルヴヰヤ」等ノ土耳格國ニ係ルガ如クニシテ純然タル他ノ獨立諸國ト同視スル事ヲ得ズ。且ツ其品位甚ダ異ナルアリ故ニ我派出ノ使節ニ善ク此ノ意ヲ領會セシメ、日本朝鮮對等ノ條約卽チ互相京地ニ交際官ヲ駐劄セシムル約ノ類ハ一切揭ル事ナク、唯領事官ヲ京地及ビ諸開港場ニ置ク等ノ事ノミヲ約スルヲ要トス。此等ノ事因ヨリ廟謨ノ洩サヾル所タルヲ信ズト雖ドモ聊カ爰ニ之ヲ附言シテ以テ賢考ニ供ス。

明治九年一月廿日

（別紙）

過日貴大臣ヨリ交到セラレシ節略書一通ヲ接收ス、內ニ貴國ノ船高麗ノ江華ニ至リ、淡水ヲ需メントスルニ岸上ノ砲臺ヨリ砲ヲ開キ轟繫セシヲ以テ、現今貴國ヨリ官員ヲ彼地ニ差遣ハサル、其意ハ、前月貴國署大臣鄭ヨリノ書函ヲ接收シ、海邊ヲ測量シ此事出來ズト報セラレシヲ承知シ、諸新聞紙ニモ亦縷々申述有之今復タ貴大臣ノ節略ニ各情ヲ詳述セラレシヲ接准セリ。抑朝鮮ハ有國ヨリ以來斤々自守スルヲ以テ、我中國ハ其自ラ理ムルニ任セ、華人ヲシテ彼地ニ至リ交涉セシメザルモ、亦其志己ガ分ヲ守ルニ在ルヲ信ズルナリ。故ニ之ヲ强ヒ責ル事無シ卽チ理ヲ以テ之ヲ撥ルニ、朝鮮ハ必ズシモ獨リ貴國ト芥蔕スル所アルニ非ズ、今前事ニ因リテ貴國使ヲ彼地ヘ遣シ、兩國ノ爲メニ親好ヲ保スルヲ得ント欲セラルヽハ具ニ其意ノ兵ヲ見ルニ在ルヲ見ルナリ。卽チ此度貴大臣中國和好ノ情ヲ推念シ詳ニ述ベ意ヲ用ヒラルルモ、我兩國修好條規ヲ信守シテ敦睦渝ラザルニ非ザル無ケン。中國ノ朝鮮ニ於ケル固ヨリ强ヒテ其政事ニ預ラザレドモ、切ニ其安全ヲ望マザル能ハズ。過日貴大臣ノ面話ニ事ヲ辨ズルニハ固ヨリ條約ヲ照ラスベケレドモ、但須ク日本ノ高麗和好ナラン事ヲ要スルハ是レ道理アル事ナルヤ道理無キ事

ナルヤヲ看ヨ。モシ今高麗和好ヲ願ハスンバ便ハチ是レ彼ニ道理無キナリト申述ラレタリ。朝鮮モシ故ナクシテ兵ヲ他國ノ境内ニ稱タラバ自ラ理有ト謂ヒ爲スヲ得ズ。朝鮮モシ他國ト往來シテ獨リ貴國ト往來スルヲ願ハズンバ亦タ尙以テ理有リト謂ヒ爲スヲ得ザルナリ。貴大臣既ニ事ヲ辨ズルニハ條約ヲ照スヲ要スト云ヘリ。唯希クハ貴大臣之ヲ貴國政府ニ轉致シテ、只兵ハ必ズシモ用ヒザルノミナラズ、卽チ使ヲ遣シ往テ問フノ一節モ亦タ須ク自ラ萬全ヲ籌畫シ、務テ双方ノ情願スルヲ期シ、各彊土ヲ安ンジテ終ニ此ノ修好條規ノ兩國ニ屬セル邦土ハ相侵越セザルトノ言ヲ守リ給ハン事ヲ、是則チ本王大臣ノ切ニ貯所ノ者也。

十二月十八日　（我明治九年一月十四日）

（別紙）

大日本國欽差全權大臣照會ヲ爲ス事、本大臣明治九年一月十日ニ於テ貴王大臣ニ晤會シ、朝鮮約ニ背キ使ヲ拒ミ、呪ヤ江華ニ在テ我船ヲ砲擊ス、今我政府猶主和ノ使臣ヲ遣シ彼ニ往テ事ヲ問フ、其仍前芥蔕シテ事ヲ憤ルヲ恐ル、ヤ、本大臣ニ命ジテ之ヲ貴國ヘ告ゲ、以テ兩國鄰並ノ誼ヲ昭カニスル等ノ情ヲ詳述セリ。貴王大臣ノ云フニ據レバ朝鮮ハ屬國ト云フト雖、地固ヨリ中國ニ隷セズ、故ヲ以テ中國曾テ内政ニ干預スル無ク、其外國ト交渉スルモ亦タ彼國ノ自主スルニ聽セタレバ相强ユ可カラズトノ語ナリ。由是觀之朝鮮ハ是レ一ノ獨立スル國ニシテ、貴國ノ之ヲ屬國ト謂ヘルハ徒ニ空名耳ミ。彼既ニ鄰ト爲リ我ニ暴戾ヲ加フ、而今使ヲ遣シ以テ之ヲ責メ、且我國人民ノ爲メニ自ラ海彊ヲ保安スルノ義ヲ盡サヾルヲ得ズ、此ニ因テ凡ソ事ノ朝鮮日本ノ間ニ起ル者ハ清國ト日本國トノ條約上ニ於テ關係スル所無シ。玆ニ本大臣事ニ臨ミ意ヲ決シ、本國ヘ回明スル如此、相應サニ文ヲ備シ貴王大臣ヘ照會シ査照セバ可也須ク照會者ニ至ルベシ。右、

大清欽命總理各國事務王大臣ヘ照會ス。

明治九年　一月十五日

清國ノ主張ト之ニ對スル疑問

明治九年一月十八日左記意味ノ照覆文總理衙門ヨリ送來ル、右彼ニ於テ朝鮮ヲ不動之屬國ト爲シ其全權ノ及バザル義ハ前掲別紙要略ニ盡セリト云ヒ、末尾ニ條規第一條中不侵屬土ノ一句ヲ擧テ我ガ前掲別紙照會要略ニ主トスル於條約上無所關係ノ意ヲ打消シ來レリ、仍テ我亦別紙ノ通疑問ヲ設ケ猶結ブニ前照會ノ原意ヲ以テシ、十九日總署ヘ照會ニ及ビタレバ其ノ要略ヲ下ニ抄錄ス。

明治九年　一月二十日

森　有禮

大清欽命總理各國事務和碩恭親王九大臣、爲照復事、光緒元年十二月十九日准

貴大臣照會一件以日前

貴大臣來本衙門、議及

貴國欲與朝鮮和好各情、謂本王大臣曾有朝鮮雖日屬國地固不隸中國、以故口一

國曾無干預內政其與外國交涉亦聽彼國自主不可相强等語、本王大臣查朝鮮爲中國屬國隸

卽屬也卽云屬國自不得云不隸中國且日前回復貴大臣、並無不隸中國之說、修好條規內載

所屬邦土朝鮮實中國所屬之邦之一無人不和至中國何不勉强各情己於本月十八日具復節略

中、備言其義今准

貴大臣照會、本王大臣仍應聲明合照修好條規、所屬邦土不相侵越之意、彼此同守不敢斷

以已意謂於條約上無所關係相照會

貴大臣查照可也須至照會者

右　照　會

大日本國欽派駐京全權大臣　森

光緒元年十二月二十二日

清國ノ主張ト之ニ對スル疑問

大日本國欽差全權大臣森照會ヲ爲ス事、明治九年一月十八日貴王大臣ノ覆文ハ接准ス。內ニ修好條規內ニ所屬邦土ト載セタルハ、朝鮮ハ實ニ中國ヘ屬セル邦ノ一ナル事人ノ知ラザル無シ合サニ修好條規ノ所屬邦土不相侵越之意ヲ照シテ彼此同守シ、敢テ斷ズルニ己ノ意ヲ以テシ條約上ニ關係スル所無シト謂ハザルベシ等ノ語ヲ稱シタリ。本大臣實ニ未ダ其意ノ所在ヲ明解スル能ハズ。因テ思フ、貴王大臣條規ノ所屬邦土不相侵越之意ヲ引ク所以ノ者ハ、蓋シ將來我國與朝鮮國交渉シテ凡ソ該國政府及其人民ヨリ我ニ向テ爲ス所ノ事有ルニ就テ、卽チ貴國ヨリ自ラ其責ニ任ズルノ謂ナルカ、若自ラ其責ニ任ズル能ハズト謂ハヾ屬國ト云フト雖モ徒ニ空名耳ミナレバ、則我國自ラ其理ヲ伸ベザルヲ得ズ。條規ニ於テ何ノ關係スル事有ラン哉。相應サニ貴王大臣ヘ照會ス希ハ卽チ明復セバ可也。須ク照會者ニ至ルベシ。

右

大清欽命總理各國事務大臣ヘ照會ス。

明治九年　一月十九日

再ビ清國ノ頑迷ナル主張ニ就テ

北京　森有禮

一月二十九日總理衙門ヨリ又モヤ書面到來ス、文意頑迷ニシテ前文ト異ル所甚多シ、仍テ余之ヲ駁シテ其ノ反省ヲ求メ我主張ノ常ニ平和ニ立脚シ且ツ公明正大ナルヲ明ニセリ。往復書面ノ大意左ノ如シ。

大清欽命總理各國事務　王大臣　爲

照復事、光緒元年十二月二十三日　准

貴大臣照會一件以本王大臣前此照覆未能明解其意因思所引條規所屬邦土不相侵越之意蓋就將來交渉凡有該國政府及其人民所爲之事、卽任其責之謂、若不任其責雖云屬國徒空名耳、於條約有何關係等情查朝鮮爲中國屬國、中外共和屬國有屬國分際、古今所同、本王

大臣前次照會所稱、朝鮮寔中國所屬之邦之一卽中國之自任也豈得謂屬國爲空名豈得謂於條約無所關繫

貴國既與中國和好、訂明修好條規理應彼此同守所屬邦土不可稍有侵越之約、前月十八、二十二、等日所覆節照會業已詳裁言之所期於

貴大臣者、祇在按照修好條規所言永遠遵守不違其用意甚平、其措詞甚顯相應照復

貴大臣一並查照可也須至照會者

右　照　會

大日本國欽派駐京全權大臣　森

光緒貳年　正月　初肆　日

大日本國欽差全權大臣森照會スル爲メノ事、明治九年一月廿九日貴王大臣ノ覆文ヲ接准ス、內ニ朝鮮ノ中國ノ屬國タル事中外共ニ知ル、屬國ハ屬國ノ分際アル、古今ノ同ジキ所朝鮮ハ實ニ中國ニ屬スル所ノ邦ノ一ニシテ卽チ中國之レ自ラ任ズル也。豈屬國ヲ空名ト爲スト謂フヲ得ン。豈條約ニ於テ關繫スル所無シト謂フヲ得ン等ノ語ヲ稱ス。本大臣査スルニ、謂フ所ノ中國自ラ任ズルノ一語言短ク意微ニシ、其自ラ任ズル所ノ者果シテ何事カ、實ニ猶ホ未ダ明カニ其意ヲ悉クス能ハズ。又屬國空名ナラズト謂フ、而シテ其空名ナラザルノ實未ダ曾テ見ザルニ似タリ又頻リニ兩國屬スル所ノ邦土稍々侵越アル可カラザル等ノ語ヲ以テ敎ヘラル、是レ何ゾ、劇カニ侵越ヲ以テ言ト爲ンヤ、此等ノ處本大臣實ニ未ダ解スル能ハズ。又敢テ己ノ意モテ自ラ解セズ、惟タ本大臣前項ノ照會ニ稱スル所ノ我國ト朝鮮國ト交涉ス、其ノ該政府及ビ其人民我ニ向ヒ爲ス所ノ事貴國能ク自ラ其責メニ任ズルヤ否ヤノ處、其前其後曾テ未ダ一ノ確斷ノ言ヲ獲ザレバ則チ本大臣仍テ當サニ前次稱スル所ノ朝鮮ハ是レ一ノ獨立國、貴國之レヲ屬國ト謂フモ亦空名而シテ凡ソノ事朝鮮日本間ニ起ル者斷ジテ清國ト日本國トノ條約上ニ於テ關係スル所無シト謂フ等ノ語ヲ以テ准ト爲ル耳。仍テ貴王大臣ニ照會シ、希フハ卽チ分別示復スベクシテ可ナリ。須ク照會者ニ至ルベシ。

右大清欽命總理各國事務王大臣へ照會ス。

明治九年　二月一日

再ビ清國ノ頑迷ナル主張ニ就テ

（譯漢文）

爲照會事明治九年一月廿九日　接准

貴王大臣覆文內稱、朝鮮爲中國屬國、中外共知、屬國有屬國分際、古今所同、朝鮮寔中國所屬之邦之一、卽中國之自任也豈得謂屬國爲空名、豈得謂於條約無所關繫等語、本大臣查所謂中國自任一語、言短意微、其所自任者果何事、實猶未能明悉其意、又謂屬國不空名而其不空名之實、似亦不曾見又頻以兩國所屬邦土不可稍有侵越等語見敎、是何可劇以侵越爲言哉、此等之處、本大臣實未能解、又不致已意百解、惟本大臣前次照會所稱、我國與朝鮮國交涉、其該政府及其民人、向我所爲之事、貴國能否自任其責之處、其前其後嘗未獲一確斷之言、則本大臣仍、當以前次所稱、朝鮮是一獨立之國。

貴國謂之屬國亦徒空名、而凡事起于朝鮮日本間者、斷謂於淸國與日本國條約上無所關係等語爲准耳、仍應照會

貴王大臣、希卽分別示復可也、須至照會者、

淸欽命總理各國事務王九大臣

照復事光緒二年正月初日、推准

貴大臣照會仍謂中國自任一語、未能明悉其意屬國不空名之實、似不曾見又以前引修好修規謂何可劇以侵越爲言而以事起於朝鮮日本間者、於條約上無所關係等因本王大臣查朝鮮爲中國所屬之邦與中國所屬之土有異而其合於修好條規兩國所屬邦土、不可稍有侵越之言者則一蓋修其貢獻奉我正朔朝鮮之於中國應盡之分也收其錢糧齎其政令朝鮮之所自爲也此屬邦之實也紓其誰解其紛期其安全中國之於朝鮮自任之事也、此待屬邦之實也不肯强以所誰不忍漠視其急不獨今日中國如是伊古以來、所以待屬國皆知是也本王大臣照會所引不稍侵越之言正以不侵越者厚期於貴國非劇以侵越爲言也

貴大臣謂事起於朝鮮日本間者、斷爲與條約無與則修好條規言之甚明未能諱也惟中國之於貴國友邦也、隣國也、朝鮮則中國屬國也、中國之望其安無事則一也、今

貴國之於朝鮮猶期無事而與我中先開辨難之端揆之事理似非所宜至於中國苟有可爲之處自由本王大臣早籌酌辨以期彼此相安正不待

貴大臣再三言之也、相應照會

貴大臣查照須至照會者

再ビ淸國ノ頑迷ナル主張ニ就テ

右　照　會

大日本國欽派駐京全權大臣　森

光緒二年　正月十八日

大日本國欽差全權大臣森照復ノ爲メニスル事、明治九年二月十二日貴王大官ノ復文ヲ接准シ逐層閱悉セリ。本大臣査ス前ニ朝鮮ノ一節ヲ論ジ極メテ本國使ヲ遣シ以テ無事ヲ期スルヲ稱セリ。夫ノ朝鮮ヲ原スルニ實ニ獨立ノ體ヲ具シ、其內外ノ政令悉ク自主ニ由レバ、我國モ亦自主ヲ以テ之ニ對ス、是ヲ以テ該國自主ノ政令ヲ除クノ外其貴國トノ間ニ所有關係事理ハ我國決シテ顧及セズ。貴國モ亦條規中侵越等ノ字ヲ引テ我國ヘ加諸スルヲ得ズ。故ニ所謂屬國トハ徒ニ空名ノミ。凡ソ事朝鮮日本ノ間ニ起ル者ハ條約上ニ固ヨリ與カル無シト曰ヒシナリ、今來文ヲ閱スルニ既ニ難ヲ紓ヘ紛ヲ解クヲ以テ中國自任之事トナシ、復タ中國苟ニ爲ス可キノ處有レバ自ラ本王大臣ヨリ早籌酌辨シ、以テ彼此相安スルヲ期ス等ノ語ヲ稱ス。是本大臣ノ隣國ヘ期望スル所ノ者ト正ニ相符合セリ。曷ゾ額慶セザランヤ。現在本國已ニ欽使ヲ派シテ韓ニ往タレバ自ラ、其成ルヲ樂ミ觀ル可キナリ相應サニ貴王大臣ヘ照復シテ査照ス。須ク照會者ニ至ルベシ。右

大清欽命總理各國事務　吏部　尚書　毛

軍機大臣大學志官理吏部事務室

和碩恭親王

軍機大臣大學士文

軍機大臣協辨大學士兵部尚書

戶部尚書董

署兵部左侍郎郭

三品頂戴通政使司副使夏

工部左侍郎成

頭品頂戴兵部左侍郎崇

ヘ照會ス

明治九年　二月十四日

再ビ清國ノ頑迷ナル主張ニ就テ

（譯　漢文）

爲照覆事明治九年二月十二日接准
貴王大臣復文逐層悉本大臣查論朝鮮一節極稱本國遣使以期無事原夫朝鮮實且獨立之體其內外政令悉由自主我國亦以自主對之是以除該國自主政令外其與
貴國間所有關係事理我國決不顧及
貴國亦不得引條規中侵越等字加諸我國故曰所謂屬國徒空名耳儿事起於朝鮮日本間者於條約上固無與也今閱來文既以紓難解紛爲中國自任之事復稱中國苟有可爲之處自由本王大臣早籌酌辨以期彼此相安等語是與本大臣所期望於隣國者正相符合曷不額慶現在本國已派欽使往韓自可樂觀其成矣相應照復貴王大臣查照須至照會者

朝鮮事件ニ關スル意見書

ボアソナード

公使館襲撃ノ原因及ビ場合ニ就テハ未ダ詳報ヲ得ザルノ今日ニ於テハ、如何ナル決議ヲモナスベカラズ。宜シク日本官吏ノ來着ヲ待ツヲ要ス。

然レドモ今日ニ在テハ實際ニアリ得ベキ二三ノ場合ヲ推定前見スルヲ得ベシ。

第一　此般ノ事件ノ外人攘斥ニ關スルノ內訌ナルカ、果シテ然リトスルトキハ、該內訌ハ同時ニ朝鮮政府ニモ敵對シタルモノトス。而テ此ノ場合ニ於テハ假令隱然ニ於ケルモ朝鮮政府ノ之ニ協力シタリト推定スベキモノニアラズ。何トナレド此ノ如キ事件ハ朝鮮政府ノ協力スルトキハ爲メニ其權力ニ大危險ヲ與フルモノナレバナリ。

此場合ニ於テハ該內訌ノ完結ヲ待チ、朝鮮政府ハ勉メテ該內訌ヲ治定シタルヤ否ヤヲ見、而テ朝鮮政府ノ勝利ヲ得タルトキハ之レニ向テ諸償金有形無形ノ賠償及ビ將來ニ對シテノ保證ヲ請求スルヲ要ス。

然レドモ若シ朝鮮政府ノ轉覆セラレタルトキハ、共ニ談判スベキ實地ノ當該官府ヲ得ン爲メ秩序ノ恢復ヲ待ツヲ要ス。

第二　此般ノ事件タル殊ニ日本人ニノミ敵對スルノ内訌ナル乎、果シテ然リトスルトキハ此ノ事件ニ付キ朝鮮政府ノ實狀ハ如何ナリシヤ、公使館ノ襲擊ハ前以テ企謀シタルモノナルヤ、又ハ或ル不意ノ場合ヨリ起リタルモノナルヤヲ詳知スルヲ要ス。而テ第一ノ場合ニ於テハ朝鮮政府ハ少クモ不注意（前見ヲ怠リタルコト）ノ罪アルヲ以テ、卽チ其責任アリ、然シ此ノ如キハ未ダ以テ戰爭ノ場合ニハアラザルモノトス。若シ朝鮮政府ニ於テ内訌者ノ企謀ヲ前知シタル之レヲ壓服セン爲メニ何事ヲモ爲サザリシモノトスルトキハ、同意者（承認ヲ以テ又ハ懇待ヲ以テ）タルノ源因ヨリシテ共謀者タルモノトス而シテ此ノ如キハ卽チ戰爭ノ場合ナルモノトス。

第二ノ場合（不意ノ場合）ニ於テハ朝鮮政府ハ單ニ不注意ノミノ責任アリ。該不注意ハ日本人救護ノ爲メ直チニ其兵隊ヲ派出セシメザリシコト之レナリ。而シテ此ノ如キハ決シテ戰爭ノ場合ニアラズ唯賠償及ビ保證ヲ要求スルニ止マルベキモノトス。

然レドモ不注意ニ關スル前記兩個ノ場合ニ於テ其内訌者ヲ軍律法律ノ手ヲ以テ追捕シ、之ヲ嚴罰セザルニ於テハ該政府ノ責任ハ一層重大ニ一層大切ナルモノトス。

此ノ點ニ關スル朝鮮政府ノ怠情ハ上文記載ノ共謀ニ近隣シ、既行ノ暴行ニ同意ヲ表シタルモノナルヲ以テ、此ノ如キハ戰爭ノ場合ナルモノトス。

既ニ承知スル事實中ニ危難ニ於ケル日本人ニ逃入所ヲ拒絶シタルコト及ビ王宮城門ノ閉鎖ノ二件アリ。

然レドモ該拒絶ヲ以テ必シモ共謀ノ證ナリト認ムルヲ得ズ、時宜ニ依レバ宮城ノ防禦充分ニ行屆カザルヲ以テ外部ヨリノ侵入及ビ國王ニ對スルノ攻擊ヲ恐レタルヤモ計ラレザルナリ。

而シテ此ノ點ニ就テモ尙ホ事實ノ詳報之レナキガ故ニ、今暫ク猶豫セザルヲ得ズ。唯猶豫スルコトナクシテ爲シ得ベキコトハ二三ノ軍艦ヲ裝備シ何時ニテモ出立スルヲ得セシムルコト之レナリトス。

東京　千八百八十二年　七月三十一日

ボアソナード手署

宇川盛三郎譯

昨日ノ意見書ニハ現今朝鮮ニ内訌アルヤト假定シ、果シテ然ルトキハ日本ノ要求ヲ起サンニハ先ヅ秩序ノ恢復スルヲ待ツカ、又ハ譬ヘ假設ニモセヨ、新政府ノ構成アルヲ待ツヲ以テ適當ナリトスト記載シタリ。

然レドモ該趣意ハ朝鮮ニ滯在スル日本人ノ保護ニ付キ嚴重ノ處置ヲ施スニ於テ妨ゲナキハ勿論ノ事ナリトス。

而シテ一島嶼又ハ一海港ヲ一時占有スルヲ得ベキヤ否ヤノ御下問アリタリ。

拙者ハ更ニ狐疑スルコトナク之レニ御同意ヲ表スベシ。日本人ノ爲メニ開設シタル二個ノ海港ヲ占有シ、之ニ兵隊ヲ上陸セシメ、市街ノ一部ニ向テ大砲ヲ臨列セシメ、朝鮮ノ兵隊若クハ大砲ヲ同樣ノ場所ニ置クコトヲモ拒絶シ、稅關若クハ政府ノ歲入ヲ來ス他ノ淵源ヲ占有スルヲ得ベキハ勿論ノコトナリトス。

東京　千八百八十二年　八月一日

公使館ノ襲擊、又ヒ其全部若クハ一部ノ破毀ハ最モ重大ノ事ナリトス。朝鮮政府責任ノ點ヲリ之レヲ見ルトキハ、該事件ハ一名若クハ數名ノ武官ヲ殺害シタル事ヨリハ非常ニ重大ナルコトトス。何トナレバ公使館ハ一外國（日本帝國）ヲ代表スルモノニシテ、云ハバ日本帝國ノ代標ニシテ、朝鮮國內ニ存在スル日本國土ノ一分タルガ如キモノナレバナリ。

譬ヘ朝鮮政府ハ不注意（怠情）ヨリハ他ノ罪ナク、更ニ共謀ノ事ナキモノトスルモ、日本公使館ヲ保護スルコトヲ惰リタルノ罪ハ既ニ甚シキモノトス、此ノ如キ場合ニ於テハ日本帝國ハ朝鮮國ノ內政ニ干涉シ以テ自カラ其公使館ヲ保護スルノ理由アルモノトス。

東京　千八百八十二年　八月一日

第四回朝鮮ニ對スル處分按

新到着ノ電報ニ據テ考察スレバ、今回朝鮮ノ暴動タル獨リ日本ニ對シテ發セシモノニ非ズ、就中其國政府ニ對シテ起セシモノナリ。

今ノ時ニ當テ日本ハ朝鮮政府ト交通スル事能ハザルヲ以テ、直チニ損害償復ノ抵當ヲ取リ、同時ニ釜山元山ニ在留セル日本人ヲ保護スルノ處置ヲナス事固ヨリ日本政府ノ權内ニ在ルガ如シ。

其抵當トシテハ江華島（カ）巨濟島（カ）松島ヲ占有シテ可ナリ、此數所ニ於テハ必干才ノ抵抗ナカルベシ。

然レドモ日本政府ノ併呑ノ念アル非ズシテ唯日本ヲ滿足セシムルニ足ルノ結局ヲ見ルニ至ル迄占有ノ策ニ出デタル事ハ直ニ之ヲ通知スル事ヲ要ス。

遠征ノ總督若シ直接ニ彼政府ニ此通知ヲ爲ス事能ハザレバ、其占有スル島若クハ港ノ民ニ公告シテ以テ日本政府ノ意ヲ明示スルモ不可ナルナシ。

此占有ノ事亦其抵當ノ性質アル事ハ朝鮮ト條約ヲ締結セル諸國清米英ニモ亦タ之ヲ通知スルヲ要ス。

此米英兩國ニ通知スル事ハ決シテ之ヲ等閑ニ附ス可ラズ。然ラザレバ清國ヲ以テ朝鮮ノ上ニ主權ヲ有スル者ト認ムルガ如キ感ナキ事能ハズ。

朝鮮ト英米兩國間ノ條約未ダ批准ヲ經ザルノ故ニ拘ル事ナカルベシ。何者此條約タル既ニ假定スル者ニシテ且ツ英米船ノ朝鮮港内ニ在ル者アルハ疑ナキ事ナレバナリ。

朝鮮ノ内治ニ干渉シ其政府ヲ助ケテ國亂ヲ鎮定スルノ事ニ至テハ朝鮮政府ヨリ救援ヲ請ヒ來ルニ非ザレバ爲ス可ラズ。然ラザレバ清國ハ己レノ主權ヲ傷ケラレタルモノト思惟スル事ナキヲ得ズ。

日本若シ朝鮮政府ト文通スルヲ得バ此方ヨリ彼ニ向テ助力ヲ申込ムモ可ナリ、而シテ其言ヲ聽カルレバ朝鮮政府ヨリ救援ヲ請ヒ來レルト異ナル所ナキナリ。

最後照會ニ關スル意見書

ボアソナード

或ル事ヲ爲セトノ掛合ヲ載スル所ノ最後ノ照會ヲ送ルトキハ其掛合ハ事ヲ行ヒ得ル爲メニ十分ナル期限ヲ與フル事必要トス。

今之ガ例トシテ引用スルノ得ベキ條規又ハ慣習アル事ナシ、蓋シ其期限タル時機ニ因テ變異アレバナリ。

若シ一名又ハ數名ノ俘虜ヲ取戻サン爲ナラバ其掛合ノ附與傳達施行セラル、迄ノ期限ヲ與フベキ論ヲ俟タズ。乃チ最後ノ掛合狀ヲ送ル場合ト俘虜ノ在ル地方トノ間ニ距離ノ遠キ事アルベシ。然ルトキハ之ガ必要ノ時間ヲ見積ルベシ。

是レハ時機ニ因テ一日乃至二日又ハ若干時間タルベシ。

若シ亦城堡島嶼又ハ港市ヲ交附セシメン爲メナレバ、更ニ數日ノ期限ヲ與フル事ヲ得ベシ。

最後照會中左ノ二ケ條ノ約束ヲ記載スルトキハ別ニ開戰ノ宣告スルヲ要セズ。

第一　上文ニ陳述スル期限ヲ揭載スル事、

第二　之ニ違フトキハ開戰スベシトノ威迫ノ語ヲ加フル事、

若シ右二ケ條ノ約束ヲ最後照會中ニ載セアルトキハ更ニ開戰ヲ宣告スルヲ要スベシ。

最後照會ナル語ハ羅甸語ノ「ユルチモンム」(終ノ義)ヨリ來ル所ニシテ、最後ノ告知ノ謂ヒナリ。故ニ威迫ノ語ヲ含蓄セザル掛合書ニハ最後照會ノ名ヲ附スル事能ハザルナリ。

千八百八十二年　八月三日

ジエ、ボアソナード

在朝鮮米國(英吉利帝國ノ)艦隊提督ニ寄スル書簡草按

ボアソナード

提督貴下ハ定メテ朝鮮ニ於テ駐在シタル日本公使ノ七月ノ末ニ於テ朝鮮臣民ノ爲メニ殘刻ナル强暴ヲ受ケ、並ニ朝鮮政府ハ此亂暴ヲ豫防スル事能ハズシテ暴徒ヲ鎭壓スルノ力ヲ無キ事ヲ知リ賜フベシ。

今日日本帝國政府ハ朝鮮ノ政府ガ果シテ亂民ヲ平定シ能フカヲ知ル事ニ於テ猶ホ困難ナリトス

此ノ廣告ヲ發スルノ時ハ定テ事情一變スルナル可シ。其時ハ更ニ此ノ草按ヲ改正スルヲ要スベシ。

日本政府ハ彼ノ內亂鎭定スルヤ否ヤ、朝鮮政府ニ向テ掛合フ事ノ用意ヲナセル所ノ要求ニ拘ハラズ朝鮮居留ノ國民並其財產ヲ保護シ、並ニ賠償ノ爲及ビ兇懲罰ニ迅速ナル滿足ヲ得ル爲メノ抵當トシテ保證ノ處分ヲ取ル事ハ日本政府ノ權理及ビ義務ナリトス。

故ニ日本政府ハ本官ノ指揮ノ下ニ前條兩樣ノ結果ヲ得ルニ足ル爲ニ、某港ニ於テ兵隊ヲ送リ及ビ某々島ヲ占領スル事ノ決定ヲナシタリ。

日本政府ハ他ノ國民ニ向テ朝鮮人民ニ如此侵犯セラレタル萬國公法ヲ尊重スル事ヲ望ム爲ニ本官ニ任ズルニ朝鮮ト定約ノ關係アル外國ノ名代人ニ本官ノ職掌ノ目的ト性質ヲ廣告シ、猶ホ何等ノ事情ニ於テモ該國ノ利益ヲ害セザル最大ノ注意ヲナスベキ事ヲ以テセリ。

亞米利加合衆國ノ（英吉利帝國ノ）政府近頃朝鮮ト定約ヲ爲シタル事ヲ聞知リ、而シテ更ニ其定約ハ既ニ決定シタルヤ否ヤヲ吟味スル事ヲ要約セザルニ依テ、本官ハ日本帝國政府ニ代テ本官ノ職權ニ依リ貴下ニ左ノ事件ヲ告知ス。

第一　ハ本官帝國ノ數多軍艦ト其港ニ駐在スル事。

第二　ハ日本人民保護ノ爲充分ナル兵力ヲ其港ニ上陸セシムル事。

第三　ハ何某ノ島ヲ占領スル事。

第四　ハ亞米利加ノ國民及ビ其利益ヲシテ此ノ處分ニ付生ジタル困難ヨリ避ケシムル爲ニ要用ナル注意ヲ怠ラザル事。

本官ノ貴下ニ願フ所ノ者ハ此廣告ヲ受取タル上ハ、可成速ニ本官ニ受取書ヲ與ヘラル、事ヲ

本官ハ此事機ニ際シ提督貴下ニ向テ最モ尊榮ナル敬重ヲ表ス。

井上君貴下、今予ハ貴下ノ求ニ應ジテ、公告ノ草案ヲ送ル、貴下ハ、予ニ向テ、其果シテ貴意ニ適スルヤ否ヤヲ表セラルベシ。

予ハ思フ、軍隊ノ長官ハ此ノ事ノ訓條ヲ携帶シタルベシト雖モ、猶同樣ナル公告ヲ支那英米ノ公使ニ送ル事可レ然ナリ。是レ文明ノ禮儀ニシテ且ツ若シ水軍提督ノ朝鮮ニ在ル外國使節ト文通スル事難キノ時狀アル時ニ要用ノ事ナリトス。

若シ朝鮮政府顚覆セラレザルニ於テハ、朝鮮政府ニ向テ、一ノ公告ヲナス事要用ナリ。

千八百八十二年　八月

東京　ボアソナード

時變ト米韓條約ノ不成立

ボアソナード

拜啓　逐々御下問相成候問題ニ付卑見陳述仕候義、拙者ノ喜デ從事仕候處ニ御座候。陳者一昨日愚書拜呈ノ後傳承スル處ノ一新報ニ據レバ、頃者米國國會ニ於テ遂ニ米韓條約草案ヲ廢棄致候由、右條約ニシテ既ニ批准相成ラザル上ハ、過日草呈仕候告達（ノチフイカシオン）ノ義モ最早此一方ニハ御差出ニ相及申間敷、唯ダ米國船艦ニ於テ事變ヲ待タンガ爲メ、釜山浦ニ停泊致居候モノ有之候ハヾ其司令官ニ一通ノ公信御差出シ相成候ノミデ相足リ可申ト存候。就テハ今日ト相成申候テハ告達ヲ要候モノハ啻ニ英清ノ兩國ノミニ可有之ト存候。

韓地變亂ノ義モ、其後逐々傳聞仕候處ニ據レバ、不幸ニモ兼テ拙者ノ豫告罷在候通、國王遂ニ其位ヲ奪ハレ、鎖國攘斥黨遂ニ政柄ヲ執候樣相成候由、既ニ此ノ如ク我ニ暴擧ヲ加ヘタル黨類ニ於テ國權ヲ掌握候上ハ、韓國政府ノ責任ハ益々重キヲ加ヘコソスレ、決シテ減少スルコト無之ト存候。

抑モ今回ノ暴擧タルヤ、日本ニ對シ萬國公法ノ毀損セラレタルヤ明白ニ有之、且將來韓國ト條約ヲ結バント企テ居候諸邦ニ於テモ、此事變アリタルガ爲メ其之ヲ結ブノ危難アル事ヲ知リ此ノ如キ危害ニ對シ預メ用意スル事ヲ得ベク候ニ付、歐米各邦一トシテ日本ト感ヲ同フセザルモノ之レ無カルベクト愚考仕候。

今尚ホ爰ニ論究ヲ要シ候義ハ、彼ノ清國將來ノ擧動如何ノ一點ニ御座候。回顧スレバ既ニ五年以前ノ事ニモ可有之歟、今回ノ事變ニ比スレバ少シク重大ナラザル事件ニテ候ヘドモ、森氏ノ清國ニ差遣サレタルコトアリタルヤニ記臆罷在候。想フニ同氏ニ於テハ其節日清關繫ノ性質ニ付必ズ多少自得セラレタルコト可有之ト存候。尤モ清國ニ於テモ二年以來逐々外邦トノ交通ニ相馴レ候樣相見ヘ候ニ付、道義上此ノ如キ憎ムベキ事件ニ加擔仕候樣ノ義ハ必ズ其肯ンゼザル所ニ可有之ト愚考仕候ヘドモ、日本外交官ノ熱心注意スベキハ此一方ニ可有之ト存候。恐惶謹言

千八百八十二年　八月九日　於東京

ボアソナード記

朝鮮事件ニ付井上議官、ボアソナード氏ト問答筆記

明治十五年八月九日

（問）

支那政府ハ朝鮮ノ事ニ關シ軍艦並ニ兵隊ヲ派遣シ、其目的ハ一ハ朝鮮ノ暴徒ヲ鎭壓シ、一ハ支那ノ屬國ニ在ル日本公使館ノ亂暴ニ遭フタルヲ保護スルニ在ル事ヲ支那駐在ノ同國公使ニ電報セリ。外務省ハ右ノ報知ヲ今日接收セリ。

右ニ付御意見ヲ承リ度、就テハ一々問題ヲ設ケテ質問スベシ。

第一　支那ハ既ニ自カラ朝鮮ヲ屬國ト認メ、朝鮮國ノ內政ニ干涉セントス。然レバ日本ハ之ニ對シ如何ナル處置ヲナス事最モ適當ナルカ。

（答）

予ノ意見ニ據レバ支那ガ日本ヲ保護スル云々ニ對シテハ、其厚意ハ謝スル所ナレドモ、元來日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、現今ノ條約モ支那ノ手ヲ經由セズ、全ク朝鮮ト相對ニテ締結シ、其公使ノ如キモ北京駐在ノ公使ニ於テ之ヲ兼ネタルモノニアラズ。日本ハ特ニ朝鮮ノ京城ニ公使館ヲ置キ、公使ヲ駐劄セシメテ之ト交際シ、而シテ始メヨリ曾テ支那ノ保護ヲ假ラザルモ、我レハ自カラ我公使館及人民ヲ保護スベシト云テ可ナリ。尤モ言辭ノ過激ニ失スルハ不可然、但シ我公使館並ニ人民ハ我レヨリ之ヲ保護スベシ、幸ニ費神スル勿レト答フベキノミ。乍去我要求ハ我滿足ヲ得ルニ止ル故ニ、支那ト朝鮮トノ間ニテ相談シテ爲ス事ナレバ、我ハ之ニ關セズシテ可ナリ。但支那政府ガ我國ト朝鮮トノ間ニ立入ル事ハ許スベカラザルナリ。

（問）

日本ト朝鮮トノ關係ハ是迄曾テ支邦ノ干渉ヲ假リタル事ナケレバ、今回ノ事件ニ於テモ亦支邦ノ干渉ヲ要セザルハ無論ノ事ナリ。然ルニ今度ノ通知ニ答フルニハ單ニ「セルフプロテクション」（自カラ保護スルノ意）ノ趣意ニ止メテ我公使館並ニ人民ハ我レヨリ之ヲ保護スベシ云々ト答フル方ヲ宜當トスルカ、將タ我國ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、是迄朝鮮トノ交際ニ於テ曾テ支邦ノ關係ナキ事ト「セルフプロテクション」ト兩方ノ道理ヲ並ベテ答フルヲ可トスルカ如何。

（答）

兩方ニ掛ケテ返答スルヲ可トス。我公使館並ニ人民ハ我レヨリ之ヲ保護スベキニ付、彼レノ干渉ヲ要セズト云フハ餘リ角立チテ言辭ニ趣味ナシ。故ニ事ヲ和ゲテ好結果ヲ見ント欲スレバ言葉ヲ兩方ニ掛ケ、我ガ求ムル所ハ既ニ朝鮮ニ向テ要求シアレバ、夫ニテ滿足ノ結果ニ至レバ可ナリ。併シ支那ヨリモ我滿足ノ結果ニ至ル事ニ更ニ盡力アレバ大ニ滿足スル所ナリトノ趣意ニテ答フベシ。

（筆記者云）此答ヘハ問者ノ趣意ヲ誤解シタルモノニテ、兩方ノ道理ヲ並ベテ答フル云々ノ問ニ對シ、適當ノ返答ニアラバ、併シ答ヘノ趣意ハ「自分ハ自ラ保護スベシ、汝ノ世話ヲ要セズ」ト只一粹氣ニ言放ツハ徒ラニ支邦ヲ激サスルノミニシテ益ナシ、寧ロ自分ハ自カラ保護スルト云フ事ハ實際ニ行フ事ニテ、可成平和ヲ主トシ、支邦ト朝鮮トノ間ニテ爲ス事ハ差支ナキニ付、支邦ヲシテ此事ノ好結果ニ至ル事ニ幾分カ盡力セシムルニ言葉ヲ掛ケ、婉曲ニ返答スル可トスルノ旨意ナリ。

（問）

茲ニ一ノ反對說アリ、成程我ハ我滿足ノ償ヲ得レバ今度ノ事ハ濟ムベシ、將來ニ向テ支邦ガ朝鮮ノ保護人タル事ヲ日本ニ於テ認ムル事ニナリ、是迄日本ハ朝鮮ト條約ヲ結ブモ全ク朝鮮ヲ獨立國ト認メ、支邦ニハ關係ナキニ如此關係ヲ生ズルハ不可ナリ、此事ニ付貴說如何。

（答）

夫等ノ反對說アリトモ決シテ將來ノ障害トハナラザルベシ。何トナレバ支那ガ立入ルト云フモ、朝鮮ノ爲メニスル迄ニテ、日本ノ關知スル所ニアラザレバナリ。且ツ假ヘバ今魯米政府ガ立入リテ朝鮮又ハ日本ノ爲メ盡力スルトセンカ、一概之ヲ謝絕スル譯ハナカルベシ。支那ガ立入ルモ亦同樣ナリトス。

（問）

然レバ支那ヨリ豫メ通知シテ立入ルトキハ如何。

（答）

日本ハ朝鮮政府ニ向テ滿足ヲ求ムルモノニテ、支那政府ニ向テ要求スル所アルニ非ズ、故ニ日本ト朝鮮トノ間ニ立入リ、支那政府此事ニ關係スルヲ要セザル事ナレバ、只ダ打捨テ置キ可ナリ。今一例ヲ擧ゲレバ臺灣ノ件ノ如キモ、英公使ノ盡力ニテ支那政府ハ到底五十萬テールヲ日本政府ニ出シ事濟ニ至レリ。乍去英國ハ支那ニ於テ本屬ノ權ヲ有スト云フ者アルコトナシ。且ツ支那ヨリ照會アルニ至テハ最早時機ヲ後レタルモノナリ。支那政府ガ照會ヲ發スル前ニ於テ日本政府ハ朝鮮政府ニ要求ヲ申入レ置カズデハ不相成事ナリ。

（問）

臺灣ノ件ニ於テ英公使ノ盡力云々ハ、今朝鮮ノ事件ニ付テ支那政府ガ干涉スルトハ少シ其例ヲ異ニセリ。何トナレバ支那ハ朝鮮ヲ認メ屬國トスル故ニ之ニ干涉スト明言シタリ。

（答）

夫レニテモ差支ナシ、日本ハ支那ニ頓着セズシテ可ナリ。決シテ心配スルニ及バズ。日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、日本ノ朝鮮ニ對スルハ全ク他ノ外國ニ於ルト同樣ナリ。日本ハ朝鮮ト交際スルニ於テ曾テ支那ノ手ヲ經タルニ非ラズ。日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、自カラ行テ條約ヲ訂結シタルモノナレバ、何處迄モ支那ハ干渉ハ頓着セズ、一直線ニ進デ朝鮮ニ對シ滿足ヲ求メテ可ナリ。例ヘバ土耳古ノ埃及ノ關係ニ於ケルハ支那ト朝鮮ノ關係ニ於ケルヨリ更ニ大ナリ、然レドモ埃及人ガ暴擧ヲナシタリトテ英佛ハ土耳格ニ頓着セズ直ニ埃及ニ向テ處分セリ。故ニ朝鮮ノ事件ニ付キ支那ヨリ喙ヲ容ルヽモ、支那ニハ用ナシト云テ頓着セズシテ可ナリ。

（問）

支那ヨリ既ニ照會アルニ至テハ最早時機ヲ後レタルモノナリ云々ノ貴說アリ、然レバ日本政府ニ於テ若シ時機ヲ後シ、支那政府ニ先シゼラルノコトアルトキハ如何カ處置スベキカ。

（答）

今日ハ戰ヲモナシ得ベク、又益々親和ヲ固フスルコトヲモナシ得ベシ。若シ日本政府ノ意ハ主戰ニ在レバ、此方針ニ從テ計畫ノ順序ヲ立テザルベカラズ。若シ又主和ニ在ルカ、亦此線脈ニ隨テ事ヲ議セザルベカラズ。故ニ戰ヲ主トスルト和ヲ主トスルトニ依テハ大ニ其順序ヲ異ニスルナリ、敢テ問フ日本政府ノ主意ハ開戰ニアルカ將タ和親ニアルカ。

（井上云）

此等ノ機略ハ予モ之ヲ知ラズ、且和戰ノ機ハ專ラ支那ノ事情ニ關スルコトナリ、而シテ今日支那ノ事情ハ未ダ分明ナラザルモノトス。

（ボアソナード云）

貴答ノ趣御尤ナリ、然ルニ今回ノ事ハ所謂雨フリテ地堅マルガ如ク、之ニ依テ亦支那トノ交

際ハ益々親和ヲ厚クスルニモ足ルベシ。請フ試ニ予ノ鄙見ヲ陳述セン。

予ノ考ヘニテハ現今日本ノ最モ恐ルベキモノハ魯國ナリ。支那ハ日本ト戰ヲ開クトモ、魯國程ノ毒害ヲナスノ意思ナシ。何トナレバ支那ハ日本ト天然ノ同盟國ナリ、支那ハ日本ト人種文字風俗宗教ヲモ同フスルノ國ナレバナリ。到底歐洲ニ對シ東洋ノ勢威ヲ張ランニハ、日支兩國協同スルニアラザレバ能ハズ。且今日歐羅巴人ノ支那日本ヲ視ル常ニ輕蔑シテ一等ヲ下シ、決シテ同等視セザル程ノ有樣ナレバ、日支ノ協同ハ尙更緊要ノ事ナリ。

故ニ現今ノ處ニテハ到底日支協同ノ目的ヲ以テセザレバ不可ナリト思惟ス。

且ツ今日魯國ガ朝鮮ニ手ヲ出サヾルハ畢竟國內虛無黨ノ困難アルガ爲メナリ。若シ一朝內治ノ整フニ至ラバ忽チ朝鮮ニ手ヲ出スヤ必セリ。既ニ北ハ「カラフト」ヲ取レリ、朝鮮國ノ港ノ一ツヤ二ツハ忽チニ取ルベシ。

今支那ト日本トノ間ニハ互ニ相好ミセザルノ情アリ、其故ハ究局支那ノ方ニ嫉妬心アリ、日本ハ小國ナルトモ進歩ノ敏速ナル遠ク支那ノ及ブ能ハザル所アレバナリ。乍去宇內ノ大勢上ヨリ觀察スルトキハ、日支兩國ノ東洋ノ關係ニ於ケル到底此兩國ニシテ離ルレバ亞細亞破レ合スレバ歐洲ニ拮抗スルヲ得ベク、兩國ノ協同ハ最モ肝要ナリト謂フベシ。

今若シ日本ニ於テ政治家ノ大家出デテ能ク日本支那朝鮮ノ三國ノ同盟ヲ結ブニ至ラバ、俗ニ所謂ル鬼ニ金棒ナルモノニテ、魯國ニ對スルニ決シテ恐ルヽニ足ラザルベシ。

（問）

爰ニ一ノ問題アリ、日本ニ於テ極テ困ルコトハ支那ハ常ニ公法ニ拘ハラズシテ漫然一ノ辭柄ヲ把持ス、今度朝鮮ノ事件ニ於テ此電報ニ云フ所ノ如キ亦其ノ轍ニ依ラントスルニ外ナラザルベシ。臺灣ノ件ノ中モ然リ、琉球事件ノ時分モ亦然リ、其辭柄トハ他ニアラズ、支那ト日本ノ條約第二款ニ、双方ノ邦土屬邦互ニ相侵越セズトアルヲ以テ、終結之ヲ把テ論ズルナリ。故ニ今朝鮮ノ如キモ日本若シ兵ヲ引テ朝鮮ニ到レバ、卽チ支那ノ屬國ヲ侵シタリト云ヒ、以テ論難セントスル積ニ相違ナシ、其時ハ如何シテ可ナルカ。

（答）

夫レハ差構ナシ、若シ支那ニ於テソンナコトヲ云フモ、ソレハ畢竟彼レノ都合ニテ云フコトニテ、日本ニ於テハ朝鮮ヲ獨立國ト認メ、支那ノ世話ニ予カラズシテ條約ヲ結ビシニアラズヤ

故ニ若シ日本ニ於テ支那ノ邦土内ニ立入リ侵ストキハ格別ナレドモ、朝鮮ハ夫レトハ異ナリ、支那ニ於テ彼是云フハ差構フニ及バヌコトナリ、爰ニ今貴國ニ對シ陳述シタルコトヲ總括スレバ、日本ハ朝鮮ヲ獨立國ト認メテ條約ヲ結ビ、是迄朝鮮トノ交際ニ於テ專ラ支那政府ノ手ヲ經タルコトナシ、故ニ今日支那ガ干渉ヲナスモ我ハ之ニ頓着セズシテ可ナリ。日本ハ支那ト咄ヲナスニアラズ、朝鮮ニ向テ滿足ノ償ヲ要シ、此局ヲ結バント欲スルナリト云フニ在リ。併シ予ノ考ヘニテハ日本ハ動モスレバ支那ヲ敵視スルノ狀ニアリ、是レハ極メテ得策ニアラズ。支那ハ魯ニ對シテハ「クルジア」ノ一件モアリ、魯國ヲ怨メリ、故ニ今日本ハ支那ト親和シ易シ到底日支兩國協同シテ歐洲ニ對スルヲ得策トナスナリ。

韓國事件答議續稿

清國ハ第一ニ日本公使館及ビ日本國民ヲ保護センガ爲メ、第二ニ韓國ノ叛亂ヲ鎮壓センガ爲メ日本ニ對シ好誼居中（ボンフオイス）ノ照會ヲ致セリ。而シテ其照會書タルヤ韓國ノ清國藩屬ノ國タルコトヲ引證シテ之ヲ立論セリ。

問者余ニ諮フ清國ノ此兩旨ノ照會ニ對シ余ニ於テハ何等ノ回答ヲ爲サントスル歟ト。

今之ガ答議ヲ革セントスルニ際リ、余モ亦タ問者ニ對シ一問議ヲ發スルヲ得ベシ。曰ク問者ニ於テハ清國ト杆者矛盾ニ及バントスルモノ歟、將タ亦之ニ反シ禮讓恭敬ヲ守ラントスルモノ歟ト。

然ト雖モ問議中本點ニ付政府見ル所ノ如何ヲ指示セラレザルニ依リ余ハ、全ク余ノ一個人ノ思想ニ據テ之ガ回答案ヲ革セントス。

一、清國ノ韓國ニ附スル藩屬國稱ノ當否ヲ論議スルハ余之ヲ無要ノ事ナリト信ズ、蓋シ韓國ニシテ清國ノ藩屬國タルニモ將タ否ラザルモ、日本ニ於テ何ノ關スル所カアラ

ン。韓國或ハ實ニ清國ノ藩屬國タルベキナリ、然ト雖モ其曩ニ日本ト條約ヲ締結シタル行爲ノ顚末果シテ如何彼レ實ニ清國ノ幇助ヲ待タズシテ獨リ自ラ之ヲ決行シタルニアラズヤ。而シテ清國ニ於テモ亦タ此際其條約ヲ批准シ又タ之ヲ保證スル等ノコトヲ爲サヾリシニアラズヤ。

韓國ハ極テ日本ヲ凌辱シタリ、日本ハ彼レニ對シ何時ニテモ其望ム所ノ賠償ヲ要求スベキナリ。

二、日本ハ自ラ其賠償ヲ要求シ、之ヲ徵取シ及ビ殊トニ自ラ其公使館並其韓國在留國民ヲ保護スルニ充分ノ兵力ヲ有セリ。

三、日本ハ毫モ清國ノ中保ヲ請ハズ、亦之ヲ受ケズ、其好誼居中ノ如キモ亦タ然リ、但シ清國ニ於テ韓國ヲシテ日本ノ正當ナル要求ニ應諾セシメンガ爲メ、其韓國ニ對スルノ勢力ヲ用ユルコトアルヲ見ルハ日本ノ喜悅スル所ナル旨ヲ告知スルハ之ヲ爲スコトヲ得ベキナリ。

余ノ考按スル所大略右ノ如シ。故ニ余ハ回答案ニ於テ右二未項ノ思想ヲ記入セントス。其文左ノ如シ。

……

右回答案ノ如クセバ將來清國トノ交際ヲ破フルノ虞ナク善良關係ノ開路ヲ存スベキナリ。故ニ余ハ之ヲ以テ日本ノ最良ノ政略ナルベシト確信ス。

千八百八十二年　八月九日　於東京

ボアソナード記

通告文按(佛文譯)

ボアソナード

我天皇陛下ノ政府ハ韓國ヨリ受ケタル重大ノ侵辱ニ關シ、清國政府ノ照會ヲ辱フシ、其懇情ヲ銘謝スト雖モ爰ニ之ヲ拒辭スルノ已ムヲ得ザルヲ告ゲントス。

清國ト韓國トノ間ニ如何ナル政治ノ關係アルヤヲ知ラズト雖モ、日本政府ハ韓國ヲ認メテ一ノ獨立國トナシ、以テ條約ヲ締結シタリ。故ニ韓國ハ其行爲ノ責任アルベク、且ツ日本政府ノ要償ヲ求ムルハ專ラ韓國ニ於テスベシ。

日本公使館及ビ日本國民ノ保護ニ就テハ日本政府獨リ之ガ處辨ヲ爲スベキナリ。

清國政府ニ於テ若シ韓國ヲシテ日本政府ニ對シ總テ其要求スル所ノ滿足及ビ總ベテ其將來ニ對スル保護ヲ與ヘシメンガ爲メ、其韓國ニ於ケル勢力及ビ親愛ノ關係ハ使用スルヲ必要ナリト思考スルニ於テハ、天皇政府ハ茲ニ兩國ノ間ニ益鞏固ナルヲ望ム所ノ親愛ノ好誼ノ爲ニ新ナル保證ヲ見ルコトヲ喜ブベシ。

韓國事件答議續稿

日本ヨリ韓國ニ其要求ヲ示スニ及ビ、韓國若シ其國ノ清國ノ保護ノ下ニ在ルコトヲ引證シ、若クハ其藩屬封冊ノ國タルコトヲ自認スルコトヲ引證シ、仍ホ此新位地ニ依テ條約ノ改正ヲ請求スルニ至ラバ日本ニ於テ將サニ何等回答ヲ爲スベキ歟。

余ハ此ノ問議ヲ左ノ二點ニ分テ論ゼントス。

第一點　日本ハ獨立國タル韓國ト條約ヲ締結シタルモノニシテ、其條約ノ干犯ハ此獨立國タリシ際ニ於テ之レアリタルモノナリ。而シテ韓國ハ一個ノ獨斷ヲ以テ其義務ヲ免ル、コト能ハザルモノナリ。故ニ日本ハ韓國ノ使用スル遲滯ノ手段ヲシテ完償ノ拒絶ヲ爲スモノト認了スルノ旨ヲ回答センコトヲ要ス（卽チ拒絶ノ場合ニ於ケルト均シク措置スベキナリ）。

第二點　余ハ韓國ニ於テ若シ其國ノ清國管下ニ在ルノ確證ヲ示スニ於テハ、日本ハ條約ノ改正ヲ拒絶スルコト能ハザルベシト信ズ。

日本ハ之ヲ保續スルノ善良ナリト認ムル以上ハ、能ク其最前條約ノ條欵ヲ保持スルヲ得ベシ。清國ハ韓國負擔義務ノ繼續者タルヲ以テ、必ズ之ヲ遵守スベキノ理ナレバナリ。然リト雖ドモ將來其執行上困難ノ起ルアルトキハ卽チ清國ト關係ヲ有スルモノナルベシ。

韓國ニ於テ眞ニ其獨立國タルヲ自拋シタルニ非ザレバ、日本ハ韓國負擔ノ義務ヲ免レタルモノト揚言スル能ハズ。

千八百八十二年　八月十日

於東京　ホアソナード記

答議

半屬國タリトモ仍ホ外國交際條約ヲ結ブノ權アリヤ是ヲ再言スレバ外國ト條約ヲ結ブハ自主ノ證徵トスベキヤ。

若シ半主半屬ノ邦ニシテ外國ト條約ヲ結ブトキハ其條約國ト紛難ヲ生ジタルトキニハ其保護國ハ是ニ干涉スルノ權アルベキヤ。

朝鮮事件ニ付テノ意見

一般ニ半屬國ハ政事上ノ性質ヲ有スル和親條約ヲ結ブノ權ヲ有セザルモノトス。若シ然ラザルニ於テハ半屬國ニ對シテ管轄權（シュズレンテイ）ヲ有スル所ノ國ハ、其ノ盟約（アリヤンス）ヨリ一層有力ナル他ノ盟約ノ爲メニ其ノ管轄權ヲ失フノ危險アルベシ。

故ニ某國（乙）ニ於テ丙國ノ故障モナク、干涉モナクシテ他ノ國（甲）ト和親條約ヲ專結ス

ルノ單ナル事實ハ、卽チ乙國ノ獨立タル事ヲ推定(プレゾンプシオン)スルヲ得ルモノトス。

或ハ乙國ハ丙國ノ屬國ナルモ、此ガ監護ヲ免カレンガ爲ニ外國ト條約ヲ專結スル事アリ、若シ一方ノ條約國（甲）ニ於テハ乙國ノ丙國ニ屬スル事ヲ知ラズシテ善意ヲ以テ之ト條約ヲ結ビタルトキハ、甲國ヲシテ乙國ノ丙國ノ附庸タリ、且ツ該附庸ノ義ハ條約締結ノ同時代マデ溯ルノナル事ノ證ヲ確知セシムルマデハ、甲國ハ其ノ條約ヲ維持シ之ヲ履行セシムルコトヲ得ルモノトス。

前ニ述ブル所ノ場合ニ至ラザルマデハ、欺ヲ受ケタル所ノ甲國ハ依然條約ヲ有シ而シテ該條約ノ違背(ヴヒオラシオン)ヲ訴(プレンドル)フルコトヲ得ベシ。

埃及ノ位置ハ此ノ問題ニ付キ一先例ヲ與フルモノトス。土耳格ニ對シテ埃及ノ附庸國(シユゼシオン)タル事ハ確然ナレドモ、世ノ未ダ詳ニ知ルコトヲ得ザル所ノ者ハ（埃及ト土耳其トノ間ニ祕密條約アルガ故ニ）埃及ハ何レノ點マデ外國ト直チニ條約ヲ專結スルヲ得ベキヤ是レナリ。埃及ハ佛朗西及英吉利ト屢々條約ヲ締結シタリ。故ニ此等ノ諸强國ハ其條約ノ或ル條規ヲ履行セシメン爲ニ之ガ保證ヲ得ン爲ニ又埃及ノ財政ヲ整頓セン爲ニ、埃及ノ政務ニ屢々干涉シタル事アリ。

故ニ此ノ疑件ニ付テハ確定シタルノ法則(レーグル)アラザルモノトス。

若シ半屬國ニ於テ外國ト條約ヲ專結シ該半屬國ト他ノ條約國トノ間ニ重大ノ紛難ヲ生ズルトキハ、管轄國若クハ保護國ハ該條結締結ノ時ニ於テ其權理ニ付キ抗論(プロテスタシオン)ヲ爲シタルニアラザレバ之ニ干涉スルコトヲ得ズ。苟モ該條約ニシテ一切祕密ナル事ナク、且其執行久キヲ經タルトキハ管轄若クハ保護國ト自稱スル所ノ丙國ハ其沈默(シランス)シタル事ヲ以テ既ニ該條約ヲ認許(オトリザシオン)シタルモノトス。故ニ該條約將來ノ執行ニ付及ビ該條約ノ違背ニ對スル賠償(レパラシオン)ニ付キ之ニ干涉スルコトヲ得ズ。

然レドモ保護國ニ於テハ現爭兩國ノ間ニ懇親上ノ干涉ヲ爲スヲ得ルハ當然ナリトス。保護國又ハ附庸國ヲシテ其ノ約束ヲ完全ニ履行セシメン爲ニ之ヲ催迫スルコトヲ得ベシト雖ドモ、現爭兩國ノ談判ヲシテ其紹介ニ依ラシムベシト要求スルコトヲ得ズ。若シ此ノ如クスルニ於テハ被害國ヲシテ緩慢詐謀ノ害ヲ受ケシムルノミナラズ、其內ニ破約國ヲシテ抵抗ノ方便ヲ構成スルコトヲ得セシムルニ至ルベシ。

且此ノ問題ヲバ此ノ如クニ理論及法理ノ點ヨリ驗究スルハ然ルベカラズト思考ス。萬國公法ハ數多ノ國ニ於テ民法ノ如クニ編成シタルモノニアラザルナリ。

此ノ問題ニ關スルヲ先例トスルニ足ルモノナシ。何トナレバ日本ト朝鮮トノ關係及朝鮮ト支

那トノ關係ニ同樣ナル兩個ノ情況ハ世ノ未ダ之レアラザル所ナレバナリ。

日本ハ朝鮮ト支那トノ關係ニ付テハ已ニ充分ニ之ヲ知ラレタル筈ナリ。何トナレバ日本ハ今ヲ去ル六年前ニ此ノ事情ヲ知ランガ爲メニ特ニ北京ニ特命全權公使ヲ派遣セラレ、又之ト同時ニ侮辱ノ謝罪ヲ得ン爲ニ朝鮮ニモ公使ヲ派遣セラレタレバナリ。遣清特命全權公使ハ歸朝ノ節其使命ニ付キ復命書ヲ編纂セラレタル筈ニテ、該復命書ハ外務省ノ記錄ニ貯藏セラルヽ所ナルベキ筈ナリ。

東京　千八百八十二年　八月十三日

ボアソナード手署

宇川盛三郎譯

朝鮮事件ト清國ノ干渉ニ付ビートン氏意見

朝鮮國ニ於テ起リタル今回ノ事件ハ、或ハ該國ニ關シ清國ノ計較ト企圖トヲ齟齬セシメタラン。清國ハ日本公使館ニ與ヘタル暴擧ノ結果ハ、日本ガ朝鮮ニ對シ名聲ヲ得且尙一層ノ勢力ヲ獲ルノ方途ヲ開クヲ知ルノミナラズ、此機ニ乘ジ日本ガ强迫ノ意旨アランカト疑フナリ。

右等ノ結果ヲ少シナリトモ妨障センガ爲メ、清國ハ今朝鮮ヘ兵ヲ送ラントス。而シテ是時ニ方リ其斯クスルモノハ大ニ日本ニ困難ヲ與フベキヲ知ルガ故ナリ。

反覆常ナク前言ヲ食シテ顧念スル事ナキハ則清國今回ノ著シキ擧動ニシテ、彼ガ不良ノ志ヲ抱ク事判然タリ。

清國ノ附庸タリトノ一事ハ名義ニ於テハ異義スルモノナシト雖ドモ、之只名義ノミ。然リ日本ガ朝鮮ト條約ヲ締結セシトキニ當テ、清國ニ於テハ朝鮮ヲ以テ附庸ト稱セシモ（東方亞細亞ノ小國中多クハ清國稱シテ屬國ト言フ）彼ノ內治外交ヲ管スルノ權力ヲ有セズト明言シタリ。

故ニ何ゾ先ニ棄却シタル權利ヲ今日更ニ享有セン事ヲ要スルヲ得ンヤ。近來他國ノ政府ニ向テモ更ニ右ノ權利ヲ辭退セシニアラズヤ。

故ニ今日ニ至テ右ノ權利ヲ主張スルハ最モ不法ノ事ニシテ、條理上默止スベカラザルモノナリ。故ニ余ノ意見ニテハ日本ニ於テ清國ガ自定シタル位置ヲ是認スル事ヲ拒ムトモ條理盡ク日本ニアリト思考ス。

日本ハ清國ノ公言ヲ信據シ、朝鮮ヲ認メテ獨立國トシ、之ト獨立ノ條約ヲ結ビタリ。故ニ此ノ條約ヲ破棄シ國旗ニ與ヘタル侮辱ニ對シ、日本國ハ同ジク獨立ヲ基礎トシテ彼ト談判スルノ理アリ。

故ニ日本ハ宜シク痛ク清國ガ兵ヲ送ルノ擧ヲ尤メ、機ニ乘ジテ清國ガ如斯擧アルハ日本ガ朝鮮ト談判ヲ結了スル事ヲ大ニ妨グル所以ヲ示指シ、加之同ジ海洋ト港灣内ニ兩獨立國ノ軍隊ノ現在スルハ双方軋轢ヲ生ズルノ恐レアリ、朝鮮トノ談判ノ妨碍トナル事少カラズ。

共同ヲ以テ處分スルハ不可行ノ事ナリ。何トナレバ兩國ガ干渉セント欲スル點ハ各相異ナルノミナラズ、各自朝鮮ニ對スル關係ハ全ク相反對スルナリ。若シ清國ノ軍隊ノ現在スルガ爲メニ不幸ノ結果ヲ來ス事アラバ其責清國ニアルナリ。

日本ハ强迫ノ意志ナキヤトノ清國ノ疑ハ我ガ威儀ヲ損スル事ナクシテ之ヲ消散セシムルヲ得ベシ。而シテ此目的ヲ達スル爲メニハ日本ニ於テ私圖ナキヲ十分ニ保證シ、其派遣シタル兵卒ノ小數ナル事ヲ指シ以テ其言ノ僞リナラザルヲ證スベシ。而シテ尙保證ヲ一層十分ナラシメンガ爲メ、今回ノ事件ヲ朝鮮ト直接ニ結了シ（今回ノ事件ハ我ト彼トノ間ノ事ナリ）賠償ヲ得テ從前ノ如ク我地位ヲ彼國ニ復シタル後ハ、朝鮮ノ地位ニ關シ清國ト完全ノ調和ヲ得ンガ爲メ、和親ノ談判ヲ開クモ妨ナキヲ明言スベシ。乍然余ガ懸念シテ止マザルモノハ、若シ清國ノ意志ヲシテ日本ガ自カラ其地位ヲ朝鮮ニ向テ復スルヲ徹頭徹尾拒ムニアラシメバ、設令如何ノ保證ヲ與ユルモ彼必ズ今回ノ企圖ヲ止メザルベシ。

千八百八十二年　八月九日

朝鮮並ニ清國干渉ノ事

屬邦朝貢ノ結果ニ關スル意見

獨立國トハ其內治外交ノ事ニ關シ完全ノ獨立ヲ享有スルモノヲ謂フ。凡ソ國ハ自己ヨリ尙一層强盛ナル隣國ノ威力己ガ上ニ出ヅルヲ識認シ(假令バ國力不平均ノ國々同盟スルモノ是ナリ)或ハ貢獻ヲ爲ストモ、之ガ爲メニ其獨立ノ資格ヲ失フ事ナシ。斯ノ如キ地位ヲ有スル國ハ他國ノ保庇或ハ保護下ニ在リト雖ドモ、其版圖內ニ在リト云フ可カラズ。且此地位ヲ保有シテ其主權ヲ失フ事ナシ。此關係ノ實ヲ確知スベキ適當ノ方法ハ、保護ヲ受クル國ニ於テ保護ヲ與ル國ノ意向如何ヲ省ミズ、他國ト談判シ講和或ハ開戰スルノ力ヲ觀ルニ在ルナリ。斯ノ如キ地位ニ在ル國ハ(歐洲萬國公法ニ依レバ)萬國中ノ一獨立國ト看做セリ。假令ハネープル王國ノ如キ一千八百十八年迄ハ名義上羅馬法王ノ屬邦タリシト雖ドモ、該王國ハ之ガ爲メニ歐洲ノ一大國タルノ地位ヲ損シタリト看做スモノハ決シテ無カリキ。是故ニ斯ノ如キ國ノ權利義務ト異ナル事ナク他ノ國々モ此ノ意ヲ以テ該國ニ對セザル可カラズ。

バーバリー諸國ハ名義上ニ於テハ土留斯國ノ上國タル事ヲ充分ニ識認シ、土留斯帝ハ實際ニ於テ該諸國外交ノ事ヲ管理スルノ權ヲ主張シ、且ツ之ヲ有スルヲ以テ、該諸國ハ土帝セリ總テ其權力ヲ得ルト雖モ、或ル場合ニ依リテハ此等ノ諸國ハ實際獨立國ノ待遇ヲ受ク、且ツ他ノ國々ハ其臣民ノ此等ノ國ヨリ損害ヲ受ケタルトキハ、其伸寃ノ道ヲ第一ニ直チニ此等ノ國ヘ要求督促シタリ。而シテ此等ノ國ハ土留斯國ヲ保護國トシ、自己ハ其屬邦タルノ地位ハ依然トシテ充分ニ認定セラルヽヲ以テ、他ノ諸國ハ此等ノ國ヘ公使ヲ駐劄セズシテ領事ノミヲ在留セシム

今回ノ事件ニ於テハ、日本ハ朝鮮ヲ待ツニ獨立國ヲ以テシ、且ツ該國ヨリ直接ニ伸寃ノ道ヲ求ムベキ充分ノ權利アル事ヲ明示スル爲メニ、別ニ辯論ヲ陳述スルニ及バザルナリ。然リト雖ドモ清國ニ於テ今回朝鮮國政府ガ內訌ノ爲メニ顚覆セラレタルヲ回復センガ爲メ、該國ノ內事ニ干渉ノ權ヲ主張スル事ニ關シテハ、縱令清國ニ於テ朝鮮國ノ內事ニ干渉スルノ權ヲ抛擲スルニ係ハラズ、清國ハ重要ナル政略上ノ理由ニ依リ尙左ノ權利ヲ主張スル事ヲ得ルナリ。乃チ單ニ朝鮮國ノ內政ニ干渉スル事ト異リ、該國ノ國體ニ係ル變亂ニ際シテハ、之ニ干渉スベキ權是ナリ。抑清國ハ朝鮮國ト政略上ノ關係アリ、又清國ハ朝鮮國ニ對シテハ縱令實際ニ於テハ(保護國ノ權利アル事ヲ是認スベカラザルモノニモセヨ)他國ヨリ猶一層直接ノ關係ヲ有セリ。如何トナレバ貢獻ノ事ハ事實ナリ。且名義上ニ於テ朝鮮ハ清國ヲ仰ヒデ其保護國ト爲セバナリ。

此關係ノ存在スル上ハ清國ハ其一隣國ノ國體ニ拘ワリ、且是迄清韓兩國間ニ存スル所ノ保護國及屬邦ノ關係（孰レニシテモ兩國ニ就テ云フトキハ）ヲ妨碍セントスルノ恐レアル變亂ニ際シテハ、之ニ干渉スルノ權利ヲ得ルモノニシテ、此權利ハ政略上ノ關係ヲ理由トシテ數々主張シタル干渉權利ノ上ニ出ルモノナリ。

此ノ最後ノ考案ニ依テ斷ズルトキハ、日本ハ獨リ朝鮮政府事件ノ結局ニ政略上ノ關係アル事ヲ示サンガ爲メ、日本ニ於テ正當ノ賠償ヲ得ルマデハ清國ノ干渉ヲ省ミザル事ヲ主張スル事ヲ得ルト雖モ、彼ノ清國ガ朝鮮國ノ內事ニ干渉スル事ヲ拗棄スルヲ奇貨トシ、之ヲシテ今回朝鮮國ノ變亂ニ際シ該國政府整理ノ事ニ付キ一切之ニ關係セシメザルハ過當ノ處置ト云フ可シ。

總署ト米公使トノ談判

六月十八日晴、大使平井ヲ率ヒテ米國公使ヲ訪ヒ、前年同公使朝鮮ニ物セシ時、清政府ニ因テ朝鮮ト書通アリシ由、其頃清政府ヨリ何等ノ議論ヲ起セシ事有リヤト問フ、公使曰ク別ニ議論無シ、但一ノ公文ヲ存セリトテ左ノ書啓ヲ錄メ送リ來ル。

其文ニ曰ク

逕啓者、本年正月十七日、准貴大臣照會、稱本大臣、今年派充出使、朝鮮之公使往議交涉事宜擬先致函於朝鮮、請代奇至該國等語、本衙門以朝鮮雖係屬國、一切政敎禁令皆由該國主持、中國向不過問、此信卽由本衙門奏、交禮部轉達該國、有無回音難以預度、己與貴大臣言明當於正月二十二日具奏、請由禮部備文、將原函轉交朝鮮、並知照禮部去後茲准禮部覆、稱己於二月初二日具奏、將原函封固、送交兵部由驛轉遞、並聲明中國於所屬各邦禮部舊章、實無代遞書函之事、現雖奏請辨理、乃一時權宜之計、通融格外、以後不能再遞等因、相應奉聞、專此佈泐、順頌日祉

二月初八日

（右ハ同治十年ノ事ニテ卽我明治四年ニ當ル）

明治六年六月二十一日　副島大使ノ命ニ因リ柳原鄭總理衙門大臣ヘ臺灣事件ニ付談判中、隅々朝鮮ノ事ニ語及候件拔萃ニテ及セル事アリ、之ヲ拔萃要略スレバ左ノ如シ。

茲ニ朝鮮ハ貴國及ビ我國ノ間ニ介立シテ兩國ニ往來スルヤ久シ、前年米國駐京公使將ニ彼國ニ事有ントセル以前、其書信ヲ貴衙門ニ託シテ朝鮮ニ寄センコトヲ請求セシ時、貴國ハ彼ヲ屬國ト稱スルトモ內政敎令ニ至テハ皆關與スルコト無シトノ答有リタル由是亦果シテ然ル乎。

彼曰、屬國ト稱スルハ舊例ヲ循守シ封冊獻貢ノ典ヲ存スル而已故ニ如此回答セシ也。

柳曰、然ラバ彼國ノ和戰權利ノ如キモ貴國ヨリ絕エテ干與スル所ナキ乎。

彼曰然リ、

柳曰、彼國モ亦我近隣タルヲ以テ我大臣ハ現ニ彼ヘ交友ヲ望ミタレバ此邊ヲ最モ注意セラルル所也。

菊地中尉及仁禮少將ノ電報

參謀本部　山縣中將　馬關　菊地中尉

去ル十六日花房公使護衞一中隊半ト共ニ仁川府ヲ發シ、揚花津ヲ經テ南大門ヨリ午後八時異狀ナク京城內ニ入ル。假ニ公使館ヲ京城內ナンブデイケンニ定ム。未ダ本談判ヲ開カズ、高島仁禮ノ兩少將ハ十七日陽花津ニ着、翌十八日直ニ入京ノ筈ナリ。下官十七日午後第二時明治丸ニテ濟物浦ヲ拔錨只今着明朝出帆委細ハ歸京ノ上上申ス。

八月廿日夜

八月廿一日午前二時二十分馬關發
三時着

菊地中尉及仁禮少將ノ電報

仁川港　金剛艦

仁禮海軍少將

當艦九日、日進艦、十一日、明治丸十二日、比叡艦十四日、清鮮艦十六日、當港着、公使ハ十六日、本官及高嶋ハ十七日入京、支那軍艦三艘入港、一般十二日出港、不日二艘ト陸軍千人來ルトノコト委細ハ郵便。

竹添進一郎ノ電報要領

大院君ヨリ使者ヲ以テ暫ク漢陽府ニ來ルヲ見合セ吳レヨト屢々花房ニ請願セシカドモ、花房ハ右ニ關セズ進ミ入タリ。大院君ハ特ニ花房ノ爲メニ城内ニ家ヲ新築シテ最モ懇切ニ待遇ス。花房ヨリ二日前馬建忠ハ軍艦三隻ヲ携ヘテ仁川灣ニ入リタリ。而シテ馬建忠ト花房ハ各自ノ軍艦上ニテ通信セリ。拙者ハ花房ヨリ二日後レテ入港シ、十五日仁川府ニテ花房ト面會シ、船ニ還リ、余ハ馬建忠ト兩回ノ筆談ナセシガ、馬建忠ハ朝鮮ヘ對スル我處置ノコトニ付別段懸念スルトコロナク、唯日本ヘ爲シタル暴動ニ付謝罪スルコトヲ朝鮮ヘ勸メ、且又我要求ノ過當ナラザランコトヲ冀望セリ。十二日馬建忠ハ軍艦一隻ヲ天津ヘ返シ、自分護衛ノ爲メ李鴻章ノ護衛兵ヲ求メタリ。朝鮮ハ馬建忠ノ軍艦ヘ絶ヘズ往復シ、大院君ハ馬建忠ヘ漢陽府ヘ來ランコトヲ强テ促スコト兩回ナレドモ、彼ハ十八日ノ朝マデハ上陸セザリシ。其故ハ護衛兵ノ來ラザリシガ爲メナリ。

一千八百八十二年　八月二十一日

竹添進一郎ノ電報要領

午前四時十五分　發
午前五時四十分　着
馬關ニテ　竹添進一郎

元田永孚上奏文

臣永孚誠恐誠惶頓首謹言

昨夜九時號外官報ニ接シ井上全權大使朝鮮ニ於テ去ル八日ノ談判我要求ヲ滿足セシヲ以テ談判ヲ結了セリ、因テ大使ハ使命終リ不日ニ歸航スベシトノ特報ヲ聞ク、是誠ニ國家ノ光榮生民ノ幸福深ク。

陛下ノ爲ニ之ヲ賀ス曩者竹添公使ノ變ニ遭フヤ臣謹デ

内旨ヲ禀ク

陛下　明斷遽ニ井上外務卿ヲ特選シ副ルニ高島樺山ノ二將及護衛兵ヲ以テシテ之ヲ派遣ス是時ニ當リ臣　窃ニ外議ヲ聞クニ或ハ牛刀割雞ヲ以テ誹議スル者アリ臣　斷ジテ以テ然ラズトス夫レ良醫ノ病ムル其病ノ輕キヲ忽ニセズ速ニ投ズルニ一倍ノ良藥ヲ以テス故ニ其治スルヤ速ニシテ復餘毒ノ存スル無シ是朝鮮ノ事必ズ井上大使ノ派遣ニ非ンバ不可ナルヲ知ルナリ今ヤ速ニ其功ヲ奏スル果シテ如此

陛下ノ明斷其人ヲ得テ專任疑ハザルノ致ス所臣　敢テ明治十八年外交政治ノ先鞭ヲ賀ス更ニ願フ自今以往內政外交勵精圖治肯テ或ハ怠忽スル勿リ益々德澤ヲ黎民ニ降シ威信ヲ萬國ニ被及セラレンコトヲ臣　比日寒威ニ感觸シ宿痾復發ス直ニ趨テ朝ニ至リ陛下ノ前ニ賀スルコトヲ得ズ衷懷止ミ難シ故ニ敢テ謹テ賀表ヲ奉シテ以聞臣　永孚恐頓首再拜

明治十八年　乙酉一月十三日

伊藤參議ニ寄セタル意見

明治十五年十一月十七日附キ以テ外務卿井上馨ハ其ノ對韓問題ノ意見ヲ具シテ之ヲ參議伊藤博文ニ寄セタリ其文ニ曰ク、

朝鮮國ニ對スル將來我政府之政略ハ該國政府ヲシテ內ハ以テ實力ヲ養成セシメン爲メニ隱密ニ之ヲ輔助シ、外ハ以テ外國ヲシテ其自主獨立ヲ認メシムルノ方略ニ出ンカ、又ハ右ノ如ク輔助ヲ與フルコトナク、清政府ノ干涉ヲ箝制セズ、姑ク其所爲ニ委シ、日清國及東洋ノ平和ヲ保持センカ之二問題ニ關シ、當時內閣ニ於テ專ラ商議中ニ付、貴君之御所見如何充分御開示ヲ乞フ旨去ル一日發電セシニ十二日漸ク答電ニ接シタリ。右電文ニ據レバ、該國ヲ獨立ト爲スハ緊要ナルヲ以テ、其輩望ニ隨ヒ之ニ輔助ヲ與ヘ、且彼政府ヲシテ公然其獨立タルコトヲ宣告セシメ、曩ニ國王ヨリ米國等ニ贈致セシ書翰ヲ撤セシメ、特使ヲ歐米洲ニ派遣シ、相當ノ條約ヲ締結セシムル方可然トノ御見込之趣致領ス。然ルニ今般來航シテ朝鮮使節ガ最初ニ申出タル處ニヨレバ、只管我國ニ依リ其獨立ニ輩望スルトノ言ナレバ、其後屢々面接ノ上其實ヲ推究セシニ近日ニ至リ始テ其實情ヲ吐露セリ。其言ニ據レバ僅ニ其國王ト其他二三ノ朝士ノミノ意中ニ出

テ、最初我ニ於テ想像セシ程ノ氣勢無ケレバ、我ニ於テモ單ニ國王其他二三士ノ意ヲ以テ直チニ該政府ノ意向ナリト推測シテ之ニ出力スルハ太早計タルヲ免レズ、加之從來朝鮮國ト清國トノ關係タルヤ、朝貢奉正朔等之事アリ、又近時陳情表ヲ清帝ニ呈シ、大院君放還ヲ乞フノ事アリ、此等ノ情勢ヨリ觀察スルトキハ該政府ヲシテ其獨立ヲ公然宣言セシムルガ如キハ萬行ハル可カラザル事ト信ズ、畢竟今般使節ヨリ吐露セシ輩望トハ京城變亂ノ後、清政府ノ其内政ニ干預スルコト甚シク、彼ノ大院君ヲ拘引シ、兵隊ヲ京城ニ屯駐セシムルガ如キ壓制ヲ厭忌シ、純然其附庸タランコトヲ恐レ、成ル可ク從前ノ如ク其自主ニ委セラレンコトヲ欲シ、申出タルモノニシテ、其衷情ハ清國ノ覇絆ヲ脱シ、獨立ヲ宣言スルノ決意有リト雖、之ヲ決行スルノ氣勢ハ更ニ無キガ如ク、貴君御勸告ノ如ク國書ヲ撤回セシメ、及ビ獨立ヲ公言セシムルコトハ彼ニ取リ最モ措辨スルニ苦ム所ナルベシ。又政府ニ於テモ此際强テ其獨立ノ目的ヲ遂ゲシメントノ政略ニ出シカ、決シテ現今朝鮮ノ如キ微弱委靡ノ政府ニ委ス可カラズ、必ズヤ其内治外交ニ干渉シ、隱然之ガ參謀ノ位地ニ立チ、後來清國ノ干渉ヲ拒絶シ、併セテ從前ノ關係ヲ拒絶セシメザル可カラズ、果シテ斯ノ如クナルトキハ日清間曩キニ臺灣琉球ノコトアリ、今又我ニ於テ此擧動アルトキハ彼一層ノ怨情ヲ我ニ懷クハ勿論、勢ヒ兩國ノ和好ヲ破ルニ至ルモ未可知、然ルニ顧ミテ我内政ノ情態ヲ諦觀スルニ我海軍ノ實力果シテ此非常ノ擧ニ充ツルニ足ル可キヤノ諸點ニ至ツテ、太ダ苦慮スル所不少、假令政府現ニ鋭意之ガ準備ヲ爲シ、擧國之ガ爲メニ奮起スル所アルモ、實ニ危殆ノ至リト云ハザル可カラズ。又東洋全局ノ平和ヲ保持スルノ點ヨリ之ヲ視ルモ、此際我ニ於テ强テ其獨立ヲ成就セシメントスルハ、決シテ得策ニハアラザル可シト思考ス。將又近時清國ノ擧動ヲ窺フニ、從前ニ比スレバ一層朝鮮國ニ向テハ干渉ヲ爲スノ勢ニ相見ヘ、獨公使フオンブラント氏ノ如キハ英公使ウエド氏歸國ノ後ハ筆頭ノ地位ニ居リ、從前清政府ニ對シ抵抗ノ政略ヲ一變シ、内密ハ之ヲ輔助スル等ノ密報モ有リ、又我邦駐劄ノ各公使中種々ノ方便ヲ以テ我邦清朝之事ヲ煽動セントスルノ樣子サヘアリ。右等ハ果シテ何等ノ見込ニ出ル哉ハ判定ニ苦ム所ナレドモ、或ハ右等多事ノ際ニ乘ジ、兵器船艦ヲ賣與セントノ利己主義ニ出ルモノニ非ズヤト推察ス。而シテ萬一事アルニ臨ンデハ、右等ノ所爲アルニ拘ラズ、東洋ノ商業ヲ害スル等ヲ口實トシ兩國間ノ事ニ干渉スルモ是亦不可知、彼ヲ思ヒ之ヲ考フルトキハ拙者ニ於テモ、今日迄ハ强チ獨立ヲ輔成セントノ見込ナリシモ今日ノ形勢ニテハ容易ニ斷定スベキニ非ズト信ズ。サレバ今般來航ノ使節ニ向テモ我政策ノ果シテ那ノ點ニ任ルヤハ確然明示セズ、姑ク該國將來ノ動靜ヲ熟視シ、米國政府ニ於テハ粗ボ我意向ニ協同シ、獨立國トシテ其條約ヲ批准スルノ傾向有レバ、朝鮮國ニ於テモ各國ト直接ニ條約ヲ締結セシムル等ノ手段ヲ用ヒ、徐ロニ獨立タルノ地ヲ爲サシメ將サ

ニ爲ス所アラントスルノ見込ミナリ。右ノ旨趣ハ去ル十三日取リ敢ズ電報シ置キタレドモ文意不盡處有スベキヲ慮リ、茲ニ重ネテ開陳ス。尙右付貴君御考案之處充分御書信ヲ以テ御通報有ランコトヲ冀望ス。

明治十五年　十一月十七日

竹添辨理國王謁見後言上大意

十一月二日表向ノ謁見相濟タル後再度被召出候節言上之大意

國王曰ク　卿座ニ就クベシ。

此時椅子ヲ持來ル、國王親ラ令シテ近從ヲ退ケ、李祖淵一人ヲ傍ニ侍セシメラレタリ。

進一郎白ス　甚ダ恐縮ノ至リ。

國王曰　相親ムノ間何ノ隔テ有ラン、緩ルリト坐ニ就ク可シ。

進一郎ノ曰ス　當春御地駐留之我代理公使ヨリ電報ヲ以テ大院君淸兵ヲ率ヒ來ルトノ風說ヲ申越候故、直ニ電報ニテ北京、天津等ヘ其實否ヲ問糺シ候所、全ク無根ノ虛說ニ付、進一郎モ渡航不仕候。萬一之レヲシテ實ナラシムル時ハ、進一郎ハ素ヨリ我政府モ大君主ノ爲メニ盡ス所アル覺悟ニテ有之候。抑モ臣トシテ他國ノ兵力ヲ藉リ、其君主ニ抗セントハ天地間ニ有ル間敷道理ニ候。若シ有之ニ於テハ決シテ許

ス可カラザル儀ニ候間、各等ノ風說ニ御心慮ヲ被爲惱サル樣奉冀望候。

其砌リハ國王ヨリ密ニ中宮ヲ公使館附磯林大尉ノ許ニ被差、祕ニ寄リ王妃ヲ日本公使館ニ逃ゲ込ミ被遊度トノ內囑有之タル位ニテ、國王御夫婦平日ノ御懸念ハ只難有ノ節、日本ハ保護致シ吳ベキヤノ一點ニ在リテ、支那黨ヨリ讒ヲ入ルヽモ日本ハ眞正ノ好意ナシト云フヲ以テ口實トナス、故ニ本文ノ通リ申上タルナリ。

國王曰ク　其節ノ事ハ浮言ナリシ、且又有ル間敷事ト考ヘ居ルナリ。

進一郎白ス、國ト國トノ交際ニ至テハ體裁ヲ重ンジ、內外公私ノ分別無カラザル可カラズ、設ヘバ大君主及中宮殿下ヨリ御倚賴ノ事アル時ハ、則大君主ノ最御親愛ナル國ノ公使ヲ召サレテ直ト御申聞ニ相成ルカ、或ハ御親書ヲ以テ御申通シ相成時ハ其公使卽其政府ハ公然友誼ヲ盡シ、出來ル丈ケノ保護ヲ爲スハ同盟國當然ノ義ニ有之候。其レ故佛蘭西帝第三世ナポレオン英國ニ避亂シタル時モ、英國ヨリハ君主ノ禮ヲ以テ終身尊敬待遇セリ。併シ他國ニ依賴スベキ場合ニ臨ミ、或ヒハ御內命トカ或ハ內分ノ御依賴トカ不慥ナル事ニテハ他國ハ不得止傍觀スルノ外無之候。何ントナレバ自ラ好ンデ立入ルノ姿ニ相當リ、則干涉ニ陷リ、其國ノ自主權ヲ損害スルニ至レバナリ。其迄ハ兼ネテ御詳知被爲在候事必要ニ候。右之譯柄故、萬一事變差起ルニ當テ君主ノ體裁ヲ全シ、公然御依賴相候ニ於テハ、本使力ノ及ブ丈ケ御保護可仕ハ素ヨリノ義ニ候。若シ又我公使館危殆ニ及候時ハ、御伴申上暫ク日本ニ御避ケ被遊候モ不苦儀ト存候。公使ノ職分タルヤ其駐在國君主ノ側ヲ離レズシテ進退ヲ俱ニスル乃萬國ノ公例ニ候間、其邊モ御知悉被遊度候。

國王喜悅ノ色御面ニ溢レ曰ク　誠ニ公平ナル言ト存ズ。貴政府及貴公使ガ我國ニ對シ斯ク迄厚ク親切ヲ加ヘラルル事實ニ感謝ニ堪ヘズ、永ラク心ニ銘ジテ忘レザル可シ。

進一郎白ス　大君主ニハ開明ノ進步ニ熱心被遊、近來世界普通ノ郵便局ヲ御設置相成兵制モ同樣改正ニ御着手被爲在候事ヲ我　皇帝上ニハ聞シ召サレ、御滿足シ餘リ塡補金四十萬圓ヲ其レ等ノ用ニ御轉支被爲在候事ヲ御輩望被遊候ニ付テハ、進一郎ニ於テモ深ク御國ノ漸次開明ニ進ムヲ切望仕候。

國王曰ク　我國郵便ナク兵制ナク未ダ草創ノ際ニシテ何事モ整頓シタルニ非ズ、他國ニ對シテハ誠ニ恥シク候。

進一郎白ス　御國ノ人ハ總テ怜悧ノ稟質ナル樣被存候。其證據ハ先般我國陸軍士官學校ニ入學セシ貴國生徒ヲ以テモ可知義ニ候。素ヨリ該生徒等ノ勉强トハ申ナガラ諸學課ヲ悟リ得ル事甚ダ敏銳ナルガ爲メ速カニ卒業ニ至リ候。

徐載弼等士官ノ名ハ有之候ヘドモ、支那黨ノ爲メ彼妨實職ニ任ズルヲ得ザルニ付、本文之通申上タル義ニ候。

國王曰ク　貴政府ノ保護ト敎官トノ懇切ナル敎諭ニ賴テ斯ク速カニ卒業セシナリ感謝不少候。

進一郎玆ニ當今ノ時勢ヲ陳述候。往昔之世界ハ我亞細亞卽チ朝鮮日本支那安南ノ四國ニ止マリ候所、今日ノ世界ハ一變シテ五大洲トナリ、富强ノ國ハ總テ西洋ニ係リ火船鐵路地球ヲ環行シテ各其勢力ヲ逞フシ、亞細亞ノ諸國ハ殆ンド一隅ニ押シ除ケラレタル有樣ト相成申候。譬之ルニ西洋諸國ハ都人ナリ、此ノ輩ヨリ我亞細亞ノ諸國ヲ見ル時ハ片田舍ニ二三軒ノ藁屋有ルガ如シ。故ニ全世界ノ都人ハ此田舍者ヲ指シテ野蠻々々ト相唱ヘ申候。是亦不得止義ニ候。今都人ニ列セントスルニハ自ラ藁屋ヲ瓦屋ニ改造シ、衣服或ハ家政ノ組織等都風ニ變易セザレバ迚テモ仲間入ハ出來不申候。故ニ今日亞細亞諸國ニ在テ百般ノ諸政ヲ改良シ新事業ヲ興起セザルベカラザル所以ハ、他ナシ卽世界普通ノ法ニ倣ヒ、開明諸國ノ仲間入リヲ爲シ、野蠻ノ名ヲ免カレ、國家ヲ强大國ノ間ニ保存センガ爲メニ有之候。尤其藁屋ニ住馴レタル者ハ瓦屋ヨリモ却テ藁屋住居ヲ便利ト思事モ不少候得共、兎ニ角一國ノ存亡ニハ難替場合ニ候間、小々ノ便不便ハ舍テ論ゼズ。萬事世界普通ノ法ニ改良セザル可カラザル今日ノ形勢ニ候。

國王曰ク　藁屋ノ譬ヘ甚妙ナリ。實ニ可然事ト信ズ。

下官前文ノ通リ言上候節國王ハ殆ド我レヲ忘レタルガ如ク首ヲ近ケテ聞キ居ラレ候。

進一郎白ス　今般ノ淸佛ノ事件タル素ト條約上ノ行違ヨリ遂ニ干戈ニ訴ルニ至リ申候。曩キニ安南ノ屬國論起リ、淸國ヨリ保護出來ザル處ヨリ遂ニ天津ニ於テ李鴻章佛公使ト談判ヲ開キタル末、安南ヲ佛ノ屬國ト爲シ、一旦其局ヲ結ビ候處、安南邊境ノ支那兵ヲ退去セシムル期日ノ間違ヨリ、再ビ兵釁ヲ開キ今日ノ勢ニ相成候。就テハ佛蘭西ヨリ八千萬フングーノ償金ヲ要求シタルニ、支那政府ハ曾國荃ヲ全權大臣トシテ上海ニ派シ、佛公使ト談判セシモ、彼此議調ハズシテ福州臺灣ノ砲擊アリ福州ノ砲擊ハ纔三十分間ニ支那軍艦七艘ヲ擊沈メ、引續テ各砲臺ヲ打毀シ、造船局モ微塵ニ相成、其ノ後佛艦再ビ臺灣ノ雞籠ヲ攻テ其砲臺ヲ陷レ、續テ淡水港ヲ攻擊中ニ候。我政府ハ隣國ノ交誼ヲ以テナルベク和好ヲ全セシムルニ盡力セン爲メ、先般上海ニ於テ曾國荃ト佛公使ト談判中、我公使榎本武揚ハ急ギ彼地ニ赴キ候ヘ共、

曾國荃病氣ノ爲メ面晤ヲ得ズ、天津ニ往テ李鴻章ニ面シ和好ヲ慫慂候處、李鴻章ハ深ク其隣誼ノ厚キヲ謝シ、且ツ其同案ナルヲ表シ、總理衙門ニ向テ更ニ忠告致シ吳候樣懇請ニ及ビ候。實ニ今日清國ニ在テ自他ノ强弱ヲ熟知セル人物ハ鴻章一人ト存候。然ルニ今日迄ハ清佛兩國共未ダ公然開戰ヲ爲サヾルニ由リ、他國ニ於テハ先關係無之儀ニ候ヘ共、萬一事益切迫ニ及ビ候ハヾ必定公然開戰ノ宣告ニ及可申、然ル時ハ近隣ナル貴國及我國ニ於テハ實ニ不容易關係ト存候。扨其時ニ至リテ佛ニ左袒セバ清ト戰ハザル可カラズ、清ニ與セバ佛ニ抗敵セザル可カラズ、故ニ此等ノ場合ニ於テハ西洋諸國ハ何レニモ偏頗セズ、局外中立ヲ守ルノ外自國ノ安寧ヲ保全スルノ道有之間敷ト被存候。左無之シテ萬一一方ニ向ヒ偏好ノ處置有ル時ハ、他ノ一方ノ國ヨリ烈敷サツトウヲ受候事故、前以其邊ハ熟慮ヲ加ヘ用意ヲ爲サヾル事ト存候

國王曰ク　兼ネテ李鴻章ハ主和論ト聞ク、果シテ然ルカ、何卒清佛ノ和好コソ望マシケレ、否ラザル時ハ局外中立ハ甚ダ困難ト思ハル。

是レニテ餘リ長談ニ及ベバ御暇ヲ賜ハラント請フ國王頻リニ之ヲ留メ曰ク　今日ノ如キ高論ヲ聞タル事始メテナリ、豫テ外人ノ談論ヲ聞マホシク思シニ、貴公使ニ面シ甚樂シム、今一應宇内ノ大勢ヲ聞ント御留メ有リタリ。

進一郎自ラ　誠ニ斯ク御懇親ナル御待遇ヲ蒙リ進一郎ノ身ニ餘リタル榮幸ニ候。就テハ我日本ガ鋭意開化ヲ求ムルノ主意ヲ言上可仕候。元來我國ハ封建ノ制ヲ以テ數百年ノ太平ヲ保チタル末、百事腐敗ヲ釀シ候處、二三十年前ヨリ追々憂國ノ士宇内ノ大勢ヲ察知シ、明治元年ニ至リ　今上ヲ輔佐シ奉リ維新ノ政ヲ布クニ至レリ。此時ニ當テ國中ノ擾亂容易ナラザル形狀ニ立至リ候ヘ共、我政府ハ毫モ屈折セズ、百般ノ政務ヲ改革シテ今日ニ及ビタル儀ニ候。抑モ我國ノ文物制度ハ中古總テ貴國、支那ヨリ傳ハリ、千有餘年ヲ經、當時ニ在テハ實ニ善美ノ法制ニテ有之、進一郎ノ如キモ幼少ヨリ聖人ノ書ヲ學テ尤モ聖人ヲ信仰候者候。乍去今日ニ至テハ未曾有ノ世界ヲ現出シ、昔日我善美ノ法制モ西洋新鮮ノ風潮ニ激盪サレテ腐敗ノ色相ヲ表シ文明組織ノ社會ヨリ驅逐セラレ、野蠻國ヲ以テ蔑視シ、萬國普通ノ交際法スラ間々宛行ヲ屑トセザルノ景形ニ付、我政府ハ斷然維新ノ改革ヲ行候儀ニテ、卽チ亞細亞ノ一野蠻國タル區域ヲ脫出セントノ本意ニ外ナラズ候。

國王曰ク　實ニ時勢ニ適シタル高論ナリ。扨テ聖人ノ語ニ就テ一言セン。昔聖人三代ノ世ニ處シタル例ヲ察スルニ、三代皆同一ナラズ、各其制度ヲ異ニセリ、是則時世ニ從テ法ヲ設ケシニ非ズヤ、然ル時ハ聖人今日ニ在テハ亦必ラズ今日ノ時勢ニ從テ良法ヲ設ク

ルナルベシ。是レ余ガ信ジテ疑ハザル所ナリ。

進一郎白ス　御意乍恐奉感服候。然ルニ其聖人ノ出タル國ハ則今ノ清國ニ候。其清國ガ近世ニ於テ一ツノ軍器ヲ製造シテ他國ニ輸出シタル事モナク、一ノ學業ヲ他國人ニ傳フベキ事モナク、軍艦ガ海外ニ往來スル事モナク、政事ノ組織ニ至テハ尚更稱スベキ有ルヲ聞カズ。實ニ嘆息ノ至リニ候。彼國ニテ眞正ナル聖人ノ道ヲ知悉シタルハ李鴻章一人ニ候。進一郎ガ天津ニ在ル日、李ニ面會スル毎ニ日本ノ開化ニ進ムノ速ナルヲ頻リニ羨ミ申候。一旦李ノ盡力ニテ生徒ヲ西洋ニ留學セシメ、又ハ西洋人ヲ雇入レ海陸軍及電信局稅關等ノ事業ヲ習學セシメタルニ其西洋ニ派シタル生徒ハ習業半バニシテ頑固黨ノ議論沸騰シ、生徒ヲ久敷歐米ニ置ク時ハ皆西洋人ニ變ズベシトノ說ヲ唱ヘ、遂ニ皆ナ呼戻シ候。其内ノ士官生徒ガ今度福州戰爭ノ時軍艦ニ在テ大ニ奮戰シテ海ニ沈ミ候。李鴻章ガ今日世界普通ノ法ニ倣ハントノ精神ハ實ニ好ミス可キ儀ニ候處、頑固黨ノ議論ニ被阻其結果ヲ得ザルニヨリ此度清葛藤ヲ生ゼシ以來、雇入レノ西洋人ハ公法ニ據リ多ク辭シ去リ候故、清國ノ海陸軍ハ其機械有リテ其使用ノ法ヲ知ラザルト同一ナル有樣ニテ、是レ支那ノ敗レヲ取リシ所以ナリ。我國ニ於テモ十年前迄ハ多クノ西人ヲ雇ヒ、百般ノ事業ヲ傳習爲致候處、追々其教師ヲ還シ、今日ニ至テハ外人無之トモ海陸軍ハ勿論、百般ノ事業總テ無差支丈ケニ相成申候。就テハ進一郎ノ願フ所ハ御國ニ於テモ差寄リノ間ハ萬事外人ヲ雇用セザルヲ得ザルモ、十年ナラズシテ御國人民ガ奮起勉勵シテ外人ヲ借ラザル樣速カニ其功ヲ奏センコトヲ渴望仕候。

國王曰ク、卿ノ言甚ダ好ミス。尙勘考シテ其言ノ如ク他國ノ教師ヲ聘シ實功ヲ竣ヘンコトヲ期スベキナリ。

是レニテ暇ヲ告グ。

國王曰ク　貴國　皇帝陛下ノ御厚意ニ由テ塡補金ヲ贈ラレタル事ハ、貴政府ノ我國ヲ保護スルノ親切ハ必ラズ心ニ銘シ永ク忘レザル所ナリ。余ガ斯ク鳴謝シ滿足シタルコトヲ委シク　皇帝陛下ヘ轉奏アランコトヲ望ム。

以上ハ謁見之節言上ノ提要ニ候。右言上中餘リ言過ギタルト被思召候儀モ可有之候ヘ共、朝鮮ノ實況ヲ以テ論ジ候ヘバ國王殿下ハ御聰明ニ被爲在、能ク世界ノ事情御分リニ相成居候ヘ共、支那黨ヨリ立チ替リ入リ替リ支那ノ大國ニシテ信義有ルヲ說キ、且又支那ノ氣受ケヲ惡シクスレバ大院君ヲ還ヘシテ之ヲ助クベシト恐嚇候ニ付國王ニハ萬一右樣ノ危難差起リ候節、日本ヨリ保護致シ呉ルベキヤトノ御懸念ノミ

ニ被爲在候間、今度塡補金御惠贈ノ好機ニ乘ジ、日本ノ親切ニ保護ノ念有ルヲ知ラシメ、且ツ支那ノ腐敗ヲ說クニ李鴻章ヲ借リテ裏面ヨリ反顯セシメ、國王ノ御氣力ヲ十分ニ引立ツルノ積リニテ前陳之通言上致シタル儀ニ有之候。

十一月十二日

竹添進一郎

伊藤參議殿

井上參議殿

對韓策甲乙二案

竹添進一郎

筆記第一筆記第二ハ自分下朝鮮ノ景況ヲ見ルベキモノニ候。當春大院君歸國ノ風說有之國王始メ一統狼狽ヲ極メ候以來、支那黨ハ在韓支那武官ニ媚ヲ獻ジ、殆ント奴隷同樣ノ醜態ヲ極メ、內ニ向テハ支那ノ威勢ヲカサシテ其ノ權力ヲ張リ、就テハ稅則均沾ニ不法ノ議論ヲ主張シタル如キモ支那黨ノ手ニ出、將又日本黨ノ諸人ヲ流刑ニ處セント企テ候等實ニ驚キ入タル次第ニ有之候。

代理公使ニテハ權勢薄クシテ支那黨ノ勢燄ニ當ルニ十分ナラザルノ氣味有之候。自分入韓ノ上右ノ事情モ承知候ニ付、支那黨ヲニクラシク應接致シ候處、素ト何ノ思慮モナク只々支那ヲ大國ト仰ギ居候、支那黨ニ付大ニ恐怖ノ心ヲ生ジ、尹泰駿ハ遽カニ統理衙門協辨ヲ辭シ、金允植モ竄ノ如ク相成リ、其レ等ノ爲メ均沾ノ紛議モ容易ニ收局致シ候。而シテ今度淸佛ノ戰爭ニ日本ハ佛ト合シ支那ヲ擊ツニ決定セリトノ風說相起リ、

（右風說ハ支那黨ヲ恐嚇スル爲メフート氏ノ手許ヨリ出タルニハ無之哉ト雅推致シ候）支那黨ハ益畏縮ノ態ヲ顯ハシ、大ニ權勢ヲ減ジ隨テ日本黨頗フル起色有之候。

金玉均御國ニ渡航ノ節ハ實ニ馬鹿々々敷擧動ノミニ有之候ヘドモ、其內幕ヲ相探リ候ヘバ實ハ改革ニ熱心候處ヨリ、開化黨ヲ組織スル爲メ生徒ヲ御國ニ留學セシメ、又一方ニハ國王ノ信用ヲ堅クセン爲メ種々ノ策ヲ施シタル等ニテ、一時金策ニノミ汲々致シタル儀ニ有之候。然ルニ支那黨益蟠結シテ進步ノ妨礙ヲ爲スニ付、御國ヨリ歸リタル後ハ公然日本黨ト相唱ヘ抵抗候ニ付、支那黨ヨリ之ヲ敵視スル尤モ甚敷有之候。就テハ自分モ此節ハ彼レヲ保護スル方ニ注意罷在候。

筆記第一筆第二ノ通リ、日本黨ノ計劃ハ已ニ一決致シ候。小官ヨリ一言同意ヲ表シ候ヘバ直ニ事ヲ起シ候勢ニ付、懇々其暴擧ヲ相戒メ居候。就テハ甲乙ノ二案ヲ左ニ開陳ス。

甲案

我日本ハ支那政府ト政治ノ針路ヲ異ニスルヲ以テ、到底親睦ニ至ルヲ得ルノ目的ナシ。仍テ寧ロ支那ト一戰シ、彼レヲシテ虛傲ノ心ヲ消セシメバ却テ眞實ノ交際ニ至リ候モ難斗トノ御廟議ニ候ハヾ、今日日本黨ヲ○○シテ朝鮮ノ○○○○○ヲ得策トス。何トナレバ我レハ求メテ支那ト戰ヲ開クニ無之、只朝鮮國王ノ依賴ニ依リ王宮ヲ守衞シ、右國王ニ刄向タル支那兵ヲ擊退ケタリト云名義ナレバ何モ不都合無之儀ト存候。

乙案

若又今日ハ專ラ東洋ノ和局ヲ保持スルヲ旨トシ支那ト事ヲ生ゼス、朝鮮ハ其自然ノ運ビニ任セ候方得策ナリトノ御廟議ニ候ヘバ、自分ノ手心ヲ以テナルベク日本黨ノ大禍ヲ受ケザル樣保護スル丈ケニ止マリ可申候。

右甲乙ノ二案何レヲカ御決定被爲在候上ハ、速ニ御內示被下候樣奉願候。

設令乙案ニ御決定相成候テモ、朝鮮人ハ宇內ノ大勢ヲ梦ニモ知ラズ、只支那ヲ以テ无此ノ大國ト信ジ込ミ、支那人ヨリ蕞爾ノ日本安ゾ中國ニ抵抗スルコトヲ得ン、若無禮ヲ加ヘバ直チニ撲チ潰スベシト法螺ヲ吹立候ヲ信用致シ居、到底無氣力无廉恥ノ輩ノミニ候間、之レヲシテ常ニ我レヲ恐怖スルノ念ヲ抱カシムルニ非ザレバ何事モ行ナハレザル儀ニ付、支那ノ恐ルルニ足ラザルヲ知ラシムル爲メ、時々支那黨ヲカミ付ケ、其ノ頭ヲ押ヘザル可カラズ、其邊ハ豫テ御

含置キ可被下候。

目下清佛戰爭ノ影響モ有之、支那黨ノ面々日本ヲ恐怖スルノ念十分相生ジ（閔泳翊ハ井上角五郎ニ向テ頻リニ己レ支那黨ニ非ズト辨明致候權勢赫々タル閔泳翊スラ如此ニ付其他ノ支那黨推シテ知ルベシ）且塡補金ノ御惠贈ニテ日本好意十分相顯レ候ニ付、兼々日本ハ信實ナキノ國ト口癖ノ樣申居候事モ、災ギキセザル樣相成、國王殿下ニハ日本ヘ傾向ノ念一層强ク被爲成候ニ付、此ノ兩三日間ニ支那黨ノ勢力遽カニ減縮致候。只今通リノ景況ニ候ヘバ別ニ懸念スル事モ無之候得共、向後又々支那黨跋扈スル樣相成候ヘバ日本黨ハ必死ノ地ニ陷リ可申ニ付、必ズ斬姦ノ擧ニ出可申、其場合ニ差迫リ候ヘバ電報ヲ以テ更ニ御指揮ヲ伺出候心得ニ御座候右御內信申上候也。

十一月十二日

竹添進一郎

伊藤參議殿
井上參議殿

朴泳孝邸ニ於テ洪英植・金玉均・徐光範等ト島村久談話筆記要畧

筆紀第一　自分謁見之翌々日、卽本月四日朴泳孝宅ヘ島村久ヲ招請シ、洪英植、金玉均、徐光範之四氏列席ニテ談話ノ提要。

朴　當政府中ニハ黨派ト云フモ仰山ラシク候ヘド、其第一ノ支那黨、第二ノ支那黨及日本黨之三黨アリテ、第一ノ支那黨ハ唯々支那ニ屬從致シ居候ヘバ、國家大平ナリ必ラズ日本ハ信ジ難シト主張ノ者ニテ、其姓氏ハ內衙門督辨閔臺鎬同趙寧夏右營監督閔泳翊外衙門協辨金允植辨後營監督尹泰駿也。

第二ノ支那黨ハ支那ニ屬從ノ事ハ第一黨ト同樣ニシテ、其上自己ノ權力ヲ得ンガ爲メ國王ヲ抱キ込、己レノ反對卽日本黨ヲ撲滅セントノ目的ニ候。其面々ハ海防事務監督閔泳穆前

營監督韓來穆左營監督李祖淵平安道監司閔應植之四名ニシテ、近來閔泳翊此黨ニ入レリ。右二黨トモ皆王妃ノ親戚又ハ變亂ノ時王妃ヲカクマヒタル私恩ヨリ被取立候者故、王妃ニ媚諛事ヲ知ルノミ。而シテ右ノ面々ヨリ朝鮮ハ何事モ手ヲ出スニ不及、唯支那ニ屬從シテ居レバ大平無事ナリト立替リ入リ替リ國王ヘ申上候ニ付キ、我々日本黨ヨリ世界ノ大勢ヲ論ジ朝鮮之危殆目下ニ逼レリ、早ク獨立之體面ヲ明確ニシ政治ヲ改良不致テハ、何レノ屬國ニナルヤモ難計ト丹誠以テ差上候ヘ共、彼等ハ多數我々ハ少數、國王ニアリテハ殆ント半信半疑被致候處、王妃ハ彼等ノ言ヲ信ジテ國王ニ彼等ヲ信用被爲在候樣漸々被申入候ニ付、遂ニ我々ノ忠言ハ御耳ニ入リ兼候姿ニ成行申候。

近來第二黨ハ王妃ノ庇蔭ニヨリ益々權力ヲ得候ニ付、我々罪名ヲ付シ流刑ニ處セントノ惡計我々ノ耳ニ洩レ來レリ。我々ニ死ハ素ヨリ覺悟ニ候ヘ共、彼等ノ手ニ被誅ヲ不望事ニ候何テ我等モ計劃スル所モ有之候。

島村　兎ニ角大事ハ輕擧ニ成ルモノニ無之、貴下等ニ於テ良法ヲ御熟考相成度候。

朴　良法トハ血臭キ手段ニ不出、唯奸者ヲ退ケ政治ヲ改良スル事トス其儀ニ付何ソ御妙案ハ無之哉。

島村　熟考ノ上御返答可致候。

金　我數年來平和手段ニテ刻苦盡力候ヘ共其功ナキノミナラズ、今日既ニ死地ニ入レリ。坐シテ死ヲ俟ツヨリハ先ジテ制人ノ策ヲ不施ヲ不得場合ニ逼レリ。故ニ最早我々ノ決心ハ一途アルノミ、乍去足下等常ニ我々ノ輕擧ヲ警戒ゼリ、故ニ時機如何ノ御高話ヲ承リ度候。

島村　制人ノ策如何。

金　其策三アリ、一ハ貴公使館既ニ御落成ニ付、國王ノ行幸ヲ願ヒ、彼等ニ供奉爲致途中ニ要殺致ス事ニ候。

島村　殺戮ノ事ハ容易ノモノニ無之候。

金　必ラズシモ拾人ノ支那黨ヲ悉ク誅殺スルニハ無之、其巨魁ノ閔泳翊、韓圭稷、尹泰駿ヲ殺シ其罪ヲ、支那黨ニ移シ一切ノ支那黨ヲ死刑ニ處スル積リ也。

又一ハ夜半ニ支那服ヲ着セシ刺客ヲ其宅ニ忍ビ入ラセ、三名ヲ暗殺スル事、右ハ良策ト存候。而テ我々ハ其夜王闕ニ居リ刺殺ヲ遂ゲタル報知ヲ俟チテ其他ノ者ヘ死刑ノ宣告書ヲ發付シ、一面ニハ各國公使ヘ勅使ヲ以テ不穩ノ模樣ニヨリ王宮ニ入ルヲ乞フ積リニ候其節貴公使ニハ入闕可有之哉。

島村　勅使アレバ何時ニテモ公使ハ入闕モ可致ナレド、足下等ノ目指ス二名ハ皆兵營監督ナレバ、兵卒ノ騷擾モ可有之迚モ思樣ニハ運ヒ申間敷ト存候。

金　朝鮮ノ兵丁ハ彼等ニ左袒スル者無之、直ニ洪英植、徐光範、又ハ徐載弼等其監督ニ任ジ候ニ付、兵丁ノ事ハ毫モ懸念無之候、又三名ヲ暗殺スルコトモ左程難事ニ有之間敷ト信シ居候。

洪　他ノ一策ハ郵便局ノ開館式ヲ行ヒ、其節彼等ヲ招宴シ一時ニ斬リ捨テ可ナランカトモ存ジ候ヘドモ、是亦白日中ノ仕業故打洩シハ支那黨ニ罪名ヲ付スルニ苦シミ候。

島村　大事ハ前後表裏ヨリ他迄モ熟考致タシ不申テハ不相成、若ヤ不幸ニシテ足下等ノ策一モ不被行時ハ如何。

朴　唯死アルノミ、乍去彼ノ卑怯未練ノ奴原ニ決シテ後レハ取リ不申候。其段ハ御安心被下度候。唯懸念ノ點ハ貴兵隊王宮ニ入レバ支那兵モ必ラズ王宮ニ入ルヲ乞フベシ。其節朝鮮兵ヲ以テ拒絶スル積リニ候ヘドモ、御承知ノ通リ朝鮮兵ハ支那兵ニ恐怖シ居レバ、迚テモ貴兵隊ノ應援アラザレバ拒キ留メ出來間敷ト存候、其機ニ臨ミ貴兵隊ハ援助被致呉ルモノニ候哉。

島村　此地駐在ノ支那兵ヲ追ヒ拂ヒ候事ニ我一中隊ニテ左程難事ニモ有之間敷候ヘドモ、夫レ等ノ事ハ亞細亞ノ一騒擾ヲ來シ候コトニ付、拙者一己ノ考ヲ以テ御返答致シ兼候。元來足下等同盟志士ハ若干人有之候哉。

金　結盟士三十人有之候、少數ニハ候ヘドモ膽力家モアレバ我々ノ仕事ニハ充分ニ有之候。且ツ此ノ企謀ハ昨今ノ事ニ無之、既ニ日本刀五十本兼テ用意ヲ致シ、日本ヘ刺客ヲ注文致置候間、不遠内來着致シ可申、乍去兩三日已來ノ模樣ニテハ其來着ヲ待兼候樣ニ相逼リ候。

島村　何分王宮ノ順序緊要ト存候然ルニ貴下等ノ計畫ハ國王ニハ充分御承知ノ義ニ候哉。

金　充分御承知ト迄ニハ至リ難ク候、其譯ハ國王ヘ一切ヲ開說候節ハ王妃ヨリ反對黨ヘ被相洩候憂有之候。

徐　前ノ三四名ヲ暗殺候事我々ノ手ニ出テ候義相顯ハレ候、其國王ニ於テ御異論有之候義ハ決シテ無之候間其邊ハ御安心被下度候。

朴　兎ニ角本日ノ談話ハ何卒竹添公使ヘ無洩御傳ヘ置被下度候。何レ兩三日ノ中參館同公使ノ御高諭ヲ仰キ度積リニ有之候。

筆記第二　十一月九日金玉均氏來訪竹添進一郎ト談話要略

竹添　足下國事ニ御盡力ノ次第ハ今度歸任後順次見聞實ニ感服ニ候。但國家ノ大事ハ輕舉ニ失シ候テハ利益ナキノミナラズ、却テ害ヲ生ズル少小ナラズト存候間萬事御注意御盡力可然ト存候。

金　御教諭ノ趣感謝ノ至リニ候、拙者モ過般來支那黨權勢ヲ得候節、其一人ヨリ支那黨ニ入レト勸告イタシ候モノ有之候、其節心中ニハ今更志ヲ變ジ支那黨ノ仲間入出來候位ナラバ、數年來ノ苦心ハセヌモノト思ヒ候ヘ共、其レニ向テハタトヘ支那黨ナリトモ明言候共、誰

モ信用候モノモ既之ニ付、先仲間入リハ相斷リ申度ト返答致置候。然ル處今度閣下御歸任以來、支那黨ノ權勢遽カニ變ジテ衰微ノ勢ニ付、或ルモノヨリ足下ハ日本黨ニ相違无之哉ト相尋候ニ付、拙者ハ世人ヨリ何故ニ日本黨ト目視候哉自分モ不相分レドモ世人ノ唱呼ニ隨ヒ純然ノ日本黨ナリト明言イタシ候。依テ御承知ノ通リ目下日本黨ノ困難日ニ相逼リ候ニ付我等遂志ノ時機モ亦到來ト存候。

竹添　過日朴泳孝氏來館ノ節、拙者ノ意見ハ詳細相述置候間定メシ御聞取有之候歟ト存候。且又御談話中ニモ有之候通、拙者歸任以來支那黨ノ模樣モ少々宛相變ジ候趣ニ候ヘバ、篤ト熟考ヲ要シ候儀モ不少ト存候。依テ拙者去ル二日國王ニ謁見後之模樣遂一承リ度候。

金　去ル三日國王王妃列坐ニテ閔泳翊ヲ被召候節、泳翊ヨリ此度日本ヨリ塡補金ノ内四十萬圓返却候儀ハ、何ニモ日本ノ厚意ニ出テ候歟ニハ無之、公法上不得不返還ノモノニ付、日本ニ放テ依然年年受取居リ候テハ、追テ萬國ヨリノ攻撃ヲ恐レ返却候儀ニ有之候。且日本政府ハ廟議モ時々變ジ實ニ反復異常ユヘ、素ヨリ信ジ難キ政府ニ有之候。而シテ風承候ヘバ日本ハイヨ！〳〵支那ト開戰ニ決シ候趣、左候ハヾ當朝鮮ハイヅレニカ依賴イタシ不申デハ迚テモ獨立ハ出來不申候、國王ニハ支那日本イヅレヲ御選ミ相成候哉ト申出處候、國王ニハ何等ノ御辭モ無之内、王妃傍ヨリ泳翊ニ何レニヨリ候ヘバ危殆無之ト相考候哉ト御尋ネ有之候處、泳翊云、支那ハ目下相衰ヘ候得共信義ノ國ニ候ヘバ、勿論支那ニ御依賴相成候方可然ト存候、王妃云其方ハ迚モ日本黨ニハ入レラレ間敷ニ付、支那人袁世凱ニ我レ等ノ依賴ノ意ヲ能ク通ズベシト、泳翊退出直ニ下都監清營ニ赴ケリ。

右畢テ直チニ李祖淵韓圭穆尹泰駿ヲ被召候處皆云、小臣等ハ閔泳翊ト同意見ニ候ヘ共、支那日本何レヲ御撰ビニ相成候儀ハ大王殿下ノ御賢慮ニ有之候事ニ付、唯々小臣等ハ兵營ヲ守リ大命ヲ俟ツ有ルノミ。

閔臺鎬ハ去ル二日以來屢々被召候ヘ共、閣下御歸任後直ニ御尋問モ有之候事ユヘ目下支那黨ト被呼候テハ一身ノ爲メ不宣ト存候處ヨリ、病氣ヲ申立テ入闕イタシ不申、乍去意見ハ書中ヲ以テ申出候、其意ハ今度日本ヨリ塡補金返還候事ハ全ク日本ノ底意アル惡心ニ出デ候儀ユヘ、御受納無之方可然、且日本政府ハ信ジ難キ政府ニ有之云々、右ニテ同人ノ意見中ハ明瞭ニ有之候。

李韓尹ノ三名退出ノ後、拙者並ニ洪英植被召國王ヨリ其方共ハ日本黨ト申候ユヘ、今度ノ事ニ付意見可申出ト被仰候拙者云無論正敷日本黨ニ有之候ヘ共、日本ハ嫌ヒ有之候、付テハ既ニ日本黨ト被仰候上ハ、塡補金返還ノ義ニ付日本政府ノ意向如何ハ何共難申上候。乍去先各國ノ例ニヨレバ米國ヨリ日本ヘ塡補金返還候事、全ク米國ノ惡意ニ出デ候儀ト承リ

候夏無之、其上公法上塡補金ハ返却可致トノ意義更ニ相見ヘ不申、依テ各國ノ例ヲ推セバ御明瞭可被爲在ト存候。且又朝鮮ハ早ク獨立イタシ不申テハ不相成義ヲ以テ、西洋各國中荷蘭、白耳義、瑞西等之例ヲ引キ拙者共記憶ニ有丈ケヲ申述置候、其時王妃被仰候ニハ金玉均ノ言フコトハ毎モ大節ノミニテ親切ニ無之候。

去ル六日閔泳翊ノ周施ニヨリ支那記名提督吳非有、張光前ノ兩人謁見被仰付候袁世凱ハ既ニ王妃ヨリノ依賴モ有之候事ユヘ却テ差控ヘ罷出不申候。而シテ吳非有等ヨリ朝鮮ハ大國ニ依賴スルニアラザレバ相立不申トノ意味ニテ言ヒ候處、唯々宜敷賴ムトノ御辭丈ケニ有之候。

右ノ次第ニテ今日ハ閔泳翊王妃ノ命ヲ以テ頻リニ支那人ニ取リ入リ、李祖淵、韓圭稷等ハ國王ヲ抱キ込拙者共ヲ害セント謀リ居リ候。

其後支那黨ハ頻リニ日本ハ支那ト開戰トノ風說ヲ聞キ出シ、閔泳翊ヲ初メ國王ヘハ支那ニ御依賴相成不申テハ不相成ト逼リ、袁世凱ヘ唯々取リ入リ居申候。既ニ一昨日拙者ヲ被召日本支那開戰ノ義ハ如何哉ト御尋ニ付左樣ノ風說タモ承リ不申候。又タ自今左樣ノ事差起リ候道理無之ト明瞭ニ申上候處、國王ノ仰セニ若シ日本支那此地ニテ戰ヲ開キタラバ何方ニゾ避ケザル可カラズ。拙者云御尤ノ事ニ候、其節ハ南北兩漢山ノ內ヲ以避亂ノ地ト御定相成京城ノ兵ヲ三分シテ一分ヲ殘シ、二分ヲ兩漢山二分派被爲成可然ト言上候處、其翌日直チニ尹雄烈北漢山見分被命既ニ出發イタシ候實ニ抱腹ノ至ニ候。

竹添　兎ニ角支那黨ノ模樣モ頗ル相變ジ候ニ付今後ノ模樣ニ從ヒ寛々御熟考可然ト存候。

竹添進一郎書信要畧

十一月十二日附ヲ以テ竹添進一郎ヨリ伊藤井上兩參議ニ宛下ノ如キ書面アリタリ、其ノ要畧ニ因リ本月十二日井上角五郎ノ密報ニ曰ク、日本新ニ公使ヲ派遣スルトノ事ニ付、去ル十日諸大臣集會論議ノ末、支那ニ違ハズ日本ニ憎マレズシテ穩順ニ中間ニ歩ムベシトノ廟議ヲ決セシ後、國王ヨリ二三入侍ノ臣ニ（閔泳翊、金玉均杯其中ニアリト云フ）被仰付候ハ、日本既ニ償金ヲ返付シテ其好意ヲ表明セリ。且我想フニ日本ノ我ヲ疑ヒ居ルトヤラ又諸臣ノ日本ニ疑ヲ抱キ居ルト云フハ彼是情實未ダ貫徹セザルニヨルナリ。今特ニ日本ヨリ此ノ好意アルニ至ルモ尚ホ疑フモノアリ、茲ニ於テヤ日本ヘ在留公使ヲ派スルニ若カズト其後度々闕内ニ於テ此儀ニ付評議アリ、昨夜モ既ニ其議アリシト云フ、必ラズ二三ケ月内ニハ派遣可相成候。只々其ノ入費ノ出處ニ苦ミ居ル由、又公使ニ可被任人ハ十目共ニ朴定陽ニ在リ、國王ノ御考モ亦然リトノ事ニ御座候。其説ニ「同人ナラバ利ナキモ害アルコトナシ、故ニ外交官タルベシ云々」閔泳翊ヨリ承リタル所ニテハ必ラズ一二月内ニハ此事ヲ日本公使ヘ照會相致候。

右御國、在留公使ノ派遣ノ儀ハ隨分久敷國王ノ意中ニ有之候趣、島村久代理申當春二月大院君歸國、支那ヨリ監國使派遣云々ノ風説有之後、韓圭稷來館云到底朝鮮ハ御依賴致シ不申テハ獨立ハ出來不申ト國王ニハ終始御心配有之候、付テハ如何致候ハヾ國王ノ御心中貴政府ニ相連候哉。

（以上角五郎ノ報ニ係ル）

島村云　國王ノ御心中云々ハ既ニ竹添公使ヨリモ屢々申通、其上同使歸朝之上直ト其筋ヘ申出候次第ニ付、我政府ニハ大略承知致居候。乍去國王御心中云々ヲ表明候程ノ證據トテハ無之ニ付何事モ被行不申候。

韓云　表明候證據ハ如何ニシテ宜敷哉。

島村云　先在留公使ヲ派シ其上國王ヨリ密書ヲ以テ我　皇帝陛下ヘ御依賴ニ相成候二件ヲ御運ビ可然ト存候。

其後韓圭稷來館云　國王ニハ二件共御施行ニ決定、既ニ當大臣ヲ被召公使派遣ノ義御下問相成候處、大臣云今日本ヘ公使ヲ派遣ニ相成候テハ支那ノ感觸モ如何ニ付御見合セ可然ト言上候處、國王云、獨立國ヨリ公使ヲ派スルハ當然ノ義ニシテ、他國ノ關係スル所ニ無之、且條約交

換ノ上ハ互ニ公使ヲ派遣スルハ卽條約ヲ履行スルナリ。日本ヨリハ既ニ數年此地ニ駐在セリ。而シテ我ヨリハ爾今公使ヲ派出不致デハ日本ヘ對シ不都合ナリ、又萬國公法上ニ公使ハ條約交換後遲クモ五年間ニハ必ラズ派出スベシト相見ヘ候ヘドモ、公法ニ違背不相成候義ニ付、速ニ議定可致ト大臣唯々恐縮ニテ退出其後、議決ノ上大臣入闕云日本ヘ公使御派遣ノ儀可然御事ニ候ヘドモ只入費之出處ニ苦シミ候（是ヨリ先キ國王ノ內命ニヨリ我公使館領事費用條例ヲ課シテ差出候處者ヲ手本トシテ國王自ラ費用額ヲ定メラレシ由ニ候）

國王云　費用ハ左程多額ヲ要スベキモノニ無之、且我手許ヨリ支拂候テモ不苦候間、速カニ議定可致ト右之上諭ニ由リ公使派遣ノ事粗相極リ其人ハ趙準永（先年十名ノ使節日本ヘ渡航ノ節ノ一人）可然トノ事ニ付、國王ニモ御同意之模樣ニ有之候。而シテ密書ノ儀ニ付國王被仰時ニハ獨立ノ體面ヨリ云ヘバ互相ノ文面ナラデハ不相成、去リトテ我ヨリコソ日本ニ依賴候事有之日本ヨリ依賴候事ハ千年萬年ノ後タリトモ有之間敷ト種々密議之末遂ニ如斯決定セリトテ相示シ候。其密書ノ文ニ云

大朝鮮國君主名敬白

大日本天皇陛下舊盟再尋新交日篤朝野良心益就敦睦

貴國之好我此誠所深幸今後如有緊急之事將托

貴國公使代報以便相援之地則雖有一帶水之隔必無相阻之憾實斯心傾向敢請領會併祈

陛下康福

右ニテハ如何

島村云　御密書ニ付テハ別段異存モ無之候ヘ共、趙準永ハ公使ノ人ニアラズ、公使ハ當政府中ニテ第一流ニ位スル權力家ナラデハ不滿足ニ候。其後五月八日閔應植來館云　拙者今日在留公使ニ可被任內命有之候ニ付テハ不肖ノ者殊ニ外交ノ事ニハ不案內ニ付萬事御示敎被下度候。

島村云　何時頃表向書拜命ニ相成候哉。

閔云　左議政病氣ニ付キ色々ノ手數モ有之少々隙取可申ト存候。

島村云　表向御拜命ノ上ハ種々御談話致度義モ有之候間速カニ其日ヲ相待可申候。

其後一向相運ビ不申候ニ付、韓圭稷ニ相尋候處、同人云、五月二十六日閔泳翊歸國支那黨ニ組ミシ、種々ニ妨ヲ爲シ、未ダ相運ビ不申候ヘ共、國王ノ御心中ハ相變リ不申候間、何レ時機到來候ハヾ派遣相成ルベクト返答致候。右井上角五郎ノ密報ハ島村ノ嘗テ韓圭稷ヨリ承リ候ト同氣脈ニ有之候事ト被察候。國王ニハ前陳ノ通リ兼ネテ御國ニ倚賴相成居候所、今般塡補金ヲ御惠贈有之タルヨリシテ更ニ其信仰ヲ固メラレ隨テ公使派出之儀再發致シタル事ト存候。

十一月十二日

徐光範ト島村久トノ談話提要

十一月十四日徐光範來訪セシ所、竹添進一郎不在ニツキ島村久ト談話之提要

島村　國王ハ支那日本兩黨ノ何レヲ御信用有之候哉。

徐　毎度御話シ致シ候通リ、國王ニアリテハ最初獨立ノ體面ヲ鞏固ニシ、政治ヲ改良ノ事ニ御決心相成候ヨリ、支那黨ナリ我黨ナリ採用セラレ候事ニテ、國王ノ目ヨリ視ルトキハ何レモ獨立黨ナリ、何レナレバ支那黨ハ皆奸佞ノ奴原ナレバ、國王之面前ニテハ唯々國王ノ意ヲ迎ヘテ、心中ニモナキ獨立トカ何トカ頻リニ喋々利口ヲ述ベ、御面前ヲ退ク哉否奸策ヲ運ラシ、人氣ヲ雹ケ朝野總テ其毒害ヲ不蒙モノナシ。如何ニ國王御聰明ニ御爲在候トモ、夫レ等ノ事御承知相成事ハ出來難ク候。我日本黨ノ獨立鞏固政治改良論ハ國王ノ面前面後ノ別ナク一轍ニ押通シ候得ヘ共、國王ヨリ觀レバ均シキ獨立黨ト思召候モ無理ナラズ義ニ候且又朝鮮數百年來之積弊、國王ノ開進論ヨリ一變シ却テ今日ノ大弊ヲ生出イタシ候義ユヘ非常ノ治療ヲ行ヒ不申而ハ迚モ國王ノ御志ヲ達シ候場合ニハ至リ申間敷候ニ付テハ、貴下

ニモ我黨ハ過激ヲ主張候樣御見聞可相成候ヘドモ、決シテ不然、彼支那黨等今日ニテモ前非ヲ悔ヒ改心以テ國王ノ開進論ヲ旨トシ、政事ヲ改良ニ着手候ハヾ、我黨モ同意協力可致義ハ勿論ニ候ヘドモ、彼等ニ於テハ徒ラニ私慾ヲ謀リ人民ヲ苦シメ、已ニ反對候モノヲ國王ヨリ遠ザケ、遂ニ撲滅セントノ目的ニテ、其禍鋒自今我黨ノ頭上ニ至レリ。故ニ我黨之身命ヲ犧牲ニシテ國家ノ爲メニ斃レント決心候儀ハ一朝ノ事ニ無之候。

島村　左レバ國王ニハ兩黨イヅレガ有益ノ黨タルコトヲモ御承知無之哉。

徐　少シモ御承知無之ト云フ程ニハ無之、支那黨ヨリハ朝鮮ハ獨立ハセネバナラヌ、乍去從來支那トハ關係モ深キコトユヘ、支那ノ感觸ヲ惡シクシテハ、支那ハ强大國ユヘ朝鮮之獨立ハ不出來ユヘ、ソレガ大切ナリト主張シ、及我黨之論旨ハ獨立ハ他國ノ干涉スベキモノニ無之、支那ヲ恐怖シテハ迚モ獨立ハ不出來ユヘ、支那ニ關係ナク政治ヲ改良シ、外交ヲ擴張スルコトニアルト云フ位ノ事ハ御承ニ相成居候。然ルニ彼ノ支那黨ノ閔臺鎬、閔泳翊、閔泳穆ハ皆外戚ナレバ、隨意ニ入闕謁見モ出來、李祖淵、韓圭稷、尹泰駿ハ兵營監督ユヘ、日々闕内ニ詰メ、朝夕立替リ入替リ謁見、己レノ主意ヲ御耳ニ入レ候事ユヘ、我等之黨卽チ朴泳孝、金玉均、洪英植等月ニ兩三度謁見之節主論ヲ申上候儀ニ付、論旨ノ是非ハサテ置キ、一度耳ニ入レ候事ヨリハ十度承リ候事ヲ信ジ候ハ人情ノ當然ニ候。其上彼等ノ應援

ハ支那人袁世凱並モルレンドルフ等ニテ、是亦屢々謁見シ御下問ニ相成候事不少、我黨ニハ應援トテハ更ニナシ。假リニ貴公使並米公使トスルモ、一ケ年兩三度禮式之謁見ニ止マリ候事ユヘ、國王ノ感觸等其難易輕重御推察候下度候。乍去國王ハ御聰明ニ付、我黨ノ開進論ニ熱心シテ不撓不屈ノ決心タルハ充分御承知ニ付、御信用モ彼等ニ相讓リ不申候。付テハ過般御話シ致シ候暗殺手段モ至急ト申程ニハ無之候ヘドモ、四五ケ月間ニハ是非共實行之積リニ候。何ントナレバ一日ヲ寛スレバ國家ノ害毒一日深ク入リ候、其上支那黨ハ段々心志モ固マリ遂ニ彼等ノ毒手ニ罹リ候樣立至リ候テハ實ニ遺憾不尠事ニ候。

島村　竹添公使歸任已來支那黨ノ勢モ餘程碎ケ候樣承リ候ユヘ、左程相逼リ候樣ノ事ハ有之間敷候。

徐　竹添公使御歸任已來日本ハ支那ト開戰ニ決シ候風說相起リ候事ト、同公使謁見ノ節國王ヘ天下之大勢支那ノ現況並朝鮮之改良一日モ不可怠事等御內奏相成候事殊之外國王ニハ御感觸深ク、直ニモ御着手可相成氣色ニテ有之タル故、的面彼等之頭上ニ落チ懸ルト恐レ候ヨリ、支那黨ハ大狼狽ニテ、閔泳翊、尹泰駿等ハ支那黨ニ無之候旨竹添公使ニ申出置吳候樣依賴致候事モ有之、其他種々之奇談モ不少候處、國王ハ情ニ深ク果斷ニ乏シキ御方ユヘ、直ニ改良ニ御着手ト云フ迄ニ無之、又タ日本之支那開戰論之風說モ其虛傳ナルコト相分リ候ニ付、閔泳翊等ノ支那黨モ大ニ安心再ビ已前ノ模樣ニ立戻リ候ヘドモ、却テ己前ヨリ心志ヲ固メ候模樣モ有之候依テ我々モ漸々前途モ縮リ申候。

島村　彼等ヲシテ改心セシメル方便トシテハ無之哉。

徐　他ニ良法トテハ無之、公使ノ支那黨ニ御面會ノ節手嚴シク御接待且大勢ヲ激告被下候ヘバ或ハ功能モ可有之歟、若シ果シテ彼等改良候得ハ實ニ當國之幸福不過之候。

島村　如シ功能無之節ハ却テ足下等ニ害ヲ移シ候ノミ。

徐　我々ハ前途不永モノ故最早此先キ如何樣ノ害有之共更ニ不苦候。

井上角五郎之報ニ據レバ、日本ヨリ支那ヲ擊ツトノ風說アリシ以來、前夜(卽十一月十四日)迄ニハ支那ノ兵營ニハ嚴戒ヲ加ヘ每夜衣帶ヲ不解鎗長刀ヲ飾リ居候趣。

右徐光範之密話ヲ以テ過日開陳セル洪英植密話ト參考致シ候ヘバ當政府ノ實況頗ル相分リ申候。

支那兵ノ戒備ハ實ニ可笑之至リニ候ヘドモ、是ニテ支那黨ノ狼狽モ推知被致候。何ニセヨ日本兵ノ一人ト支那兵十人ト相戰候テモ、日本兵之打勝ツ可キハ我レモ人モ同感觸ニ付支那兵之

戒處モ無理ナラズ事ト存候。

前陳之通リニテ當所之景況ハ頗ル殺氣ヲ含居リ候得共、急ニ不慮ノ變有之樣ノ儀ハ無之事ト存候萬一變亂差起リ候トモ、我一中隊ヲ以テ支那ノ現在兵僅カ（五六百計）ヲ蹴飛バシ候ハ極メテ容易ニ有之候間、其邊ハ決シテ御懸念不被下奉願候。

十一月十六日　竹添進一郎

伊藤參議殿

井上參議殿

井上角五郎ヨリノ密報ニヨレバ、先般來支那黨閔泳翊等申合、日本黨之金玉均、朴泳孝等ヲ遠流ニ付ス歟、或ハ罪名ヲ付ケ死刑ニ行フベキカ、種々目論見中ニ有之候處、竹添公使御歸任以來國王之御感觸俄ニ相變リ、隨テ金玉均等頗ル權勢ヲ得ルニ付、閔泳翊等之支那黨大ニ恐怖シ、今日ニテハ右金玉均等ヲ處刑候計畫ハ殆ンド其跡ヲ絶チ、閔泳翊等ノ支那黨却テ金玉均等ニ向己レハ眞實ノ支那黨ニ非ズト頻リニ辯解致候。

右ノ外閔泳翊並ニ金玉均等之擧動ヲ相探候處、前文角五郎之報知ハ頗ル其實ヲ得タルモノト存候。就テハ過日未日本黨ヨリ下官ニ向テ支那黨ノ禍機目下相逼リ候樣密話致シタルハ前日之事實ニ有之候。昨今ニ至テハ日本黨俄カニ勢力ヲ得候ニ付、此ノ機會ニ乘シ內政改革スルニ熱中シ隨テ數百年來ノ積弊ヲ一洗スルニハ尋常ノ手段ニテハ迚テモ人心ヲ激動セシメ効ナキニヨリ一時ニ大改革ヲ行ハン胸算ト被察候。當政府モ景況ハ我舊幕ノ末年ト同樣ニテ、腐敗ノ極度ニ相達シ候ニ付、尋常ノ方法ヲ以テ內政ヲ改良スル事ハ實以テ難義ニ付、日本黨ノ激擧ヲ企テ候モ一應ハ尤ニ被存候ヘドモ、別ニ國王ヲ輔佐シテ政務ヲ擔當スル丈ケノ人才トテハ無之、僅カニ日本黨ノミ稍ヤ宇內ノ情勢ヲ見聞致シ候位ノ事ニ付、萬一日本黨失敗シテ身ヲ亡スノ事有之ニ於テハ、差寄リ朝鮮國獨立ノ望ミモ相絶ヘ候儀ニ付、右日本黨ノ激擧ハ朝鮮國ノ爲メニモ得策ト不被存候。依テ下官ヨリ精々說諭ヲ加ヘ血臭キ手段ニ出ル樣ノ事ハ爲致不覺悟ニ候間、其邊ハ先ツ御安心被下度候。

十一月十八日　竹添進一郎

徐光範ト島村久トノ談話提要

伊藤參議殿
井上參議殿

郵政總辨洪英植來訪談話要畧

洪

我ガ黨ガ國家ノ危急ヲ唱フル概略ヲ陳述可仕候。抑モ拙者ノ如キハ無識無才ニシテ氣象乏シキガ爲メ、平生我ガ黨中ニテモ平和主義ト稱セラルヽ位ノ事ニ候所、近來ニ及ンデハ國勢危迫坐シテ其滅亡ヲ待ツニ忍ビザルノ域ニ陷リタレバ、不得已過劇ノ擧ヲ企ツル場合ト相成候。就テハ其國勢ノ急ナルコトヲ陳ゼンニ、我ガ國家ノ妨害ヲナスモノハ則チ我政府ナリ。而シテ其政府ヲ言ハバ政府ナシト答フルモ亦可ナリ。何ントナレバ今日權力ヲ有スルモノハ上下ノ別ナク國王ノ寵愛ヲ蒙ムルモノニ止マリ、是等ガ巧ミナル奸計ヨリシテ非當ノ權力ヲ政治上ニ及ボスコトヽ相成候。其内部ノ社會ヲ分別スレバ凡ソ五種アリ。

第一　ハ王族トス

第二　當時ノ閔氏（外戚ノ權威アルモノ）

第三　私事（之ハ臣民ノ内ニテ國王ノ寵遇アルモノニシテ英植等モ其内ニアリ）

第四　宮官

第五　宮女（國王ニ近侍スル女官ヲ云フ）

右ノ輩皆種々ノ聯絡ヲ以テ妨害ヲナシ、此等ヲ一新改革セザレバ眞正ノ政治ハ難施義ト存ジ候。

先ヅ國王ノ御擧動ヲ申セバ御親戚ニ對シテ薄情ナル御取扱ヲナサレズ、善惡ハ御承知ナガラ至極人情ニ深クシテ自然明正ナル御處置ハ出來兼申候故ニ此社會ニテ隨分權威ヲ弄スルノ弊害ヲ釀シ候。

閔家ニ對シテモ亦然リ。

一般ノ臣下ガ國王ノ寵過ヲ蒙リテ權勢ヲ擅マヽニスル社會ニ至テハ、元來國王ガ始メ開進主義ニシテ、國論既ニ此ニ決シタル故、我國ノ開明ニ力ヲ盡スハ我黨而已ニハ無之、滿朝同論ト云フモ過言ニハ御座ナク候。何ントナレバ國王ガ開進主義ニ在セラルヽニヨリ、頑固論ヲ唱フレバ已ノ地位ヲ得ザルニ付、是非ニモ其主義ニハ移ルモノヽ、之ト無精神ナレバ唯ニ利已主義ヨリ外ニ考トテハ無之輩ナレバ、遂ニ今日ノ妨害ヲ惹起スルノ根原ト相成候。隨テ前ニ陳ブル第一第二第三ノ社會ガ實際ニ付テノ仕方ヲ申セバ、甲ノ考ヘ通リ施行セントスル事ハ乙ニ不利ナリ、乙ノ仕事ト丙ノ身ノ上ニ害アリトカ、各自ニ利害得失之相違アルガ爲メニ、上良ノ論議ニヨリテ施行スベキ事ハ小事ト雖其ノ容易ニ成リ難ク候。之ニ反シ一人アリ國王ノ意向ヲ伺ヒ取リ、權威ニ任セテ成スコトハ國力ニ及バザル程ノ難事モ容易ニ行ヒ得ベキ儀ニ候。是等ノ惡弊ヨリシテ彼人ノ黜陟ナリ、人民ヲ抑制スルナリ贈賂ヲ受クルナリ、其慘狀實ニ見狀致シ難ク、仍テ最モ可憐ハ今日ノ人民ニシテ、眞ニ塗炭ノ苦ミト可申候。又政府ノ形狀ヲ見テモ既ニ亡國ノ兆ヲ現ハセシト憂慮ノ餘リ、我ガ黨ガ激行ヲ企ツルニ及ビタル儀ニ候（國ニ云フ民間ノ貨物ヲ貪リ苛酷ナル奪掠ヲ試ミルハ新設ノ四兵營ヲ以テ第一トストノ街說アリ、又彼ノ監役ノ官ヲ賣ルニ當リテ種々ノ奸策ナキニシモ非ザルベシ。又現ニ聞ク或營ノ兵士數十名或ルモノヘ納金ヲ怠レリトテ其婦人ヲ質ニ取ラント迫リタリト）宮官ノ如キハ別段權力トテハ無之候ヘドモ、朝夕近侍ノ者ニ候ヘバ內外ノ事情ヲ御下問アレバ有ル事、無キ事申上ゲ、忌憚ヲ知ラズ、仍テ國王ノ寵遇ヲ得ルニモ近クニモ、萬人凡テ此ノ宮官ノ舌頭ニ依ラザル者ハ恐ラク有之間シ故ニ、自然冥々中權力ヲ有シ隨分可怪ノ策略不少候。女官等ニ至ルモ矢張宮官ノ類ニテ、緣引キ傳手ヲ以テ是非スルコト不尠是等ノ弊モ少小ナラザル儀ニ候。今日我國ノ形況ハ外部ニ顯ハレタル事ハ姑ク置キ、內治ニ至リテハ大ナル改革アリ、從前國王ニ親シク近ヅクヲ得ルハ御親戚ノミニ限リ居候處、近時外臣御傍ニ近ヅクヲ得ルニ至リシハ開化論ヨリ因緣シタルナリ。又妾ノ子ハ人ノ爲メニ齒セラレズシテ是迄高官ニ就クコトヲ得ズ、又中人ハ堂上官トナルコ

トヲ得ザリシニ、兩種トモ顯官ヲ得ルニ至ル等ノコト最モ內部改革ノ大ナルモノニ候。乍併國王ノ寵遇ヲ藉リ己ノ威權ヲ逞フスル弊隨テ相生ジ候。之ヲ約言スレバ、今日迄數百年ヲ流傳シタル弊害不少候處、當時ノ弊ハ少シク面目ヲ改メタル弊害ユヘ、猶更國難ト被存候。其ノ故ハ前述ノ如ク國王ノ開進主義ヨリシテ總テ開進ヨリ生ジタル弊端ナレバ、却テ難治ト被存候尙ホ其ノ形狀ヲ詳言スレバ今日ハ新法ヲ好ミ明日ハ舊法ヲ主張ス、此等國家ノ利害ニ關シテ意見ヲ變ズルニ非ラズ、唯々己レノ便益ヲ謀ルニ外ナラザレバ、實ニ議論ト實際トハ霄壤ノ別アリテ殆ンド苦ノ得テ已マザル所ニ無之候。

竹添　御說話ノ次第始メテ詳承致候。熟ラ思フニ昔時我德川ノ末世ト殆ンド彷彿タル形狀ト被存候。隨分御困難ハ推察致候。就テハ彌以過之御企ハ無用ト存候。我ガ德川氏ノ時ニモ閣老抔ヲ殺戮シタルコト有之候ヘドモ。夫ヲ以テ改革ノ功ヲ奏シタル例無之、吳々モ穩便ナル方法ヲ以テ御國ノ爲御盡力望ム所ニ候。

洪　貴國ノ御改革ハ德川ノ政權ヲ削奪シタルノミニテ德川ハ亡ビタレドモ、矢張リ日本人ガ改革シテ日本人ガ治メタルナリ。夫コソ我輩ノ願フ所ニ候ヘドモ、我國ハ日本ノ德川ヲ廢セラレタルトハ事變リ、此儘ニテ數年ヲ經過セバ朝鮮ハ變革スルトモ再ビ朝鮮人ガ治スルコト可難ト杞憂ニ不堪義ニ候。

洪英植ハ至テ沈着溫和ナル人物ニ有之、右過激ノ擧ヲ思立候精神ハ卽前陳問答ノ通リニテ、今度日本黨ノ企タルヤ朝鮮ノ積弊ヲ一洗スルニハ激勅ノ擧ニ出ヅルニ非レバ萬々其ノ功ヲ奏スル見込無之トノ主意ニ出デ、就テハ我ニ向テ內部ノ實況ヲ隔意ナク打明ケ、實ニ死ヲ決シタルノ眞情往々肆電ノ間ニ流露シ殆ンド人ヲシテ感動セシムル殆ニ有之候。

又今日金玉均ヨリ承リ候處ニテハ、日本ヘ公使派遣ノ儀ハ從前既ニ評議有之タル事ニ候處、今度又々再發致候。然ルニ第一入費ノ出處無之ニ困難致候上、又其人物次第ニハ御國ノ事情ヲ見誤リ却テ朝鮮ノ爲メニ不相成事故、其人選ニモ苦シミ候、右ノ次第ニ付キ愈以テ派遣ニ決スベキヤ否ヤハ未ダ確定不致候。

同氏又云フ、此一兩日日本ハ決シテ支那ト戰爭スルノ意無之ト申傳ヘ候處ヨリ、支那黨ノ狼狽相止ミ又々過日ノ景況ニ跡戻リスル雲行ニ候。

右ノ通リノ事情ニ候間朝鮮人ニハ支那ヲ恐ルニ足ラザルヲ知ラシメ、之ヲ以テ激動スルニア

ラザレバ迚モ内治改良ノ目的ヲ達シ難キニ付日本黨ノ企モ無理ナラヌ事ト被存候。

昨十二日附ノ書信ニハ策ニ日本黨ノ極默論ノミニ渉リ内政ヲ醫スルニ劇藥ヲ用ヒザルベカラズトノ論旨未ダ判然不致候間更ニ追啓ヲ以テ申上候也。

十一月二十三日

竹添進一郎

伊藤參議殿

井上參議殿

伊藤參議等ヨリ竹添辨理ヘ電訓

明治十七年十一月廿八日發遣

伊藤參議

吉田大輔

十一月十二日附兩卿宛通信熟讀スルニ、甲案ノ趣意ハ穩當ナラズ、乙案ヲ以テ可ナリトス。尤モ我政府ハ朝鮮政黨ノ一方ヲ助ケ、或ハ公ケニ之レニ干渉スルコトハ取ラザル所ナリ。目下日本黨ト稱スル者ヲシテ務メテ穩和ノ手段ヲ以テ其國ノ開明ニ盡力セシムルヲ以テ我ニ利アリトス。此邊深ク御注意アルベシ。

井上外務卿ヨリ吉田外務大輔ヘ

（十七年十二月三日

竹添ヘ御回答ノ旨趣ハ拙者同意ナリ。併シ公使任命セラルヽノ場合ニ於テ斯ノ如キ特別ノ宸翰ヲ持參スルコトハ好マシカラズ、右ハ口上ニテ述ベシムルヲ可トス。右之趣竹添ヘ訓令アルベシ。

外務卿ヨリ竹添ヘ

（十七年十二月四日釜山經由）

去月十二日付書信ノ義ニ付韓圭稷ヨリ島村ヘ指示サレタル宸翰ノ草稿之掲載有之候如キ朝鮮國王殿下ヨリ我皇帝陛下ノ御依頼ノ趣ハ宸翰ヲ以テ進達スルコト斷ジテ故障アリトス。因テ公使任命ノ場合ニ於テハ口上ニテ進達セシムベキナリ。

京城事變始末抄

十二月四日　午後　九時　郵政局宴會局後失火アリ閔泳翊刺客ノ爲ニ重創ヲ負フ

同　午後　十時　事危急ニ逼リ國王親書ヲ齎シテ護衛ヲ求メ我公使兵ヲ率テ入闕ス

五日　午前　十時　米公使英領事入内國王謁見ヲ許ス

同日　午後二時過　獨逸總領事入内國王謁見ヲ許ス

同日　午後　四時　國王我公使ヲ召シテ大王妃寢食不安大闕ニ還幸スベキヲ傳フ

六日　午後三時頃　國王兩議政ヲ召シテ大政一新ノ勅令ヲ傳フル時忽チ轟然銃聲アリ

十二月四日　午後九時、郵政局近傍失火、十時、公使馳向王宮、王移于景祐宮、一時、召米公使、英領事、皆不來、米士官ベルナド入宮

清曆十月十七日　午後、日兵聚於日本使館、八時、郵政局宴、火起、十時、日兵至景祐宮、夜二時、王至景祐宮、

十二月五日　午前三時、柳在賢戮、晨、王黜內閣、十時、米公使英領事入宮王移于李載載元宅、午後二時、獨領事入宮、三時、米公使等辭去、國王留我公使、日暮王還大闕、此夜公使始聞知大臣被殺事

清曆十月十八日　早、李祖淵等遭害、午前、亂黨擁王、遷于李載元家、午刻、亂黨自相除官、

十二月六日　午前王再留公使、午後三時、傳大政維新之詔、忽銃聲貫耳、淸兵突入、天昏、王出門去、八時、公使歸館、夜半敵焚南山護衞本營、

清曆十月十九日　午前十時、吳兆有等帶兵前往、午後四時、排門而入、午後六時、日兵擁王入後苑

十二月七日　晨、敵來攻公館、午前八時、金宏集送書、午後二時、公使出館、日暮、渡漢江

清曆十月二十日　午後四時、使館被焚、日本公使出城、

十二月八日　午前七時、公使抵濟物浦

十二月十日　ベルナド送我難民來、

甲申十月十八日韓廷任免

甲申十月十八日

謝恩兵曹參判徐臣輔、禮曹參判吳益泳、同成均、閔種默、傳曰、承旨並許遞李載完、金玉均徐光範、申箕善、朴泳敎、除授、傳曰、惠商公局堂上金玉均差下、傳曰外衙門堂上並許遞徐光範協辨差下、使之署理、主事邊燧尹致昊並參議差下、傳曰後營使許遞前營使朴泳孝、兼察左右營使並許遞洪英植徐授、左右捕將許遞前營使朴泳孝、左捕將兼察、左右營使洪英植右捕將兼察傳曰、司官長徐載弼後營正領官差下、傳曰、司官長生徒部將十二人、並別軍職差下、傳曰、右議政勉副、傳曰、兵曹判書李載元協辨軍國事務洪英植拜相、傳曰、政官牌招開政、

十八日

今日拜辭中、傳曰、前營使韓圭稷許遞錦陵尉朴泳孝除授、傳曰、戶曹堂上並許遞承旨金玉均參判除授、傳曰、判尹許遞金宏集除授、傳曰、刑曹判書許遞尹雄烈除授、傳曰、凡係全國敗政並屬度支、傳曰、部將申福模前營副領官差下、部將李昌圭後營副領官差下、傳曰、前護軍洪淳

甲申十月十八日韓廷任免

馨起服使之承候、傳曰、都承旨李載完兵曹判書除授謝恩、行都承旨李載完行左承旨徐光範右承旨朴泳敎左副承旨申箕善傳曰、左承旨許遞前望隼子入之、洪晋游落點、傳曰、承旨有闕之代、金洛鎭、申錫游、趙東冕除授、吏曹都承旨朴泳敎左承旨申錫游右承旨申箕善左副承旨金洛鎭右副承旨趙東冕副承旨洪晋遊、傳曰、前營副管官李瀉鍾後營副領官李熙正差下、軍國衙門親軍前營使隼朴泳孝吏曹兵曹判書隼李載完今加資憲除授事承傳、謝恩兵曹判書李載光都承旨朴泳敎右承旨申箕善左副承旨趙東冕左議政世子傳李載元右議政洪英植、兵曹口傳政事親軍前營使隼朴泳孝後營正領官徐載載弼除授事、及前營副領官ニ隼申福模、李寅鍾後營副領官ニ李昌圭、李熙正以上、今加折衝差下事、承傳吏曹、後營正領官徐載弼今加嘉善加資事、承傳政院、啓曰、新除授承旨申錫游方正被調蒙放中、何以爲之事傳曰、蕩滌叙用、又啓曰、同副承旨洪晋游在外上來下諭事、傳曰、許遞前望單子入之、朴灝陽添書落點、吏曹同副承旨朴灝陽謝恩判府事沈舜澤協辨軍國事務徐光範政院啓曰、時原任大臣時原任閣臣爲承候來待候、進御三戔重人蔘栗、米飮、自今日一貼式限二貼煎入事、及大王大妃殿王大妃殿中宮殿世子宮世子嬪進御三戔重人蔘栗米飮自今日一貼式限二貼煎入事下敷政院啓曰藥房三提調持栗米飮待候、傳曰封入、

查明事實始末書

井上馨

第一

京城事變ノ辨理スルノ要領ハ左ノ一點ニ外ナラズ。

（甲）若シ竹添ニシテ朝鮮政府ノ稱道スル所ノ如ク、洪英植、金玉均等ノ亂黨ト連謀スルノ事實又ハ情意アラシメバ、是レ日本公使ノ處置ハ朝鮮ノ內亂ニ干涉スルモノニシテ、不正不法ノ事タルヲ免レズ。

（乙）若シ竹添ニシテ始メヨリ亂黨ノ謀ニ預ラズ、又亂黨ノ隱謀アルヲ知ラズシテ單純ニ國王ノ依賴ニ因リ國王ヲ保護スル爲メニ入闕シタルモノナラシメバ、是レ竹添ハ友國ノ爲メニ好意ヲ盡スモノニシテ、公法ニ背クモノニアラズ。而シテ他ノ外兵ノ之ヲ侵擊シ更ニ波及シテ我公使館ヲ焚キ我兵民ヲ亂殺シタル者アリタルハ、我國ニ於テ其侵害ヲ回復セサルコトヲ得ズ。

余ガ全權大使ノ命ヲ受ケタルハ竹添ガ所爲ヲ辯護スルガ爲メニ非ラズシテ、公法ニ據リ情義

ニ基キ公正ナル査辨ヲ爲シ、理ノ在ル所ニ從テ此事件ヲ處分シ、上ハ以テ　我皇帝陛下ノ一視同仁ノ盛德ヲ輔賛シ、下ハ以テ兩國ノ和好ヲ全クシ、兩國人民ノ幸福ヲ維持セント欲スルニ在リ。此重大ナル使命ヲ荷フガ爲メニ余ハ朝鮮官吏ト談判スルノ前ニ於テ先ヅ第一左ノ手順ヲ以テ竹添ガ果シテ朝鮮ノ亂黨ト通謀セシヤ否ヤヲ査明スルノ方法ヲ執リタリ。

（一）十二月十四日卽京城事變ノ電報ヲ接スルノ第二日ニ於テ栗野書記官ヲ相模丸ニ載セ仁川ニ到ラシメ當時ノ事情ヲ探問セシメタリ。

（二）十二月十六日余ガ旅行ヨリ東京ニ歸リ、横濱ニ到着スルノ日ニ於テ直チニ井上議官ヲ蓬萊丸ニ載セ仁川ニ至リ直ニ竹添ヲ訊問セシメ、其後余ガ三十日ニ仁川ニ着スルヤ否ヤ、井上ヲ京城ヨリ召還シ、其探知スル處ヲ面陳セシメタリ。

（三）余ハ仁川ニ入ルヤ直ニ島村ヲ召シ、竹添ガ手ニ成ル所ノ事變始末書ニ據リ、遂項對比シテ面ノアタリ島村ニ訊問シ、之ガ爲メニ仁川ニ於テ一月ヲ滯留スルコトノ猶豫ヲ取リタリ。又京城ニ入ルト否ヤ竹添ヲ召シ當時ノ事情ヲ面陳セシメ其夜鷄鳴ニ達シタリ。

余ガ最初ニ命ヲ受ケテ東京ヲ出ルノ日ニ方リテ、實ニ未ダ竹添ガ所爲ノ曲直ヲ判然スルコト能ハザリキ、下ノ關ニ於テ栗野書記官ガ歸國スルニ遇ヒ、初メテ京城ノ事變ノ詳細ヲ知悉スルコトヲ得テ、余ガ辨理ノ目的ハ始メテ確定シタリ。繼テ仁川ニ至リ京城ニ至リ益々事情ノ明瞭ナルヲ得テ、余ガ目的ヲシテ一直ニ進行シテ誤ラザラシメタリ。卽チ竹添ハ始終朝鮮ノ亂黨ニ連累セザリシコト之レナリ。

朝鮮人支那人ハ竹添ガ亂黨ニ干渉シタルコトヲ稱道シ、中外ニ報告シ、玆ニ我國ニ向テモ亦之ヲ聲明シタリ。是レ蓋シ自ラ其責任ヲ掩飾スルノ造意ニ出ルノミニ非ズシテ、其心ニ於テ實ニ竹添ガ所爲ヲ疑ヒタルナリ。誠ニ其故ヲ尋ネルニ左ノ四點ニ起由スル者ノ如シ。

（一）洪英植、金玉均等日本人ト親好ナル交際アリ、及ビ亂黨中少壯ナル士官生徒ハ卽チ日本ノ學校ニ於テ演習セル生徒ナルコト。

（二）竹添ガ護衛兵ヲ引イテ景祐宮ニ入ルノ夜、王命ニ依リ非常ヲ譏察スル爲メニ諸門ヲ守衛セシメタリ、故ニ亂黨ヲシテ中ニ在リ勢ヲ挾マシメタルノ疑アルコト。

（三）竹添ガ入衛ノ後三日ヲ經ルモ王宮ヲ去ラザリシコト。

（四）金玉均、徐光範等日本ニ逃竄セシコト。

此四點ノ疑似ノ形迹アルニ因リ、朝鮮人支那人ハ草々ニ判斷ヲ下シ、竹添ガ亂黨ト連累アルコトヲ稱道セルハ蓋シ强チニ揑造詐僞ノ情ニ出ルモノニ非ザルベシ。卽チ余ト雖ドモ始メテ電報ヲ接セシ時ヨリ、下ノ關ニ於テ栗野書記官ニ面會スルマデハ實ニ半信半疑ノ迷夢中ニ在ルコトヲ免レザリシモ其後詳細ナル査明ヲ經ルニ至テ始メテ事情明確ナルノ結果ヲ得タリ。

（一）　金均等ハ東京ノ學士書生ト親密ナル交際アリテ、互ニ密友ト稱スルノ有樣ナリシモ却テ竹添トハ明治十五年以來互ニ相輕侮シ、其交情ハ甚ダ冷淡ナリシ。今度ノ事變ノ前一月ヲ隔ツル比、金王均等竹添ニ到リ、朝鮮政事ノ意見ヲ談ゼシニ、竹添ハ色ヲ改メテ之ヲ叱責シタルコトアリ。是ヨリ後ハ金玉均等ハ竹添ニ向テ親密ナル情話ヲ爲スコトヲ憚タリ、反テ竹添ヲシテ朝鮮內部ノ事情ニ迂遠ナラシメタリ。

（二）　竹添ガ兵ヲ引テ入衞シ、王命ニ依リ諸門ヲ看守セシメシ故ニ、金玉均等ガ實ニ其勢力ヲ挾ミタルコトハ蓋シ之レアリシナルベシ。併シナガラ是卽チ竹添ニ於テハ偶然ノ事情ニシテ、實ニ預期スル所ニアラザリシナリ。故ニ竹添ハ亂黨ヲ助クルノ責ニ任ズベキ者ニ非ズ。此時ニ當リテ各國公使モ亦タ均シク國王ヨリ入闕ノ命ヲ得タリシモ、竹添ハ護衞兵ヲ隨帶セルヲ以テ特ニ入衞ヲ得、而シテ幸ニ其護衞兵ノ助アルヲ以テ竹添ヲシテ最モ速カニ召ニ應ジテ入衞スルコトヲ得セシメ、又不幸ニシテ竹添ノ入衞ハ亂黨ニ加勢シタリトノ嫌疑ヲ起サシメタリ。

米ノ公使館屬員ベルナドー氏ハ四日ノ夜入觀シ、米公使及英領事ハ翌日上午召命ニ應ジ入觀シタリ。米公使ノ國王ニ景祐宮ニ謁見シタル時ニ、國王ハ幽囚ノ狀アルコトナク、公使ヲ接待スルノ懇意ハ平生ニ倍シタリ、此米使ノ親シク余ニ面話スル所ナリ。

（三）　竹添ガ三日間王宮ヲ去ラザリシモ亦タ其王命ニ順ニ順ヘルニ因ルモノナリ。竹添ハ入衞ノ翌日卽チ五日ニ於テ王ニ辭シ去ランコトヲ試ミタレドモ、國王ノ更ニ倚賴アリシニ由リ、竹添ヲシテ去ラント欲シテ復タ止メラシメタリ。其後國王竹添ヲ引見シテ面ノアタリ王大妃ノ疾病ヲ告ゲ、王宮ニ還幸スルノ護衞ヲ懇囑アリシニ由リ、竹添ハ更ニ護衞シテ還宮シタリ。終リニ（六日ノ朝）竹添ガ拜辭ヲ請フニ臨ミテ、國王ヘ三宮各々其宮ニ還ルヲ俟テ而ル後ニ備ヲ解クベシトノ命ヲ傳ヘラレタリ。此時ニ於テ竹添ハ仍ホ王命ヲ恭ミ辭シ、去ルニ忍ビサリシ。其後竹添ガ退テ仁川ニ在リシ時、國王ハ仍ホ米英獨ノ交際官ニ托シテ竹添ニ懇切ナル好意アルコトヲ傳ヘシメラレタリ。

（四）　金玉均等ガ形ヲ變ジ仁川ニ來リ、終リニ三千歲丸ニ搭載シテ我國ニ逃竄セシハ、實ニ彼等ノ平生親交スル日本人ノ庇隱スル所ニシテ、衆人雜沓ノ中ニ混ジタレハ竹添ハ動亂ノ際之ヲ查明スルニ暇アラザリシ。彼等ハ竹添ヲ藉ラズシテ猶ホ其ノ他ノ私友ノ力ニ倚リテ以テ其ノ身ヲ藏匿スルノ方法ヲ得ルニ餘リアリシ。竹添ガ千歲丸ニ載セテ歸國セシメタル屬員木下眞弘ガ、外務省ニ於テ金玉均等ノコトヲ訊問サレシ時、木下ハ茫然トシテ彼等ノ存否及ビ行衞ヲ知ラザリシ、此時席ニ在ル書生同時ニ歸國シタル者ハ、聲ヲ發シテ竹添及木下ガ事情ニ迂遠ナルヲ冷笑シタルモノアリシ。

之レヲ要スルニ其ノ情ヲ知ラズシテ其形ヲ論ゼシメハ竹添ガ亂黨ノ欺罔ヲ被ムリタリト云ヒ又竹添ハ亂黨ト共謀シタリト云フモノアルハ、强チニ惡意ノ構造ニ非ザルベシ。余ハ細カニ其ノ情ヲ推原シ、之レヲ事實ニ參考シテ竹添ガ單ニ國王ノ召命ヲ恭ミ、其ノ所行ノ公法ニ悖ラザルコトヲ確信スルコトヲ得タリ。是レヲ余ガ日韓事件ヲ辨理スルノ根理トス。

第二

余ガ京城變亂ノ事件ヲ辨理セシ第一ノ要點ハ、竹添公使ガ亂黨ノ事ニ干涉セシヤ否ヤヲ審査スルニ在リ、而シテ公使ノ亂黨ト通同ノ情ニ至テハ反復根究シテ其必無ナルヲ知悉セシハ已ニ前ニ述ル所ノ如シ。

此ニ次グノ第二ノ要點ハ卽我護衞兵ノ淸國兵ト、王闕ノ内ニ於テ爭鬪セシ事實ヲ勘審シテ其ノ責ノ何レニ歸スルヤヲ査明スルニ在リ。我兵召命ニ應ジテ王ノ躬ヲ護衞ス、淸兵猝ニ前來シ燔ヲ發シ我兵ヲシテ已ムヲ得ズ之レニ應ジ防守ノ位地ニ立タシメタリ。然ルニ淸國武辨ノ稱ス

仙臺鎭臺
歩兵第四聯隊
大隊第一
中隊

ル所ニ曰ク、

甫メテ官門ニ入レバ燔ノ下ル雨ノ如ク、地雷火砲一時並ビ發シ、淸官ハ以爲ラク邪臣亂ヲ作シ淸兵ヲ拒クト、初メヨリ竹添公使ガ之レヲ爲サシムルヲ知ラザリキト。

我護衞兵ノ京城ニ在ルモノハ步兵一中隊ナリ。我國ノ兵制ニ於テ大砲ハ步兵中隊ノ有スル所ニ非ラズ、故ニ京城駐在ノ隊ニハ素ヨリ大砲アルコトナキナリ。我兵ニ地雷火砲ノ設備アルコト無キハ此ノ事ヲ査明スル爲メノ第一ノ證據タリ。

平心ニ觀察スルニ、當時外ニ在ルノ朝鮮人ハ浮說洶々トシテ竹添公使ガ兵ヲ引イテ入衞スルヲ以テ、亂黨ノ凶燄ヲ助クルモノトナシ、國王ヲ取テ奇貨ニ居ク者トシタリ。淸兵ハ擾亂ノ際朝鮮官吏ノ匆遽ノ請ニ誘動セラレ、卒然之レニ應ジ、而シテ未ダ竹添ノ王命ニ依リ護衞スルコトヲ詳ニスルニ暇アラズ。寧ロ兵力ヲ以テ國王ヲ日本兵ノ手ヨリ救出スルノ急ナルヲ以テ、我公使ヲ攻擊スルノ事體重大ナルコトヲ忘レタル者ノ如シ。

我護衞兵ハ竹添公使ニ隨テ國王ノ所ニ在リ、國王ヲ警護シ、以テ非常ニ備フ。是ヲ守地ニ居ル者トス。淸國兵ハ我護衞兵ノ内ニ在ルヲ知リツヽ進デ外ヨリ來ル者ナリ。是ヲ攻地ニ居ル者トス。攻守ノ勢已ニ判然見ル可キトキハ、砲發ノ先後ハ必ラズシモ問フ所ニアラザルナリ。況ンヤ我公使一行ノ王宮ニ於テ國王ト共ニ銃聲ヲ聞キ、不意ノ變ニ驚キタル時ハ支那兵ハ已ニ問

近ク我ガ對面ニ迫マリ、左右ノ墳壁ニ散兵ヲ布キテ我兵ヲ中ニ取リ込メ、一擧ニシテ鏖殺セントシタルノ形狀ナリシハ隱晦スベカラザルノ事實ナリトスルヲヤ。

且清國ニ三營ノ兵員ニシテ、更ラニ朝鮮兵ヲ合セタリ。而シテ我護衞兵ハ僅カニ百二十名ニ過ギズ。況ンヤ之レヲ率イル者ハ竹添公使ニシテ、武事ハ其職ニアラザルヲヤ。此ノ寡少ノ兵ヲ以テ十倍ノ敵ニ向テ我レヨリ戰ヲ挑ムハ事情ノ有ルコトヲ容サヾル所ナリ。

清國武辨ハ又函文ヲ我ガ公使ニ送リ、其ノ好意ヲ通ゼシモ、公使ヨリ回信ナキヲ以テ辭トナセリ。然ルニ公使ノ函文ヲ受取リタルハ其ノ銃聲ヲ聞クト同時ナリシ。惜哉清國武辨ハ此ノ如キ危疑ノ際ニ方テ交際上ノ相當ナル手順ヲ經テ、以テ竹添ニ通信セズ。又竹添ニ交際上ノ往復ヲナス爲メノ充分ナル時間ヲ與ヘザリシコトヲ、此ノ時ニ於テ若シ清國武辨ヲシテ僅カニ平和ノ注意ヲ有タシメバ、此ノ不幸ナル兩國兵隊ノ衝突ヲ避クルニ餘アリシナルベシ。

更ニ又說ヲナス者アリ。曰ク京城ノ變ハ清兵ヨリ先發セシニモアラズ、又日本兵ヨリ先發セシニモアラズ、其ノ間ニ介在セシ亂黨ノ所爲ニシテ、彼此共ニ亂黨ノ爲ニ誤マラレタルナリト此ノ說ハ一種巧ミニ構造セル模稜ノ言ニシテ、事實ノアルベキ所ニアラズ。更ラニ辨ズルコトヲ借ラザルナリ。

我護衞兵ト清國兵トノ位置ニ據リ、及當時ノ實際ヲ核察スルトキハ、此ノ事ノ責ヲ負フ者彼レニ在テ此レニ在ラザルハ復タ掩フ可カラザル者ナリ。

以上ノ情景ハ清國兵ガ朝鮮京城ニ在テ我公使ノ護衞兵ニ向ヒ侵凌ヲナシタルニ付、清國政府其責ニ任セザルコトヲ得ザルノ理由トス。

井上大使金宏集ト商議要畧抄

明治十八年一月七日

明治十八年一月七日朝鮮國京城政府ニ於テ、井上特派全權大使ト朝鮮國全權大臣金宏集ト變亂ノ事件ヲ商議ス。互ニ帶ル所ノ委任狀ヲ出シ之レヲ示ス。金ガ帶ル所ノ委任狀中ニ京城不幸有逆黨ノ亂以致日本公使誤聽其謀進退失據館焚民賤事起倉猝拘非送料ノ語アリ。大使曰、疑似構造ノ說ヲ以テ互ニ相論辯スレバ何ノ日カ能ク結了スルコトヲ得ン。余ハ既ニ此意ヲ以テ大君主ヘモ申上置キ、又趙督辨ニモ委シク話シ置キタリ。此等ノ文字ハ削除セラレタシ。金曰、誤聽其謀トハ竹添公使逆黨ニ誤サラレタリトノ意ナリ。進退失據トハ同公使京城ヲ去リ仁川ニ赴キタルコトヲ云フナリ。大使曰ク、此等ノ說話ハ必竟想像ニ出ルモノナリ、貴政府若シ想像ノ說ヲ主張セラレバ我モ亦想像說ヲ出スベシ。此ノ如ク彼此想像ヲ以テ相論ジテ已マザルハ竟ニ平和ノ道ニアラズ。是レ我政府余ヲ派出セラレタル本意ニアラズ、金曰、御尤ノ事ナリ、余モ亦決シテ多事ヲ好ムニ非ズ、只双方ニ疑團ノ在ル所ヲ吐露シ、其上ニテ御談判致サバ一層好キコト、存ズレバナリ。大使曰、御好ナラバ余モ亦辭セザルナリ、然レドモ事此ニ出ヅレバ竹添ノ往クハ召命ニ因ルコトナレバ、大君主ニモ此處ニ御出ヲ願ヒ、以テ事實ノ是非ヲ證明セザルヲ得ザルニ至ルベシ。左樣ニテハ到底妥議結局ノ時ナルベシ。金乃チ退テ大君主ニ請テ以テ致以下十四字ヲ削リ去レリ。

明十八年一月七日特派全權大使井上、與朝鮮國全權大臣金宏集、會干議政府、商議變亂事件互出所帶全權字樣、示之、金所帶字據內、有京城不幸有逆黨之亂、以致日本公使誤聽其謀、進退失據、館焚民賤、事起倉、猝均非逆料、之語、大使曰、以疑似構造之說、互相論辨、何日能得結了、余既經以此意面奏大君主、又經詳告趙督辨、此等文字、須要削去、金云、誤聽其誘者卽竹添公使爲送黨所誘之意也、進退失據者、謂該公使去、京城赴仁川也、大使曰、此等說話、專係想像、貴政府若主張想像之說、則我亦有想像之說、彼此以想像立論不已、究竟非平和之道是非我政府派余之本意也、金曰、余亦決非好多事、唯以彼此疑團所在、一相吐露、然後商議、似最好、大使曰必以此見望余亦所不辭也、但事出干此竹添之往、因干召命、不得不請大君主臨

干此場、以證明事實是否、如此、成妥議、結局、豈不難哉、金乃退而請干其君主、削去以致以下十四字、

在朝鮮警備隊長村上歩兵大尉報告

明治十七年十二月三十一日附ヲ以テ御軍卿官房長兒島益謙ヨリ、在朝鮮警備隊長村上陸軍歩兵大尉ヨリ西郷陸軍卿及ビ井上外務卿ニ宛テタル報告ヲ參謀本部副官茨木惟昭ノ許ニ送附シ來レリ其ノ要ニ曰ク

十二月四日午後第九時頃、俄然我公使館近傍ニ火災ヲ見ル、本隊兼テ定メ置ク警備法ニ因リ直チニ出テ公使館ニ出ル、暫時ニシテ國王ノ使節來リ、我公使ヲ招キ護衛ヲ托スト、公使招キニ應ズ、爰ニ於テ本隊公使ヲ護シ王ノ離宮景祐宮ニ至リ（此夜暴徒アツテ諸大臣ヲ刺シ某宮ニ放火ス王爲メニ宮室ヲ避ケラル、ト云フ）王命ニ依テ諸門ヲ守ル。則チ正門ヲ小谷中尉、裏門ヲ面高中尉、右方諸門ヲ大西少尉、左方諸門ヲ安藤少尉トシ、要所ニ少哨ヲ配布シ門扉ヲ鎖シ出入共皆王命ニ因ル。五日午後王閨母皇妃太子共ニ隣家ナル李載元ノ宅ニ移ル。諸門ノ守備等總テ離宮ニ異ナルコトナシ。同五時頃ニ至リ國王ヲ護シ王宮ニ歸ル。是ヨリ先キ面高中尉、大

西少尉ヲシテ王宮ニ入リ、假リニ王室ノ周圍ヲ警備セシム。爰ニ於テ安藤少尉ヲ前驅トシ、小谷中尉ヲ後驅トナシ、韓兵二中隊計リ其前後ヲ守リ、以テ王宮ニ歸ル。而シテ更ニ正門ヲ小谷中尉、後門ヲ面高中尉、右門ヲ大西少尉、左門ヲ安藤少尉トシ、以テ王ヲ守ル。其出入ノ許否等總テ前日ノ如シ。而シテ其ノ外門ハ日本式ノ韓兵之ヲ守リ、最外ノ諸門ハ支那式ノ韓兵之ヲ守ル。亦タ宮園其他ノ要所ニモ日支兩式ノ韓兵皆之ヲ守テ殘ル所ナシ。其勢大凡二千名計リナリ

六日午前第十時頃富永單吏ヲ遣シ糧食辨ニ豫備彈藥若干ヲ王宮ニ運バシム、聞ク昨夜支那兵二百名計リ南陽地方ヨリ京城ニ入リ、京城屯在ノ兵ト合スト、然ルニ午後第三時頃突然支那兵宮闕ニ向テ發放シ、彈王室及ビ我公使ノ居室ニ及ブ。故ニ我兵ヲシテ要地ニ配布シ、以テ景況ヲ窺フ内、忽チ我第一小隊ヲ支那兵襲撃ス。我兵撃テ之退カズ。續テ第四小隊ニ向フ、立處ニ彼拾餘名ヲ斃ス。此時第二小隊持口ニモ戰ヲ始メ、三方ノ砲撃天地ヲ動カス。初メ戰ノ起ルヤ王潛カニ出デ官園ニ避ク、故ニ余第三小隊ノ半小隊ヲ卒ヒ、公使ト共ニ之ヲ守ル。時ニ韓兵皆支那兵ヲ防グニ非ラズシテ却テ王辨ニ我兵ヲ火撃ス（初王宮闕ニ歸ルヤ、支那兵一小隊計リ東門ニ來リ門外ニ在テ之ヲ守ル。門内ニハ韓兵二百名計リ之ヲ守ル。只一路ヲ離ツノミ。支那兵此門ヨリ入ル支那式ノ韓兵先ヅ之レニ與シ漸次全兵ニ及ブモノヽ如シ）故ニ交戰最モ烈シ、我兵彼レヲ斃ス無數、而シテ第四小隊ヲシテ宮闕ヲ防ガシメ、他ノ諸小隊ヲシテ漸々王座ニ寄ラシメ、地物ヲ利用シテ敵ノ側面ヲ撃タシム。敵屢退軍ノ喇叭ヲ奏スト雖ドモ、我兵其退路ヲ猛烈ニ射撃スルヲ以テ退ク能ハズ、日沒スルニ及ビ彼レ放火ヲ止メ窃カニ退ク。此時ニ至リ國王我公使ト談アッテ終リニ我護衛ヲ辭セラレ、後門ヨリ出ラル。爰ニ於テ公使ノ令ニ從ヒ各小隊ヲ纏メ、各兵ヲシテ豫備彈藥ヲ荷ハシメ、第一小隊ヲ先鋒トシ公使ヲ隊ノ中央ニ置キ、第四小隊ヲ後衛トシ、以テ王宮ヲ出デ、我公使館ニ歸ル此日戰死二名（曹長飯島碩太郎、兵卒藤代市十郎）負傷者八名（中尉面高俊一、上等兵菊地留三郎、兵卒小野寺直理、同千葉泰治、突戸儀平、同相澤勇吉、同菅原長平、同磯上百太郎）時ニ第七時三十分ナリ。途中土人所々ニ於テ小石ヲ投ズト雖ドモ皆之ヲ拂テ過グ。此夜公使館ノ護衛ヲ嚴ナラシメ、周圍ノ壁ニ踏朶ヲ設ケ以テ之ヲ守ル。同夜我泥峴ノ本部ニ當リ火ノ出ヲ見ル、同七日午前第八時泥峴本部ニ向テ斥候ヲ出ス（田崎軍曹ニ兵卒七名ヲ附ス）韓支兩兵所々ヲ守リ、部兵ハ拔刀シテ我ニ向ヒ、人民ハ群集シ或ハ屋上ヨリ小石ヲ投ズ、我隊火撃ヲ禁ズルヲ以テ目的ヲ達スル能ハズシテ歸ル。

此時ヨリ我公使館ニ烈シク小石ヲ投ズ。第十二時頃ニ至リ韓兵初メテ公使館ニ向テ放火ス。我兵之レニ應ジ立處ニ數名ヲ斃ス。彼レ狽狼シテ退ク、時ニ本館ノ糧米既ニ盡キ、亦タ確信スル細索ニ依レバ、泥峴本部ニアル糧米其他一切ノ物品ヲ韓人悉ク之ヲ奪フ（支那賊モ其中ニ交リ居リシト云フ）已ニ斯クノ如クニシテ最早糧米支フルニ道ナシ（公使亦タ他ニ故アルト云フ）

宮園ハ王宮ヲ距ル五百凡米突

十大王宮ノ戰

ヒ敵ノ死

傷四十餘名

負傷者ノ内訳

高中尉及兵卒

磯上百太郎

外六名重キ

郎ヲ除キ

一傷ニ付十日出ル

航船ヲ以テ長崎ニ送ル

終リニ韓都ヲ引揚ノ命アリ、依テ午後第二時三十分安藤少尉ヲ先鋒トシ、大西少尉之ニ次グ、而シテ公使己下本官ノ屬官及ビ京城寄留ノ本邦人民（婦女子合セテ百餘人）ヲ隊ノ中央ニ置キ職工ヲシテ負傷者並ニ彈藥等ノ運搬ニ任ズ。面高小谷ノ兩中尉ヲシテ後備タラシメ、西大門ニ向テ出發ス。途中韓兵ハ手銃、部士ハ刀ヲ揮カシ、人民ハ小石ヲ以テ前後左右ヨリ我隊ニ迫ル皆擊テ之レヲ走ラス。就中韓ノ在衞營ノ近傍ヲ過ルヤ、韓兵營前ニ整列シ大砲ヲ放ツ、四圍亦タ小銃放火ヲ以テ我隊ノ側面ヲ擊ツ、幸ニシテ我隊負傷ナシ。皆其彈道我頭上ニ四間ノ處ヲ飛行スルガ故ナリ。我後隊大路ニ伏臥シ、或ハ小溝ニ入リ、狙擊最モ力ム。終リニ之ヲ營內ニ擊退ス。亦タ西大門ハ鎖シテ韓兵部士之ヲ守ル。我先隊鎗突喊シテ之レヲ走ラセ、兼テ用意ノ斧ヲ以テ貫ヲ切斷シ、破ツテ西大門ヲ出デ、行々追兵ヲ擊テ漢江ノ渡ニ至リ、後隊ヲシテ要地ヲ守ラセ、該江ヲ渡ル。果シテ韓兵數名亦士人ニシテ携銃セシモノ數十名、尾擊シテ爰ニ至リ、我渡船ヲ狙擊ス。我後隊擊テ數名ヲ斃ス。終リニ遠ク之ヲ擊退シ、午後第五時三十分全ク漢江ヲ渡ル、此ニ至リテ我行進ヲ妨害スル者ナク、順路ヲ經テ八日前七時濟物浦ノ我領事館ニ安着ス

一昨十八日進艦日野砲二門ノ井上陸ハ悉ク海兵本艦ヘ引揚グ

日進艦海兵ヲ上陸セシメ領事館ヲ守ル。我隊午後總テ海兵ニ代リ、韓都ニ向テ高地數山ヲ占メ、塹壕ヲ各所ニ築キ亦日進艦ノ野砲二門ヲ要地ヘ備ヘ、守備ヲ嚴ニス。初メ公使館ヲ出テ漢江ニ至ル途上、敵ヲ斃ス無數、目前見ル所既ニ三十名計リ我隊幸三名ノ負傷ナシ、敵手銃力銳ヲ得ル無數皆之ヲ破棄ス、爰ニ西大門內大家ノ屋上ヨリ半弓ヲ放ツ、數箭一失富永軍吏ノ胸部ニ立ツ、幸ニ距離大ナルヲ以テ唯外套ヲ貫クノミニシテ負傷ニ至ラズ。

四月事變起ルヤ英米兩公使我公使館ヘ我兵ノ護衞ヲ請フ、本館其需メニ應ズ。仍テ英ニ二名米ニ四名ノ兵卒ヲ送リテ諸館ヲ護衞セシム（九日英米兩館ヨリ護衞ヲ附シ本隊ニ歸ス）

四月公使館ヘ出張ノ際泥峴屯營取締トシテ銃工國友直治縫工山本兼吉從者松岡幸喜知雇夫北角駒吉治山卯三郎協同商會雇古野辰三ノ六名ヲ殘ス。後チ探偵スルニ皆暴民ノ爲メニ殺害セラルト云フ。細索ノ言ニ曰ク、七日夜敵我公使館ヲ燒キ泥峴屯營ニ貯蓄スル諸物品ハ彼レ悉ク盜奪シ去ル、兵舍ハ韓ノ官舍ナルガ故ニ之ヲ燒カズト云フ。

磯林大尉以下二名ノ死骸其慘酷ナル實ニ筆紙ニ盡シ難シ埋葬ハ都合ニヨリ明二十一日午後第一時ニ延バス

磯林大尉赤羽語學生兼テ江原地方ヘ旅行中ノ處、過ル十日頃泉川近傍ニ於テ暴民ノ爲メニ殺害セラレ、今廿日朝鮮政府ヨリ磯林赤羽外一名ノ死屍ヲ我公使館ニ送致ス。依テ今午後五時濟物浦堀本中尉墓碑ノ傍ラニ埋葬ノ爲メ護衞隊ヨリ一小隊ノ兵ヲ出シ會葬セシムル筈、公使ノ護衞ハ嚴重ニ警備シ居レリ。

明治十七年十二月廿日

在朝鮮警備隊長村上步兵大尉報告

步兵大尉　村上正積

朝鮮政府ヨリ人民ヘノ告諭

明治十七年十二月十九日附ヲ以テ海門艦長海軍中佐兒玉利回ヨリ川村海軍卿宛ニ今回ノ事變ニ付朝鮮政府ヨリ一般人民ヘノ告諭書ヲ參考ノ爲メ送致シ來レリ。

行府使爲出示曉諭事　議政府今月二十五日關文內闕今番亂變以後遠外民情不知裏許易致騷訛恐有滋事之慮玆以具別事狀曉諭民人關到日卽刻眞禧飜謄揭付港口及街市店舍大路邊更送吏鄕民素信孚之人這々曉諭俾無一夫、不知之弊宣當者今月十八日之變遠外知裏許易致煽訛而究其本事則賊臣玉均等糾聚逆黨潛懷凶圖劫遷

乘輿屠殺卿宰假托護衞矯召日兵日館公使爲其所欺率兵入闕出於赴難之誼而凶賊所使行刄者卽渠之徒黨非日兵之手把也中國諸將領軍入衞擒捕凶徒之際日兵亦潰散而歸退住仁港都家已派送大官開釋安頓事實不過如此而已塗聽說憎虛做謊使人心憤激民情咈戾大非兩國交好定約之意也大抵開港通商定界設館兩國相與之際設有所失曲直自在公法可徵若或彼我相激歸於獲非之科則豈兩國和好之本意哉然閭巷之民浦市之商與日人情志不相孚者亦或棄時逞感不無其慮玆以具別事狀明悉曉諭若有害傷日人毀破日館者則是亂法之民而樂禍之徒也地方官不待更飭卽其時一々境上梟示以警民衆事等因玆以謄關出示凡我大小民咸遵朝令安以安堵毋或騷訛而與海關日人依前交接賣買如常萬一有一毫傷害日人則斷當捉施重律先斬啓其各懍遵切々特示

右通知元山各社大小民海關各人

甲申十一月初一日

松村海軍少將電報其他

在馬關松村海軍少將ヨリ十二月三十日午後十一時三十分發ノ電報ニ曰ク、去ル二十七日日進艦仁川港ヨリ南陽府視察トシテ回艦セシ處、支那軍艦二隻碇泊、日進艦ヲ見テ軍備穩ナラザルニ付、日進艦ハ直チニ仁川港ヘ回艦、又去ル二十二日吳淸慶丁汝昌ハ支那ヨリ朝鮮ヘ到着セリ揚華津ハ支那船朝鮮ニテ砲臺ヲ設ケ警備セリ。又竹添公使ハ去ル廿八日京城ヘ發向セリト、石田陸軍中尉千歲丸ニテ去ル廿八日仁川港發出唯今到着ノ旨同人ヨリ聞ク。

在仁川竹添公使ヨリ十二月二十五日電報ニ曰ク、朝鮮濟物浦在留ノ英國總領事ヨリ拙者ニ左ノ義ヲ依賴シタリ。卽チ若シモ釜山或ヒハ元山津ニ於テ暴擧ノ事起リタル節ハ、其港ニ滯在スル日本軍艦ニ依リテ英國人民ノ利益ヲ保護セラレンコトヲ依賴セリ。拙者ハ此ノ趣ヲ艦長ニ通知シ置キ、成ルベク其ノ事ニ從ハンコトヲ通知セリ。然シナガラ尙ホ貴官ヨリ海軍卿ニ御照會相成各艦長ニ同卿ヨリ命令ヲ下サレ候樣致シタシ。

朝鮮事件

（十二月二十三日同二十四日刊行
横濱レコー・デシャツパン抄譯）

今日ニ至ルマデ朝鮮事變ニ付キ同國ヨリ得タル報道ハ未ダ完全ナラズト雖ドモ、京城騒亂ノ原因ハ日清兩國人ノ數年以來ノ軋轢ニ在ルコトハ吾人ノ疑ヲ容レザル所ナリ。然ラバ則チ十二月四日及五日ノ暴動ニ付キテハ朝鮮政府其ノ責ニ任ズルノ義務アルベシ。何ントナレバ右ノ暴動ハ該政府ノ預メ知リテ防止スルコト能ハザリシヲ以テナリ。蓋シ京城ハ二年以來日清兩國ノ占領シテ各々勢力ヲ有シ、互ニ威權ヲ爭フ所タリシナリ。

抑々清國人及支那黨ノ王宮並ニ日本公使館ヲ襲撃セシコトニ、全ク日本人ノ巧妙ナル術策ニ返報セシモノナルコトハ實ニ明白ナリトス。蓋シ日本國ハ曩ニ四十萬圓ノ塡補金ヲ返還シテ、朝鮮政府ノ歡心ヲ求メ、大イニ清國ノ勢力ヲ減殺セントシタリ。然リ而シテ爰ニ世人ノ未ダ知ラザル所ニシテ余輩ノ確知セル處ニ臻レバ、恐ラクニ竹添公使ノ不注意今回ノ事變ヲ速ニセシモノナルガ如シ。

曩ニ竹添公使ハ日本　天皇陛下ヨリ千八百八十二年ノ暴動ニ依ル塡補金四十萬圓ヲ返還セラルヽ旨ヲ朝鮮政府ニ照會スルヤ、直チニ該政府ニ求ムルニ兩國ノ交誼ヲシテ一層親密ニ臻ラシメンコトヲ以テセリ。

又去ル十一月三日在京城日本公使館ニ於テハ盛宴ヲ張リテ天長節ヲ祝シ、朝鮮政府ノ諸大臣及各國ノ公使領事ヲ招待シ、清國領事モ亦此ノ宴ニ涖メリ。饗餐將ニ終ラントスルニ方リ、竹添公使ハ朝鮮政府顯官某氏ノ祝詞ニ答ヘテ一場ノ演說ヲ爲セリ。當時同公使ハ最重大ナル政略上ノ問題ニ入リ、日本國ハ朝鮮國ヲ開明進歩ノ途ニ誘導スルモノナリト雖モ、清國ハ未ダ野蠻無力ノ邦域ニシテ、唯朝鮮國ヲ愚昧ナラシムルノミナルガ故ニ、朝鮮政府ハ日清ノ兩國中其ノ一ニ倚ル事ニ就テハ敢テ躊躇スル所ナカルベシ、ト論及スルニ至レリ。此ノ說タルヤ實ニ清國適切ナリト雖ドモ、清國領事ノ之ヲ聞クニ及ビテ大ニ不快ヲ感ジ、爲ニ竹添公使ヲ嫌忌スルニ至リシヤ明カナリ。

此ノ外竹添公使ハ屢々朴泳孝及金玉均ニ向ヒテ、日本政府ハ常ニ全力ヲ以テ朝鮮政府ヲ援助セント欲シ、且ツ金額ヲモ貸與セント欲スルコトヲ明言セリ。

余輩ハ敢テ竹添公使ヲ責メズ、何トナレバ近日ヲ以テ將ニ日清兩國ノ葛藤ヲ解クノ幸榮ヲ見ルニ至ルベケレバナリ。然レドモ同公使ノ注意ヲ怠リタル一事ニ至リテハ余輩ハ之ヲ認メザル

事能ハズ。若シ竹添公使ニシテ曩ニ一層ノ注意ヲ用ヒナバ、或ヒハ今回ノ事變ヲ生ズルニ至ラザリシナラン歟。今日ニ至リテハ事既ニ去レリ、唯速カニ之ヲ修理スルノ一方アルノミ。日本政府ハ今回ノ事變ニ處シテ其ノ名譽ヲ保全スベキヤ、余輩ノ毫モ疑ハザル所ナリ。而シテ今回ノ事變タルヤ、亦實ニ清國人ノ動搖ヨリ生ゼシモノナレバ、余輩ハ日本政府ノ朝鮮政府ニノミ其ノ責ヲ歸セズ、亦清國政府ニ對シテ將來ノ安全ヲ保スルノ道ヲ求メラレンコトヲ希望スルナリ。

朝鮮事件ニ於テ

（十二月二十四日刊行横濱ヘラルト）

朝鮮事件ニ關スル風説ノ既ニ吾人ノ耳朶ニ上ルモノ尠カラズト雖、概ネ日本人ノ報道ニ係リ未ダ彼ノ一方卽支那ヨリ聽ク所ナカリシガ、本日讒カニ上海ノ新聞ニ接シタリ。卽之ヲ按檢スルニ大ニ日本ノ風説ト相異ナルモノアリ（吾人ノ豫想ノ如ク）而シテ該記者ハ局外者ニシテ、固ヨリ利害相關スルモノニアラズ、故ニ其ノ言蓋シ信ヲ措クニ足ルアラン。其ノ北支那日々新聞ニ據レバ、日本人ハ支那兵ノ王宮ニ入ルコトヲ拒ミ、且地雷火ヲ發シテ以テ其兵十二名ヲ殺シタリト云ヒ、又「クーリア」新聞ハ更ラニ一歩ヲ進メ且曰ク、既ニシテ全局騷然日本兵及亂民ハ直チニ王宮ヲ奄有シタリ。蓋シ此擧ノ首謀ハ日本公使ノ朝鮮ニ勢力ヲ張ランガ爲メ、其右手トシテ使フ所ニシテ、曾テ日本ニ於ケル朝鮮使節タリシ某ハ事成ルノ後首相トナリ、其ノ他日本ニ黨スルモノハ各要路ニ推致セラレンコトヲ期セリト云フ。然ルモ此報ハ仁川ヨリ傳フル所ニシテ、記者自ラ其ノ官報ニアラザル旨ヲ陳ベ、其ノ説ノ果シテ正ナルヲ保セズ「メルクリ

「」新聞モ亦騒亂ノ原因ヲ以テ日本人ニ歸シ、且ツ曰ク、同夜日本公使及ビ其ノ兵無慮百八十人進ンデ王宮ヲ取リ、金玉均（曾テ東京在留朝鮮公使）ハ首相トナリ其他ノ日本黨ノモノハ各位ヲ占メタリ。其ノ翌日仁川港ニ停泊セシ日本軍艦日新艦ヨリ援兵八十人ヲ京城ニ致セリ云々尋イデ其ノ砲火ヲ開キタルハ實ニ日本ノ兵ナル旨ヲ記述セリ。

此ノ如ク日新艦ヨリ五十若クハ八十人ノ援兵ヲ發遣シタルコトハ日々新聞及ビ「メルクリー」新聞モ亦共ニ報道スル所ニシテ、是ニ由リテ見レバ日本人ハ早ク既ニ事ノ紛雜ニ及バンコトヲ知リタルヲ徴スルニ足ルベシ。之ヲ要スルニ上海ヨリ傳フル所ハ皆ナ官報ニアラズ、而シテ日本ノ傳フル所ハ總テ之ヲ公ニスルノ前豫メ官府ノ檢閲ヲ經ル者ニシテ、其ノ官府ノ不利ナリト思惟スル所ノ者ハ得テ之ヲ聞クベカラズ、故ニ吾人ハ憑リテ以テ公平ノ評ヲ下シ難シ。然リト雖ドモ既ニ吾人ニ達シタル事實ニ依リテ之ヲ案ズルニ、竹添氏ハ自ラ許シテ日本黨ノ機關トナリタルガ如シ。蓋シ其ノ擧ノ是非如何ヲ知リテ此ニ及ベルヤ否ヤハ固ヨリ之ヲ斷言スベカラズ惟フニ氏ハ豫メ其ノ事ノ及ブ所如何ヲ知ラザリシハ實ニ疑ヲ容レザル所ナリト雖モ、尚ホ吾人ハ氏ノ罪ヲ釋クコトヲ得ズ、又害ニ遭フタル大臣ノ黨員ガ其ノ之ヲ害シタル判徒ノ日本兵ノ保護ニ依リ新タニ政府ヲ組織スルヲ見テ以テ之ヲ排却センコトヲ勉メタルハ吾人ノ敢テ怪マザル所ナリ。

朝鮮事件（十二月二十四日刊行横濱ガゼット）

北支那日々新聞ハ朝鮮事件ノ原因ニ就キ種々ノ臆說ヲナセリト雖モ、吾人ノ曾テ聞知スル所ニヨリ虛心平意ヲ以テ之ガ評ヲ下サンニ、日本ハ罪ナシト謂ザル可カラズ。日本公使竹添氏ノ國王ヲシテ其ノ亂ヲ公使館ニ避ケシメズ、自ラ進ミテ王宮ニ入リ之ヲ擁護セント欲シタルハ失錯タルヲ免レズト雖、此ノ一事ヲ除クノ外日本ノナセシ所ハ全ク其ノ自家ヲ防グガ爲メニシテ已ムヲ得ザルニ出デタルガ如シ。

井上全權大使御委任狀案

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本皇帝此書ヲ見ル者ニ宣示ス

朕カ命ヲ奉シ朝鮮國ニ駐留スル辨理公使ヲ本年十二月初旬朝鮮京城ニ於テ襲擊シ火ヲ放チ使署及該兵營ヲ燒キ且ツ朕カ國民ノ彼地ニ在ル者數十名ヲ殺害セリ此事タル我國ニ對シ和好ヲ壞ル者ナレハ朕ハ朝鮮國ニ向テ問フ所アラントス故ニ玆ニ朕カ最モ信任重用スル所ノ參議兼外務卿伯爵井上馨ヲ擧ケテ特派全權大使ニ任シ朝鮮國ニ派往シ朝鮮國大王殿下ニ謁シ又ハ其委任スル所ノ全權大臣ニ會同シ右事件ニ關スル一切ノ事宜ヲ辨理シ條約ヲ約定シ又ハ約書ヲ締成シ其ノ議決シタル書面ニ調印スル等便宜行事ノ全權ヲ委任セリ故ニ這般ノ事ハ朕カ親ラ其地ニ臨ミ之ヲ處スルト異ナルナキヲ證ス。

神武天皇紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ記シ國璽ヲ鈐ス

御諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

保有天佑踐萬世一系帝祚之大日本國皇帝宣示見此書者

於本年十二月初旬在朝鮮將所奉朕命駐留該國之辨理公使襲擊放火燒使及該兵營且將朕之國民在彼地者數十名殺害候此事係對我國壞和好者朕將向朝鮮國有所問焉故玆擧朕所最信任重用之參議兼外務卿伯爵井上馨任特派全權大使派往謁朝鮮國大王殿下又會同其所委任之全權大臣辨理關該事件一切事宜乃委任以約定條約締成約書於其所議決之書面鈐蓋印信等便宜行事之全權也故於此事與朕親臨其地處之無異此爲憑據

神武天皇卽位紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日於東京宮城親記名鈐國璽

御諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

御委任狀案

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本國皇帝此書ヲ見ル者ニ宣示ス

本年十二月朝鮮國ニ於テ日清兩兵勇相鬪スルノ一事ハ偶爾之生ニ屬スト雖ドモ關スル所重大ナリトス故ニ朕ハ此事ノ兩國ノ和局ヲ壞ルニ至ランコトヲ慮リ其平和ヲ保全スル爲特ニ朕カ最モ信任重用スル所ノ參議兼外務卿伯爵井上馨ヲ擧テ全權大使ニ任ジ委スルニ便宜行事ノ全權ヲ以テシ朝鮮國ニ派往シ此事ヲ辨理セシメ且ツ將來朝鮮國ニ在テ兩國ノ友誼ヲ傷クベキ事端ヲ防止スル爲メニ清國政府ヨリ特派セラレタル便宜行事ノ全權ヲ有スル大臣ト其辨法ヲ議決シ條約ヲ約定シ又ハ約書ヲ締成シ其議決シタル書面ニ調印スルノ全權ヲ委任ス依テ這般ノ事ハ朕カ其地ニ臨ミ親テ之ヲ處セルト異ナルナキヲ證ス

神武天皇紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日東京宮城ニ於テ親ラ名ヲ記シ國璽ヲ鈐ス

御諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

保有天佑踐萬世一系帝祚之大日本國皇帝宣示見此書者

本年十二月日清兩國兵勇在朝鮮國相鬪一事雖屬偶爾之生所關重大朕慮此事或至壞兩國和局爲保全其平和特擧朕所最信任重用之參議兼外務卿伯爵井上馨任全權大使委以便宜行事之全權派往朝鮮國辨理此事且爲防止將來在朝有傷兩國友誼事端並委任以與清國政府所特派而有便宜行事全權之大臣議定其辨法訂定條約或締成約書而蓋印於其書面一切全權也故於此事與朕親臨處之無異此爲憑據

神武天皇卽位紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日於東京宮城親記名鈐國璽

御　諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

大使携帶御國書案

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祥ヲ踐ミタル
大日本國大皇帝敬テ朕カ良友ナル
大朝鮮國大王ニ白ス今般貴國京城ニ於テ不幸ナル生事アリ朕深ク兩國ノ睦誼ヲ全フセンコトヲ欲シ玆ニ朕カ最モ信任貴重スル參議兼外務卿伯爵井上馨ヲ特派全權大使ニ任シ委スルニ便宜行事ノ全權ヲ以テシ貴國ニ派往セシム井上馨ノ忠實明敏ニシテ能ク其任ニ堪ユルハ朕ノ確信スル所ナリ依テ同人ヨリ大王ニ對シ稟白スル所ノ者ハ朕カ言フ所ト異ナラス望クハ
大王若ク其言ヲ信認シ之ヲ寵待榮遇セラレンコトヲ玆ニ
大王ノ多福ヲ祈ル
神武天皇卽位紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日於東京宮城親ラ名ヲ記シ國璽ヲ鈐ス

御　諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

保有天佑踐萬世一系帝祥之
大日本國大皇帝敬白於朕良友之
大朝鮮國大王今番在於貴國京城生事有不幸之事朕深欲全兩國睦誼茲以朕所最信任貴重之參議兼
外務卿伯爵井上馨任特派全權大使委以便宜行事全權派往貴國也井上馨忠實明敏能堪其任朕所確
信是以該使所對
大王稟白者與朕所言無異望
大王善信認其言賜寵待槃遇焉茲折
大王多福
神武天皇卽位紀元二千五百四十四年明治十七年十二月二十一日於東京宮城親記名鈐國璽

御　諱

奉勅　太政大臣公爵　三條實美

伊藤參議三條公ノ電報

馬關　井上

東京　伊藤

十二月二十六日午後

足下ノ回答ヲ得テ内閣ノ會議ヲ開キ反覆討論ヲ盡シ下條ノ如ク決定セリ。

我廟議ニ於テハ今回ノ事變ヲ收局スルヨリ連及シテ支那ト兵釁ヲ啓クノ極ニ墜ルヲ力メテ避ケント欲ス。現ニ足下使命ヲ奉ジテ中道ニ在リ、今ニ至テ前議ヲ貫クノ外ナシ。又朝鮮亂後ノ形勢護衛ヲ携帶セザレバ或ヒハ危險ナルノ恐レアリ、故ニ二大隊ヲ從屬セシムベシ。

朝鮮ノ獨立不獨立ト看認ムルノ兩途ヲ決シ、其結果ヨリ終リニ支那ト鋒ヲ交スルニ至ルヤ否ヤノ終局ハ卽今ノ評議ニ於テ豫決スルコトヲ得ズ。

足下ヨリ伊藤ヘノ電信ヲ接收シ、朝鮮ノ獨立不獨立ニ付内閣ノ會議ヲ開キ、再應ノ細議ヲ盡セリ。從來ノ關係ニヨリ我ニ在テハ獨立ヲ認メザルヲ得ズ。故ニ足下起程ニ際シ附與シタル訓令ニ基キ、支那使節トノ談判ハ善後ノ手段ヲ盡シ、雙方共ヲ引拂フコトヲ談ジ、彼レ屬國ノ理由ヲ主張シ之ヲ肯ゼザルニ於テハ、我ハ其ノ論旨ヲ容レズシテ雙方兵ヲ駐ムルノ結局ニ至ルノ外ナシ。此他ノ問題ニ至テハ豫メ測知ル可カラザルノ情アルヲ以テ、實地ニ就キ臨機ノ處分ハ之ヲ足下ニ委任スベシ。

三條太政大臣

井上全權大使復命書要提

客歳十二月朝鮮國京城ニ於テ變亂驟カニ起リタル趣、同國駐在辨理公使竹添進一郎ヨリノ電報日月十三日初メテ政府ニ達シ、越テ數日同公使ガ遣ハス所ノ外務一等屬木下眞弘同公使ノ公文ヲ賚ラシ至リ、並ニ其事狀ヲ面稟シ、顚末頗ル明晰ナルヲ得、廣議遂ニ使ヲ該國ニ派シテ之ヲ辨理スルニ決シ、乃チ臣ヲ以テ特派全權大使ト爲シ、便宜事ヲ行フベキヲ命ゼラル。臣不肖ト雖モ綸命ノ重キ且ツ臣ガ職掌ノ在ル所ナレバ謹ンデ其命ヲ奉ゼリ。

先是我國在留清國公使黎庶昌ヨリ此事變ニ關シ清ヨリ大員ヲ派スルニ付、我國ヨリモ大員ヲ派シ該國ニ在テ高辨センコトヲ請求セリ。因テ我國ヨリハ全權ヲ委任シタル大員ヲ派遣スルニ付清國ヨリモ同樣ノ權ヲ有スル使節ヲ派出スベキ趣ヲ照復セリ。其後清國政府ニ於テハ使臣ニ護衞兵ヲ付帶セシメザル旨在清國全權公使榎本武揚ヨリ電報アリタルヲ以テ、臣モ護衞兵ヲ帶ビズ僅カニ僚屬權大書記官近藤眞鋤權大書記官齋藤修一郎以下數名、並ニ陸軍中將高島鞆之助海軍大輔樺山資紀及ビ其僚屬數名ヲ以テ同月二十二日東京ヲ發シテ横濱ニ至リ、卽日汽船薩摩丸號ニ坐シテ駛開シ、同二十四日下ノ關ニ抵ル。逼ニ外務大輔吉田清成ヨリ在清國天津領事原敬ノ電報ヲ轉傳スルヲ接ス、曰ク清使臣吳大徵ハ兵五百ヲ率キテ朝鮮ニ赴クト。清政府既ニ前說ヲ變ジテ其使臣ニ護衞兵ヲ付シ、又外務書記官栗野愼一郎ガ朝鮮ヨリ歸リ稟稱スル處ニヨレバ清國ノ威力十分ニ朝鮮政府ヲ左右スルノ情況ニシテ、參事院議官井上毅ニ命ジ朝鮮政府ヨリ竹添公使ヘ送リタル詰問書ニ類シタル文牘ヲ同政府ヲシテ回收セシムルノ事未ダ遂ゲ能ハザルノミナラズ、京城ノ人心猶ホ靜謐ニ至ラズ、等ノ事情ニヨリ、二大隊ノ兵ヲ以テ護衞トシテ帶往センコトヲ電請シ、往復數回ニ至テ之ヲ許可セラレ、又太政大臣三條實美ヨリ電信ヲ以テ朝鮮ヲバ從前廟議ノ通リ獨立國ヲ以テ之ヲ待ツノ廟謨ナルヲ傳フ。臣謹ンデ之ヲ領シ、護衞兵ノ至ルヲ待チ、同二十八日下ノ關ヲ發シ、同三十日朝鮮國仁川港ニ達シ、我領事署ニ入ル。此時竹添公使ハ朝鮮政府ノ大臣等ト面タリ談判スベキ爲メ井上議官ト俱ニ隨員數名及ビ護衞兵一小隊ヲ率キテ已ニ二十八日於テ京城ニ赴キ、城外ニ就テ假リニ公館ヲ定メ、談判ニ及ベル趣ヲ聞知シ、更ニ其現況ヲ悉サンコトヲ欲シ、直ニ書ヲ馳セテ同議官ヲ召シ、翌三十一日午後仁川ニ來ル。其面述スル所ニ據テ考フレバ、朝鮮政府ハ故ラニ臆測ノ說ヲ逞フシ、亂黨ノ勢ヲ挾ミタルハ同公使ノ兵ナリト羅織シ、國王ヨリ倚賴ノ璽書ヲ以テ亂黨ノ强迫偸押ニ出タル者ト爲シ、幾分ノ罪ヲ竹添公使ニ負ハシメ、而シテ彼我對等ノ論辯ヲ以テ開談セント欲スル者ニ似タリ。

若シ仍ホ同公使ガ往復セル文牘ヲ基礎トシテ開談ニ及ババ徒ラニ紛議ニ渉リ妥結ノ期ヲ知ル可カラズト思考シ、同議官ヲシテ其翌卽本年一月一日拂曉直チニ京城ニ歸ヘシ、同公使ニ朝鮮政府ト議論ノ往復ヲ停メ、一々臣ガ京城ニ入ルヲ待タシメ、又近藤書記官ヲシテ同議官ト共ニ京城ニ至リ、京畿監營ヲ以テ臣ガ旅館ト爲サンコトヲ該政府ニ請求セシメ、臣ハ其報ヲ待テ仁川ヲ發セント擬ス。翌日卽本月二日薄晩同議官俄カニ京城ヨリ來リ曰ク、本日午前竹添公使ヨリ警部巡査各一名ヲ派シ、我舊公館焚毀ノ狀況ヲ驗視セシメントセシニ、敦義門ニ至リテ清國兵其行ヲ阻攔シ、漸ク集テ十五六名ニ至リ、各銃ヲ以テ之ニ擬シ、其內發銃スル者一回、又銃創ヲ以テ衝撞スルモノ數回、然ドモ幸ニ其身ニ中ラズ、該警部等勢如此ナルヲ以テ門ニ入ルコト能ハズ、已ムヲ得ズシテ館ニ回リ其由ヲ報ゼリ。於是同館ノ護衞兵隊從來抑忍セシ憤懣ノ氣一時ニ發作シ、同公使ニ迫リ直チニ該門ニ至リ之ヲ擊タンコトヲ請フテ已マズ、同公使同議官ト切ニ之ニ諭スニ大使方ニ仁川ニ在リ、進退大使ノ命ヲ俟テ妄動スベカラザルヲ以テシ、僅カニ之ヲ抑止セリ。然レドモ其憤激甚ク等閑ニ付シ難キヲ以テ、其由ヲ先ケン爲メ自ラ來レリト、又曰昨日近藤書記官京ニ入ルノ途中、麻浦ニ於テ韓兵之ヲ阻シ、若シ京ニ入ラント欲セバ京城ニ報知シ命令アルヲ俟ツベシト云ヘリ。然レドモ同書記官ハ之ヲ說破シテ前往セリ、是等ノ亡狀却テ大使ノ指揮ヲ乞ハザルベカラズト、臣之ヲ聞キ卽時飛翰ヲ同公使ニ傳ヘ、兵士ヲ戒シメテ私憤ニ乘ジ忘動スル無カラシメ、一面ニハ淸兵ノ無禮ヲ以テ痛ク淸官ヲ責メシメ、又麻浦ノ事ヲ以テ朝鮮政府ニ照會セシメテ曰ク、若シ大使ノ入京ニ方テ沿途或ヒハ諸門ニ於テ阻攔等ノ失敬アラバ、大使ハ當サニ臨機不得已ノ處分ニ出ヅベシメント。

此夜近藤書記官ヨリ旅館ノ準南粗整フヨシ報ジ來ル、卽其翌三日午前ヲ以テ護衞兵ノ全隊ヲ率キテ仁川ヲ發シ、同日午後八時京畿監營ノ旅館ニ達シ、直ニ竹添公使ヨリ其由ヲ該政府ニ通ゼシム。同四日午前十時統理衙門督辨趙秉鎬臣ヲ訪問シ、臣ガ入京過急ナルニ由リ旅館ノ設ケ整備ナラザルヲ謝ス。臣告グルニ如此火速ニ來ルモノハ此次ノ事件兩國交誼存滅ノ係ル所ナレバ我、

聖上ニモ深ク宸襟ヲ惱マサル、余ガ職掌ノ繁劇ナルニモ拘ラズ辨理ノ任ニ當ラシム、因テ一日モ猶豫セズ進京セシ旨ヲ以テシ、且速カニ國王ニ謁見センコトヲ望メリ。秉鎬問フ我政府ト竹添公使ト往復セシ公文ヲ貴大使ハ一見セシヤト、臣之ニ答ヘテ曰ク、然リ抑モ同公使ト貴政府ト往復セシ公文ハ余ノ談判ノ基礎ト爲スベキモノニ非ズ、何ントナレバ貴政府ハ專ラ想像ト疑惑ヲ以ラ事實ヲ構造シタルモノナレバ、政府ト政府トノ間ニ於テ往復スベキ性質ノモノニ非ズト說破セリ。隨テ竹添公使ヲシテ臣ガ謁見ノ事ヲ以テ彼政府ニ商議セシメシニ、來ル六月午後一時謁見アルベシト通知アリ。

同五日午前伴接官來リ近藤書記官ニ面シ辭ヲ設ケテ隱カニ竹添公使ガ臣ト俱ニ謁見スルヲ難ズルノ意アリ。同曉趙秉鎬、穆麟德（穆ハ卽獨逸ノ人モルレンドルフ也、朝鮮政府ニ雇用セラレ現ニ統理衙門協辨交渉通事宜ノ官ニ任ス）ノ兩人齋藤書記官ヲ訪ヒ、隨員衞兵ヲ減ゼンコトヲ乞ヘリ。因テ大使謁見ノコトヲ商議スルハ都テ公使職分ニ屬スルモノナレバ、竹添公使ト之ヲ商量スベシト答ヘタルヲ以テ、兩人ハ直ニ公使館ニ赴キ同公使ト前事ヲ商議シ、更ニ又外務三等屬淺山顯藏ヲ以テ變亂ノ時賊ニ通同シタリト稱シ、以テ大使謁見ノ時通辯官ニ充テザルヲ內願セリ。同公使ハ此事能ク自ラ決スル所ニアラズ、臣ガ處ニ於テ議スベシト云ヒ相伴フテ旅館ニ來ル。臣ハ近藤書記官ニ命ジテ余ガ使用スル所ノ隨員ハ余ガ自ラ撰ムニ任カス、固ヨリ他人ノ喙ヲ容ルヽヲ用ヒズ、若シ淺山賊ニ通ズル實アラバ其證據ヲ示セ、直ニ罰スル所アルベシ。證據ナクンバ是疑惑ヲ以テ人ヲ誣ルモノナリ。余ガ使用スル通辯官ヲ拒マバ亦タ余ガ謁見ヲモ拒ムニ至ラン。果シテ然ラバ余ハ謁見ヲ請ハズト痛ク之ヲ論破セシム。彼抗論スルコト能ハズ唯々シテ去ル。同六日朝ニ至テ高嶋中將樺山海軍大輔其他數名ノ文武官員ヲ隨同シ王闕ニ至リ臣ハ大使タルヲ以テ君主ノ出入スル中央ノ門ヨリ入リ、隨員ハ皆側門ヨリ入リ、樂善堂ニ於テ臣ハ正階ヨリ昇リ大君主ニ謁ス。竹添公使右階ヨリ昇リ先ヅ臣ヲ引接スルノ意ヲ奏シ、臣進デ國書ヲ呈ス。大君主自ラ之ヲ受ケ、侍臣ヲシテ開緘セシメ、親ラ投閱ノ後承旨官ニ命ジ附スル所ノ譯漢文ヲ朗讀セシメ、欣然トシテ之ヲ受ラル、臣又御委任狀ノ抄本ヲ呈シ、次テ左ノ辭ヲ奏ス。

我大　皇帝深ク朝鮮國京城ニ於テ生ジタル事變ヲ哀ミ、切ニ軫念アラセラレ、卽チ言好ニ歸シ暨ヒ後來ノ事端ヲ防止センコトヲ欲シ、臣ヲ簡シテ特派全權大使ト爲シ、委スルニ便宜行事ノ全權ヲ以テセラレタリ。

謹テ　大皇帝ノ親書及ビ使臣ガ奉帶スル所ノ全權委任狀ノ抄本ヲ奉呈ス。

大皇帝ハ使臣ガ　大皇帝ニ代テ

大君主ニ白ス所ノ者ハ事理妥當ニシテ大君主ノ認メラル、所タルコトヲ深ク信ゼラレ併セテ使臣ヲシテ　大君主ノ壽康萬福ニシテ　寶祚長久ニ在ラセラレ

大君主ノ臣民ノ永ク其慶ニ賴ランコトヲ祝スルノ至意ヲ表明セシム。

大君主立テ之ヲ施了シ、更ニ　聖上ノ御安寧ヲ祝セラレ、又臣ガ安着ヲ賀セラル、臣一々答謝シ次テ高嶋以下ノ隨員交々接見ヲ賜フノ後、大君主ヨリ將ニ臣ト語ル所アルヲ以テ盡ク隨員ヲ屏ケンコトヲ望マレタリ。臣モ亦特ニ奉ズル所アルヲ以テ盡ク侍臣ヲ屏ケラレンコトヲ請求セリ。大君主ハ三大臣及通辯ヲ留メンコトヲ切ニ望マル、ニ因リ、臣モ然ラハ高嶋中將樺山大輔竹添公使及ビ通辯ヲ留メタシト請求シ、其餘リハ皆屏ケ去ル。此時大君主ヨリ持ニ臣ニ坐ヲ

賜ヒ、臣ガ奏スル所ヲ聽カント望マレタリ。臣因テ奏シテ曰ク、使臣本國ニ在テ要劇ノ職ニ居リ寸晷ノ暇ナシ、惟タ今回ノ事ハ兩國ノ間ニ於テ最モ重大ノ關係アルヲ以テ、我　聖上ハ深ク宸襟ヲ惱マサレ、使臣ニ命ジ暫ク多忙ヲ排シテ專ラ此事ヲ辨理セシメラル。使臣謹テ旨ヲ奉ジ貴國ニ來リ、議ヲ開クニ付テハ大君主親ラ使臣ニ對シテ應答ヲ賜ハルカ、又大臣ニ全權ヲ委任セラレ、大君主ノ面前ニ在テ會議スルカ、此三者ノ中ニ就テ願クハ取捨テヲ賜ヘト。大君主乃チ大臣ニ全權ヲ委シ談判セシムベケレバ、其レト協議シテ妥結ニ至ランコトヲ庶フ旨ヲ諭サル臣又奏シテ曰ク、今使臣ガ大君主ノ面前ニ在テ會議センコトヲ請求セシ所以ハ、貴國ニ於テ事變ヲ生ズル已ニ三回、而シテ使臣ハ前ニ江華島ニ來リテ高辨セシ時、貴國ノ全權大臣ト談判ノ間空シク時日ヲ費シタルニ懲リ、今回モ亦或ハ然ランコトヲ恐ルヽガ故ナリ。果シテ大臣ニ委任アラバ其言フ所ノ者ハ都テ大君主ニ代リ十分ノ動力ヲ有スルコトヲ望ムナリ。其委任セラル大臣ハ誰ナルヤ、願クハ明日ニモ開談スルヲ得ント、大君主之ヲ容レ且委任ノ大臣ハ熟考シテ之ヲ任ジ、速力ニ通知スベキ旨ヲ諭サル。臣又奏シテ曰、使臣更ニ一言ノ奏スベキアリ今回ノ事件ニ付テ貴政府ト我辨理公使ト往復セシ公文既ニ具ニ之ヲ閲セリ。殿下モ亦此公文ヲ基礎トシテ談判センコトヲ望マレ、此旨ヲ以テ大臣ニ委任アラバ使臣ハ實ニ之ニ應ズル能ハズ、故ニ預メ奏聞スト、右ハ臣ガ事變已來彼政府幾分カ罪ヲ竹添公使ニ歸シ、此ニ據テ其責ヲ輕クシ以テ對等ノ論場ヲ占メント欲スルノ深意ナルヲ察知シタルヲ以テ、臣ハ終始後ガ公文ノ主意ヲ以テ談判ノ基礎ト爲サントスルノ心計ヲ消滅セシメント欲シ、已ニ趙秉鎬ニ對シテ此ヲ說キ、今又大君主ニモ面奏ニ及ビタリ。

同七日午前左議政金宏集全權大臣ニ任ゼラレタルヲ以テ、本日午後一時議政府ニ於テ會議スベキ旨竹添公使ヲ經テ通知シ來ル。臣期ニ及デ井上議官齋藤書記官外務一等屬松延玹御用掛武田邦太郎等ヲ隨帶シ議政府ニ至リ、金宏集ニ會シ、先ヅ其委任狀ヲ閲看スルニ、中ニ京城不幸有逆黨之亂致日本公使誤聽其謀進退失據館焚民戕事起倉猝均非逆料トノ語アリ、臣因テ云フ、委任狀中此等ノ文字アレバ必ズ其事由ヲ論ゼザルベカラズ。互ニ疑惑ト想像ノ說ヲ以テ論ゼバ徒ニ紛ニ涉リ竟ニ妥結ニ至ラザルハ必然ナルヲ以テ、預メ趙督辨ニ告ゲ又大君主ニモ面奏シタル所似ナリ。宜ク此等ノ語ヲ削ルベシト、金宏集謂フ、此文字ハ我ニ於テ頗ル貴政府ニ對シ意ヲ用ヒタルモノナリ、誤聽其謀ノ四字ハ竹添公使逆黨ニ誤ラルトノ意ニシテ、進退失據ハ同公使京城ヲ去リ仁川ニ赴キタルヲ言フト解說シ、其實同公使ハ逆徒ヲ助ケタル者ナレドモ、誤聽ノ二字ヲ用ヒシハ卽チ同公使ヲ回護シ、我政府ヲ敬シタルモノナリト云フ者ノ如シ。臣又更ニ前說ヲ重ネテ此文字アレバ先ヅ其瑣末ニニ涉リテ推究セザルベカラズ。然レドモ之ヲ推究セントスレハ其證ナシ、其證ナクシテ徒ニ貴政府ノ疑惑ト想像トヲ以テ論端ヲ開クニ於テハ、我モ亦

疑惑ト想像ト少カラズ、彼此之ヲ以テ爭ハバ何日カ了結ヲ致サン、到底其局ヲ結ブハ腕力ニ委スルノ一法アルノミ。我レ聖上ハ事ノ此ニ至ルヲ欲セラレズ、故ニ本使ヲ派出セラレタルナリ貴政府ニシテ終ニ悟ラレズンバ本使モ貴政府ノ提出スル論旨ニ基キテ開談スルヲ辭セザルベシ然レドモ架空ノ紛議ヲ事トスルハ寧ロ事實ノ明カナルモノニ就テ辨法ヲ議センニハ如カズト、然ルニ彼尙ホ事變ノ顚末ヲ審カニシテ而後ニ辨法ヲ議セント主張シ頗ル固執セリ、而シテ臣ハ此其手段ノ在ル所ナルヲ知ルガ故ニ、力メテ之ヲ破ランコトヲ欲シ、反覆辯論數時ニ互リ、彼竟ニ大君主ニ奏シ其文ヲ改メ、明後日ニ於テ再議センコトヲ請フ、臣又徒ラニ曠日スルヲ得ザルヲ說キ、明日午前九時ニ於テスベキコトヲ約定シテ歸レリ。

同八日午前昨日ノ約ヲ趨ヒ復タ井上議官齋藤書記官等ヲ帶同シテ議政府ニ赴キ、金宏集ニ會ス。彼委任狀ノ本書ヲ示ス、臣之ヲ見ルニ昨日論ズル所ノ語意已ニ盡ク削除シ他ニ議スベキ文字ナキヲ以テ之ヲ可ナリトシ我ヨリ要求スベキ約款ノ草案ヲ示シ、且謂テ曰、本使心ヲ貴國ノ爲メニ費スコト玆ニ年アリ、近頃塡補金還付ノ事ニ關シテモ亦大イニ盡ス所アリ。此要求ノ如キモ最モ貴國ノ情勢ヲ斟酌シ、敢テ貴國ノ負擔ニ苦シムガ如キ難題ヲ提出スルニ非ラズ、專ラ公平ヲ旨トシツルハ明瞭ナリト雖、尙ホ貴官ガ虛心ニシテ之ヲ査閱スルヲ望ムコト、彼之ヲ領シ條ヲ逐テ議シテ公使館再建ノ頃ニ至リ、彼ハ其ノ人民ノ燒クニ非ラズト謂ヒ、公使館ノ雇僕宋尙吉ガ口供ニ館員自ラ書類ヲ燒クノ火延テ本館ニ及ビタルナラントアルヲ以テ證ス。臣モ亦我自燒ニ非ル證跡ヲ擧ゲテ之ヲ駁スルノ際、穆麟德告ゲテ曰ク、淸國欽差大臣吳大徵來リ臣ニ見エンコトヲ請フト、臣未ダ此談判ノ庸ニ入ルヲ許サヾルニ、吳已ニ入リ來ル臣其突稱ナルヲ訝リ、其來旨ヲ知ラザレドモ立テ握手シ、且ツ告ルニ本日ハ是朝鮮大臣ト案件ヲ議辨スルノ時ナルガ故ニ、晤談ニ便ナラザルヲ以テス、彼乃チ自ラ筆ヲ援テ書スル左ノ如シ。

使臣奉命來朝査辨事件與政府有應議之事貴大使來朝數日渴欲一晤以遂仰慕之懷卽貴大使與朝鮮政府商議之事使者亦可叩其大略所言公公言之此非貴大使與金相國兩人之事也

臣答　使臣辨理事件是據條約遵全權字樣不宜草々了事本使奉命一面査辨朝鮮事一面與貴國辨理兵營葛藤事及善後事宣但本日是據日韓條約與朝鮮大員晤商大事俄與貴使交涉恐非事宜又非本使所受國命之旨理合期他日相晤

吳　貴大使向有公正之名此次與朝鮮議辨要案諒必秉公讀議本大臣極所欣幸至本大臣所査各條係朝鮮亂黨起事之由本無與貴國干涉之事凡兩國交涉議約各派全權大臣畫押蓋印中國與貴國和好已久現無可議故無全權字樣如果貴大使別有與中國商辨之事卽請略示端倪本大臣自當早日入奏請旨劣加全權字樣方可商議惟在此候旨非十日八日之事所以本大臣不能不與貴大使一見也

於是臣吳ニ向テ曰フ、已ニ全權ノ委任ヲ受ケ居ラザル以上ハ、彼此權限同ジカラザレバ事件ヲ商議スル能ハズ、又其奏請シテ委任ヲ受ルノ間日ヲ曠シテ之ヲ待ツコト能ハズ。但シ私晤ヲ欲スルコトアラバ之ヲ他日ニ期スベシト、吳復タ韓事ヲ問及バントスルノ色アリ、卽チ左ノ意ヲ示ス。

本日喜與貴使晤但至日韓事宜本使與朝鮮大員辨議貴使偶來干此語及韓事本大臣不願互相干涉

吳之ヲ閱シ、筆ヲ援テ一書ヲ作リ金宏集ニ與ヘ、又兩國紛議ノ際間ニ居テ調處スルハ各國ニ其例アレバ已レモ韓事ヲ與リ聞カント欲スレドモ、之ヲ許サレザレバ復タ强ヒザルナリ、只朝員ト議セラル、ノコト公平ニ妥結アルベキヲ拭目シテ之ヲ俟ツトノ意ヲ書シテ臣ニ示シ、卽チ回リ去ル。吳大徵ガ第一書ヲ閱スレバ頗ル我ト朝鮮トノ議事ニ干與センコトヲ望メリ、然ラバ則チ何ゾ其來ル唐突ナル、何ゾ相見ノ順序ニ因ラザル、外交ノ道ヲ知ラサル殊ニ甚シ。臣實ニ憤懣ニ堪ヘザリシガ、眼前朝鮮政府ト談判ノ際更ニ枝節ヲ生ゼンコトヲ慮リ、一ニハ彼ガ日清之間現無可議故ニ全權ノ字稱ナシト云フヲ以テ之ヲ察スレバ、單ニ朝鮮國王ニ係ルノ使節ト看做サヾルヲ得ズ。全權ヲ有シタル使臣ニシテ權利ナキ一個人ト議論ヲ開クトキハ、反テ事體ヲ辱シメンコトヲ恐レ、程ヨク接遇ヲ爲セリ。

吳大徵已ニ去ルノ後、金宏集ニ請テ吳大徵ノ書ヲ見ルニ語意頗ル命令スル所アルガ如シ。臣因テ彼レガ或ヒハ之ガ爲メニ牽制セラレテ速ニ決定スル能ハズ、議事紛紜ニ至ルヲ察シ、故ラニ疑問ヲ起シテ曰ク、吳ガ書ニ就テ推考スレバ、朝鮮ハ獨立國ニ非ラズシテ淸國ノ屬邦ノ實アルガ如シ。果シテ然ラバ我國ヲ首トシテ其他諸國ノ條約均シク奇怪ナル性質ニ歸ス、現ニ本使ガ議スル所モ自カラ局面ヲ改メテ先ヅ貴國ハ果シテ淸國ニ屬スルヤ否ヤ、此點ヨリシテ問起サザルベカラズト云フヲ以テ飽迄之ヲ詰リ、彼再三再四議スル所決テ他國ノ干涉ヲ受ケズ、且ツ直ニ今日ニ於テ決定スベキコトヲ辯解ス。臣又詰テ曰、假令今條約ヲ議定スルモ、貴政府ハ淸國ニ請フテ允可ヲ得ルニ非レバ決定ニ至ラザルハ必然ナラン。サスレバ今日ノ議定ハ無効ニ屬スベシト金宏集決シテ左樣ノ事ナキヲ誓フ、於是始メテ前議ヲ續テ公使館再建ノ項ヲ論ズ。彼其費額ヲ半減シ二萬圓ト爲サンコトヲ請フ。臣細カニ費途ヲ算シ、尙其輕少ナルヲ說クニ、彼亦其理ニ服シテ之ヲ肯ンゼリ。此時臣思フ、新設ノ公館モ其實京城ニ於テ甚ダ宏壯ナルヲ要スベキニモ非ズ。彼已ニ折服セシ已上ハ、我ヨリ彼內情ヲ酌察シ寬優ヲ加フルモ事ニ於テ妨ナシト、因テ設額ノ半ヲバ公使領事館ト爲スニ足ルノ家屋ヲ以テ之ニ充テ、更ニ修築ノ費用トシテ半額ヲ出スベシトノ便法ヲ與ヘシニ、彼實ニ欣喜ノ情ヲ露ハシテ之ヲ謝シ、卽時我官吏ト其地ヲ擇定スベキヲ以テ答タリ。繼テ其餘リノ條欵聽ルスベキハ之ヲ聽ルシ、駁スベキハ之ヲ駁シ

テ午後一時ニ至テ大略決定ス。臣因テ彼ヨリ送ルベキ謝狀ノ草案ヲ示スニ、彼ハ我稿ニ據ラズ自カラ修メテ呈セント欲シ、且ツ必ズ不妥ノ字句ナキヲ誓フ、然レドモ一度國璽ヲ鈐スレバ改ムルニ難キヲ以テ、其草稿ヲ一見セシコトヲ望ミ、彼之ヲ諾ス。最後金宏集ヨリ其國ノ犯罪者金玉均等四名難ヲ逃レテ若シ我國ニ潛マバ、捕拿交付アランコトヲ請ヒ、且ツ其照會ヲ送ルベキヲ述ブ。臣ハ本使本國ヲ出ル時尚ホ該犯等ノ來レルヲ聞カズ、然レドモ照會ヲ送ルハ隨意ナリ、但シ犯罪者ヲ交付スルコトハ尋常ノ犯罪者ヲ交付スルニ於テモ各國互ニ特別ノ條約アリテ之ヲ爲スコトヲ得、假令該名等我國ニ在リトスルモ、彼等犯罪ノ性質ヲ明瞭ニ詳知シタル後、萬國公法ニ照ラスニ非レバ未ダ明答シ能ハザルナリト答ヘタリ。

於是臣ト朝鮮政府トノ談判全ク議定スルヲ以テ、明日午後一時議政府ニ於テ互ニ調印スベキヲ約シ、大君主ヘ謁見ノ期ヲ訂シ歸ル、同日島村書記官ニ命ジ此日ニ至ル迄ノ事情ヲ報告ノ爲メ歸朝セシメ、近藤權大書記官ヲ假リニ兼外務書記官ニ任ジ、京城ニ在留セシム。同九日午後一時井上議官近藤齋藤兩書記官以下ヲ帶同シ議政府ニ到リ約書ニ調印シテ彼政府ト互相交換シ謝狀ノ草案ヲ閱シ之ヲ議定シ、又竹添公使ト往復シタル照會及啓文ノ此事件ヲ論辯スルニ係ルモノハ彼此互ニ激回スベキヲ約シテ歸ル。同日高島陸軍中將ト商議シ、護衞兵ノ內一大隊ヲ京城ニ留メ我公使館ノ護衞ヲ命ジ、竹添公使ニ一時歸朝ヲ命ジ、同公使ハ近藤書記官ニ臨時代理公使タラシム。

同十日午後一時竹添公使及隨員ヲ帶同シ復タ樂善堂ニ於テ大君主ニ謁ス、臣先ヅ會議ノ平穩ニ完結セシヲ賀シ、又辭別ノ意ヲ奏ス。大君主懇ロニ慰問アリ、更ニ臣ガ歸國ノ日我　聖上ノ御安寧ヲ祝シ奉ルベキヲ囑セラル。而後隨同ノ諸員皆次ヲ追テ謁見シ、畢テ拜別ス。此夜金宏集ヨリ罪人交付ノ照會ヲ送ル因テ其照復ヲ作リ近藤臨時代理公使ヲシテ明朝ヲ以テ之ヲ彼政府ニ致サシム。同十一日午前七時臣一行ヲ率キテ京城ヲ發シ、仁川ニ回ル。大君主及ビ政府ヨリ送行ノ禮頗ル慇懃ナリ。此日井上議官ヲシテ吳大徵ノ處ニ到リ、同人ガ臣ト談判スベキノ權ヲ有セズ、又臣ガ歸朝ヲ急グヲ以テ面會セズシテ去ルノ意ヲ通ジ、而後京城ヲ出デシム。同十二日午前十一時濟物浦ニ於テ陸軍大尉磯林眞三及ビ京城遭害者ノ靈ヲ祭リ、同日午後四時汽船近江丸號ニ坐シテ仁川ヲ發シ、同十四日下之關ニ抵リ、同十六日第十四聯隊ノ護衞ヲ解ク。

日淸ノ干係ニ於テハ臣素ヨリ委任狀ニ遵ヒ淸國派遣ノ大臣ト商議シテ葛藤ヲ妥結シ、並ニ善後ノ事宜ヲ辨理シ永遠ニ事端ヲ防止センコトヲ望ミシニ、不幸ニシテ淸國派遣ノ大臣ハ我國ト商議スルノ全權字據ヲ有セズ、而シテ其筆談スル所ニ據ルトキハ、兩國之間現無可議故無全權字樣ト云、臣其日淸關係ノ大事ヲ商議スルノ資格ヲ備ヘザルヲ知リ、彼レト談判ヲ開キ往復延留スルモ結局ヲ得ベカラザルノミナラズ、却テ事機ヲ漏シ時日ヲ失ヒ、以テ使命ヲ辱ムルニ至

ルノ必然ナランコトヲ察シ、卽チ意ヲ決シテ歸途ニ就キ、彼ト相交渉セズ。又隨員ヲシテ略我ガ意ヲ致サシメ、彼ト相絕タザルノ意ヲ示シ、以テ後日ノ爲メニ寬猛自由ナルノ余地ヲ爲スノ針路ヲ取リタリ。

明治十八年　一月十九日

一月四日逍秉督辨トノ談話

淺山顯藏筆記

大使　當度本使渡來致候ニ付テハ、貴政府之御厄害不尠、且旅館ノ御設ケモ十分ニテ何不由ナク、安着罷居候段鳴謝之至ニ候。

趙　當監營ヲ御旅館ト相定候義、實ハ、政府モ特別ノ欵待ヲ以テ監司ヲ他ニ移シ候義ニ付、此邊ハ御承知被下度、乍併何分急ナル事ニテ修理所モ行屆兼ネ房屋ノ不潔ナル所甚ダ不安候

大使　本使モ濟物浦ニ在テ四五日ノ猶豫ヲナシ進京スベキ義ニ候ヘドモ、此度本使ノ渡來致タルハ實ニ兩國ノ交誼ヲ存スルト否トニ關スル一大事之時ニシテ、我ガ皇上ニモ深ク御念慮在セラレ、本使モ內國ニ在テハ隨分繁務ニ與カリ居候ヘドモ、其內務ハ捨置キ此度事件ノ結局ヲ速カニ取纏メヨトノ命ニ由テ渡溟致タル義ナレバ、一日モ猶豫ナク進京致シタル義ニ候。就テハ此度事件之好局ヲ結ブコトハ只ニ貴政府ノ御考ニ據ル事ニ候。

趙　素ヨリ貴政府ト我政府トノ間ニ於テハ何モ事アル義ニ無之、隨テ兩國ノ交際ニモ決シテ關

係アル義ニ無之ト存候。

大使　貴督辨モ御承知ノ事ナガラ假令久シキ交際國ト雖ドモ一旦事アルトキハ忽チ兩間寡端ヲ惹起スコトハ古例不少事ニテ强チ貴國ト我國ノミニ限ルコトニ無之候。

趙　兼ネテ御威名ハ我國迄モ轟キタル義ニテ、此度ビ貴大使ノ御渡着ヲ承ハルヤ我政府ノミナラズ一般安堵ノ思ヒヲ爲シ、必ラズ公平ナル御處置アルコトト歡喜ニ堪ザル義ニ候（此度政府ノミナラズト云フ語ノ内ニハ國王ト云ヲ大ニ含ミタル云ヒ振リナリ）

又曰ク　貴大使ニハ是迄御往復致タル出文ハ遂一御覽被成候哉。

大使　素ヨリ委細閲了セリ、然ルニ本使ニ於テハ是マデ往復アリタル出文之意ヲ引續ヒテ御談判可申義ニ無之候。抑モ是迄ノ公文ヲ見ルニ、總テ貴政府ハ自己之疑惑ヲ以テ自己之勝手計リヲ申越サレタルモノニシテ、決シテ政府ト政府トノ往復スベキ出文ニ無之候。若シ貴政府ガ右出文ニ據テ事ヲ談ゼラルヽトナラバ、我使事ハ夫レニテ事濟ミタル義ニテ、他ニ一言スルコトモ無之候。

趙　何レ追々ト我政府ヘ御談判可相成義ト存候、乍去今日兩國間ニ於テ事無キ義ト存ジラレ候。

大使　貴國ニ於テハ決シテ事無トセラルヽモ、我國ニ於テハ之ヲ事無シト認メザルトキハ則チ兩國事有ルナリ、故ニ貴政府ニ在テ我請求ニ應ゼラレザルトキハ、後來如何ナル結局ヲ見ルモ豫メ期シ難キコトニシテ、則和好之成否ハ貴政府ガ我ガ求ニ應ゼラルヽト否トニ據ル事ニ候。

兎ニ角本使ニ於テハ何卒兩間ノ和好ニ至ルコトヲ企望致ス義ニ候。

趙　誠ニ願フ所ニ候。

（右ニテ一段畢）

大使　本使大王殿下ヘ謁見之義ニ付テハ本日竹添公使ヨリ御照會致ス筈ニ候ヘ者、貴督辨ニ於テモ可成速カニ謁見被仰付候樣御周旋有之度候。

趙　御照會相成候上ハ可成速カニ謁見相成候樣奏上可仕候。

井上大使朝鮮國王トノ應答

一月六日樂善堂ニ於テ

淺山顯藏筆記

大使　本使我國ニ在テハ國事ノ緊要ニ關シ候身分ニテ、實ニ繁忙之内ニ奔走致ス者ニ候。然ルニ我ガ
大皇帝ニハ此度ノ事件ヲ聞召サレ、御憂慮之餘リ、國事ノ多端ヲ打置キ、朝鮮國ニ到テ事件ノ結局ヲ速カニ取纏ヨトノ命ヲ奉ジ、來着致候、就テハ此度ノ談判ヲ開クニ當テハ大君主御直ニ本使ニ對シ御應答被下候カ、又ハ大臣ニ全權ヲ御委任アリテ大君主之御目前ニ於テ會談仕ルカ、右兩樣ノ間聖意ノ在ル所ニ任セ度奉存候。

國王　此度事件ノ談判ニ付テハ自カラ余ガ信用スル處ノ大臣ニ全權ヲ委ネ談判セシムベキ筈ナレバ、貴使ニモ該大臣ト協議アリテ速カニ好局ヲ取結ハンコトヲ望ム。

大使　本使ガ大君主ノ御目前ニ於テ開談致サンコトヲ奏請致セシ譯ハ、貴國ニテ生ジタル變亂此度ニテ三度ニ及ビ候。本使モ既ニ前年江華島迄派遣サレタル大臣ノ一人ニシテ、當時貴國全權大臣ニ談判致タルトキ大ニ時日ヲ空過致セシ事有之候ガ爲メ、今般ノ談判モ空シク此地ニ滯在致サンコトヲ恐レテ請奉リシ次第ニ候。依テ明日ヨリハ是非開談致サンコトヲ企望仕候大臣ハ誰ニ御委任相成候哉。

國王　素ヨリ明日ニテモ開談之手筈ニ取計フベシ全權大臣ハ篤ト勘考之上人ヲ撰ミ通知スベキナリ。

大使　今茲ニ一言奏上致置度事柄ハ、此度事件ニ付貴政府ト我ガ公使ト往復ニ及ビタル公文ハ詳細閲見致候。然ルニ若シ右公文ノ主意ニ基キ談判スベシトノ旨意ヲ以テ御委任相成候時ニハ、本使ハ其御談判ニ應ジ難ク候、是等ハ御委任在セラルベキ前ニ先チテ其大旨ヲ奏上仕候義ニ候。

國王　夫等ノ事柄ハ談判ニ及バヽ自カラ判然致スベキ義ナリ。

朝鮮國全權大臣委任狀

大朝鮮國

大君主爲勅諭事本國於本月十七日、不幸有逆黨之亂、以致日本公使館焚民戔、事起倉猝、拘非逆料、乃承

大日本國

大皇帝惠顧邦交、簡派全權大使伯爵井上馨、前來商辨、玆擧朕所信重倚毗之議政府左議政金宏集特派爲全權大臣、會同日本國全權大使、辨理一切事宜、乃委任公便宜行事全權也、故於此事與朕親臨面商、無異、此爲憑據、

開國四百九十三年朕卽位二十一年十一月二十二日於漢城昌德宮親畫押鈐國寶

大君主

奉

勅議政府領議政府沈舜澤

井上大使金宏集トノ對話大意

明治十八年一月七日午後一時ヨリ朝鮮京城府議政府ニ於テ井上大使ハ朝鮮國全權委任大臣金宏集ト對談ス。我ガ陪座ハ議官井上毅・秘書官齋藤修一郎ニシテ通辯ハ武田御用掛筆記ハ松延玹ナリ彼ノ陪座ハ趙統理衙門督辯及ビ穆統理衙門協辯ニシテ外ニ朝鮮政府ノ爲筆記者二名アリ談判ノ顚末ヲ筆記ス

大使　御委任狀ヲ出示シ、彼ノ委任狀ヲ見ンコトヲ求ム。

金　拙者委任狀ノ寫ハ趙督辨ヨリ差上タルハ御覽相成候哉。

大使　未ダ一覽セズ、公使ヲ經テ御廻致相成リシヤ。

金　然リ。

大使　若シ外ニ其寫等アラバ拜見致シタシ。

金　多分差上ゲタル抄本ヲ御覽被成候事ト存ジ、此處ヘハ持參致サズ、公使館ニ取リニ遣シタリ。卽時來ルベケレバ御談判ノコトアラバ御申聞アルモ妨ゲナシ。

大使　此等ノ事變ヲ談判致スニハ必ラズ其初メニ於テ御互ニ其ノ委任狀ヲ閱シ、而後開談スルヲ萬國ノ常例トスレバ左樣致シタシ。

金　御尤ナリ、拙者ハ先般モ條約取結ノコトヲ取扱タレドモ、其節ハ互ニ寫ヲ閱看シ、捺印ノ日ニ本書ヲ出シ示シタル故ニ、今日モ其積ニテ持參セザリシ、直ニ御目ニ懸クベシ。

大使　諾。

金　委任狀ハ是非御目ニ掛ケ申スベケレドモ、拙者大君主ヨリ全權ノ命ヲ受ケタルコトハ相違ナレケレバ御話ハ有之テモ差支ナカラン。

大使　委任ノ權限相互ニ當ルヤ否ヲ確カメザル間ハ御話致スマジ。

金　拙者ヨリ一言申上ゲタシ。

大使　此事件ニ付キ貴下ヨリ開談セント云ハルヽヤ。

金　然リ。

大使　然ラバ暫ク待タルベシ御互ニ先ヅ爲スベキノ定式アレバ其ノ事ヲ濟マシテ後御談判ニ及ブベシ。

金　然ラバ其間御閑談可致

大使……支那兵ハ何程居ルヤ

金……城內ニハ千四百人程ナリ

大使……城外ニハ幾千ナリヤ

金……從前ハ居ラザリシガ此比來リシモノ少々馬山浦ニ駐在セリ

（此時彼レノ委任狀ノ寫ヲ持來ル）

大使　取テ之ヲ閱ス、「京城不幸有逆黨之亂以致日本公使誤聽其謀進退失據館焚民賤事起倉猝均非逆料」ノ語アリ。

大使　前日趙督辨ニ詳シク御話イタシ、又大君主ニモ略申上置タル通リ、互ニ想像ノ說ヲ逞スレバ事ヲ理シ難キナリ。此委任狀中此等ノ文字アリテハ是非其事ヲ論ゼザルベカラズ。然ル時ハ論端紛起シテ談判ヲ纏メ難シ、故ニ此等ノ字面ハ削除セラレタシ。

金　此文句ハ貴政府ニ對シ頗ル心ヲ用ヒタルモノナリ、何トナレバ此誤聽其謀ノ四字ハ竹添公使ノ逆黨ニ誤マラレタリトノ意（實ハ其謀ヲ助クトカ何トカ云フベキ所ナレドモ、日本政府ニ對シテ如此回護セリト云フ意ノ如シ）進退失據トハ同公使京城ヲ去リ仁川ニ赴キタルコトヲ云フナリ。同公使ノ事ハ追々御談話ノ內ニ段々ニ分ルベシ。

大使　誤聽云々ノ字ヲ存シ置ケバ果シテ其事實如何ヲ取調ベザルベカラズ。是ハ詰リ貴政府ノ想像ニ據ルモノナレバ、其想像說ヲ以テ主張セラレバ我モ亦想像說ヲ出スベシ。如此互ニ

相論ゼバ事ノ治ムルコトナク、其ノ極點ハ腕力ニ委スルノ一法アルノミナリ。我政府ハ事ノ此極ニ至ルヲ欲セザル故ニ、拙者ヲ派出セラレタリ。然レドモ御望ミナレバ敢テ避ルニアラズ。

金　誠ニ大使ノ全權ニテ來ル、ハ　貴皇帝ノ和好ヲ主トセラル、ニ因ルナルベシ。然レドモ其顚末ダケハ御話致サネバ大使モ御承知ナキ所アルベシ。故ニ御談判ノ前ニ於テ、先其事ヲ御話致シ、其後眞ノ御談判ヲ致スモ晩カルマジト存ズ。但此事ハ一場ノ座話ト御聞キ相成テモ苦シカラズ。

大使　先能ク場合ヲ考ラレヨ、變亂中ノ手續ヲ貴官等ノ想像疑惑ヲ以テ說話ストナラバ、拙者ニモ疑惑ノ點數多アリ、然レドモ想像疑惑ヲ以テ談判ヲ爲サント欲スレバ、決シテ妥議ニ至ルノ道ナシ。遂ニ此ノ禍ハ日韓兩國ノミニ止マラズシテ淸國ニマデ推及スベシ。故ニ先ヅ大體ノ談判ヲ結了シテ後其等ノ御話ヲセラレントナラバ、私席ニ於テ承ルベシ。强チ此事ヲ先キニ言ハントセバ拙者ハ必ラズ其纏リノ付カザルヲ保證スルナリ。何トナレバ今モ申ス通リ互ニ想像說ヲ以テスレバ、徒ラニ多端ニナリテ限リナキコトナレバナリ。

金　御尤ノコトナリ、拙者モ決テ事ヲ多端ニナシタキニハ非ラズ、只双方ノ疑ノ在ル所ヲ吐露シ、渙然氷釋シタル上ニテ御談判致サバ一層好キコト、存ズレバナリ。

大使　御好ミナラバ御話致スモ可ナリ、然レドモ如此ナレバ到底結局シ難カルベシ。相互ニ相像說ヲ以テスレバ際限ナク、然ルトキハ貴國大君主ニモ此處ニ御出ヲ願フニモ至ルベシ。左樣ニテハ到底妥議ノ時ナカルベシ。

金　大使公平ノ御論ハ篤ト承知致居ルナリ、然レドモ今モ申ス如ク、御互ノ腹中ニ釋ケザルコトノ有ル限リハ、臂ヘバ腫物ニウミノ有ルガ如ク、其ウミヲ出シ盡シテ後御話ヲマトメナバ、雙方ノ情思爽快ニシテ永ク和誼ヲ保ツノ道ナラン。故ニ拙者ト大使トノ胸中ヲ打開キタルニ致ス方然ルベキナリ。

大使　度々申スモ同ジコトナレドモ、貴政府ニ疑アレバ我ニモ疑アリ、之ヲ互ニ打出シテ纏マラヌ樣ニスレバ、ウミヲ出シテ腫物ヲ癒ヤスニ非ズシテ却テ其腫物ヲ大キクスルナリ。疑惑ト疑惑トヲ主張シテ事ヲ纏メ損ジタル例ハ各國ニモ至テ多シ。ソレニモ拘ラズ破裂ニ至ルヲモ測ラズシテ强テ望マル、ナラバ、拙者モ其積リデ御談話致スベシ。

金　大使ノ貴說ハ疾ヨリ分リ居レリ、但拙者ノ未ダ解セザルハ腫物ヲ治スルハ名醫ノ術ヲ籍ラザルベカラズ。拙者ハ互ノ疑ヲ解クニ非レバ談判纏マルベカラズト思考スル故ニ、互ニ之ヲ氷釋スルヲ得タル妥當ノ御商議ニ及ビタシト存ズルナリ。

我ヨリモ己ニ大使ヲ派シ貴國ニ向カシメントシタル際、貴大使ノ來ル、ニ伺大ニ悅喜シタ

リ大使己ニ此ニ來ラルレハ必ラズ辨理セラル、事アルベシ。然レバ双方談話ヲ盡クシテ後之ヲ議スル方尤モ可ナラズヤ。

大使　拙者ハ反對ナリ、先ヅ談判ヲ適當ニ結ビタル後ニ只一場ノ話ニナストナレバ不可ナケレドモ先ヅ想像ノ話ヲナセバ事六ケシクナルノミナリ。卽チ貴政府ヨリ大使ヲ我ニ派セラルルコトニ付テモ、拙者ハ大ニ疑惑スル所ナリ。然レドモ言多岐ニ涉レバ姑ク言ハズ、此事スラ拙者ハ疑アル程ナレバ、御互ノ想像說ヲ出サズ、先ヅ談結ヲ望ムナリ。談結シタル後ニ至リテ何事ナリ笑ヒ話シニセラル、トノコトナレバ少モ差支ナキナリ。

金　拙者ハ始終ノ御話ヲ致シ御互ニ心ヲサツパリトシテ御談判ニ及ビタシト存ズルナリ。

大使　拙者ハ之レニ反對ナリ、ソレハ前ニ申ス所ノ如シ。

金　拙者ハ順序ニ隨テ御談話致サンコトヲ望メリ、始メヲ捨テ、終ヲノミ理メントセバ却テ事ヲ纏メ難カルベシ。願ハクバ順序ヲ追ヒタシ。

大使　御望トアレバ左樣致スベシ、然レドモ纏マラザルハ請合ナリ。只其積リナレバ其用意ヲシテ取カヽラン、故ニ此談判ハ是迄マデニ止メ更ニ日ヲ改メテ開談スベシ。

金　只拙者ハ順序ヲ追フ方可然ト存ズルノミ。

大使　モハヤ多言スルニハ及バズ、强テ其說ヲ主張シ是非順序ヲ貴官ノ云ハル、通リニセヨトカ、又否ラザルカ其決答ヲ承ルベシ。

金　左樣ニ御話下ダサル處ニアラズ、トニカク今日ハ遲クモ相成タレバ、尙御再考ノ上明日カ明後日ニ於テ御都合次第御來臨下タサレタシ。

大使　拙者ハ左樣ナル不決斷ノモノニ非ズ、別ニ再考スル所ナシ、只貴官ノ御決答ヲ承リタシ。

金　拙者大君主ノ命ヲ承リタルモ、其處マデニハ至ラズ一應大君主ニ申立タル上御談判仕ルベシ。

金　只始メハ異論アリトモ、終リニハ妥結ニ歸セシムルコトヲ委任セラレタリ。

大使　如此自ラ決スルコト能ハザレバ何ゾ全權ナラン。拙者ハ只談判ヲ貴官ノ云ハル、通リニセネバナラヌトカ、成ルトカ云フ決答ヲ承ハレバ夫ニテ足レリ。

金　拙者全權ノ委任アレドモ未ダソコマデニハ至ラズ、タトヘ大君主此ニ在ルモ一ニ親裁スルコト難カルベシ。兎ニ角明後日マデ御待下サレタシ。

大使　拙者ハ如此空シク日ヲ費スコト能ハズ、拙者ハ甚ダ繁忙ノ身ナレバ今日其決答ヲ承ハルコトヲ望ムノミ。

金　御繁忙ノコトハ昨日以來十分ニ承リ居ル所ナレバ、强テ曠日ヲ好マズ、然ラバ明日御出ヲ願ヒタシ。

大使　明日何時ナリヤ。

金　毎日御足勞モ恐縮ナレド、明日又此時刻ニ願ヒタシ。

大使　拙者ハ種々ノ用向アリテ實ニ一刻モ惜キ所ナレバ、明朝九時マデ待ツベシ。其時ニ又此ニ來ルベシ。

金　九時ニテハ甚ダ困却ナリ、何トゾ十二時マデニ願ヒタシ。

大使　此談判ノ結果ニ因リテハ兩國干戈ニモ及ブベキモ測リ難キ程ノコトヲ辨ズルニ、此位ノコトハ出來ヌコトナカルベシ。御承知ハアルマジキナレドモ、我ガ國ノ人心ハ甚ダ憤激シ居レバ、此處ニテ一歩ヲ誤マテバ直チニ決裂ニ至ルベキ勢ナレドモ、拙者ハ何卒平和ニ致シタクト望ム、故ニ談結ヲ先ニシ其他ノ御話ヲバ後ニ致シ度ト申セドモ御決シナラヌナレバナサラヌトシテ御暇ニ致スベシ。

金　兩國ノ大事ナレバ三時間位ハ如何トモ致シ、明朝九時ニ御出ヲ願フベシ。

大使　然ラバ承知セリ。

疑似ヲ以テ人ニ及ボスハ甚ダ不好御互ニ不愉快ノ事ナリ。

拙者ハ平和ヲ望ミ居ルモ、事ニ因リテハ此精神ト反對スルニ至ルベシ。先年花房公使ノ御談判致シタルトキハ、同ジ使臣ナレドモ拙者外務卿ニテ其後ニ居テ萬事指令致シタレバ、タトヘ決裂セントスルモ拙者尙ホ彌縫ノ道アリタレドモ、今般拙者ハ此全權ヲ委任セラレテ來リタレバ、此ニテ破裂スレバモハヤ綢繆ノ道ナキナリ。此處ヲヨクヨク思ハルベシ。

金　和平ノ御精神ハ詳細承知致シ居レリ、拙者モソレハ御同樣ノコトナリ。

右ニテ談判一應畢リ尙ホ一二說話ノ間彼大臣等委任狀ノ字面ヲ削除スルノ商議ヲ爲シ居ルヲ以テ、大使ヨリ齋藤秘書官ヲシテモルレンドルニ言ハシメテ云、彼此共ニ想像ノ說ヲ以テ押張ラバ誰レカ之ヲ裁判セン、先ヅ試ミニ互ノ位地ヲ以テ考ヘヨ、我ハ客ニシテ韓廷ハ主ニアラズヤ、我此ニ來ツテ主ニ請フ所アラントス、主ハ客ノ請求ニ付テ論駁スル所アラバ宜シク論駁スベシ。未ダ其本ニ至ラザルニ其前ノ瑣事ヲ以テ如此論辨スルハ亦愚ナラズヤト、金之レニ因テ大イニ大使ノ主意ヲ領解シ、不都合ナル字面ハ削除スルニ決シ、今夜中ニ國王ニ奏上シ改メ置クベシト答ヘタリ。

右ニテ此日ノ談判畢リシヤバン杯ヲ擧グルトキ大使韓官ニ向テ曰ク、試ミニ思ヘ、今日此事スラ論判スレバ如此時間ヲ費スナリ。

況ハンヤ前々ノ事ヨリ論ジ起シ來リ、互ニ想像疑惑ヲ以テ論駁シ居ラバ此談判何ノ時ニカ結局ニ至ルベキ、然レバ明日ハスベテ小事ノ談論ヲバ打捨テ、肝要ノ點ヲ議シ、速カニ結了ヲ致

シ、而シテ互ノ異心ヲ去リテ快ヨク我ヨリ望ミテ此ノシャパンヲ飲マンコトヲ希望スルナリ。

金曰、拙者亦然リ、故ニ此杯ハ明日ノ喜杯ヲ豫メ祝シテ此ヲ飲ムベキナリ。カクシテ二時十分辭別ス。

井上金第二回對話大要

一月八日午前九時ヨリ井上大使議政府ニ於テ金宏集ト第二回談判ヲ開ク大意筆記下ノ如シ、彼此ノ陪坐前回ニ同ジ。一應ノ寒喧畢リ、彼委任狀本書ヲ示ス。

金　是ニテハ如何可有之哉、

大使　一讀昨日所議ノ字面ヲ削除シアルヲ以テ可然ヨシヲ答ヘ、更ニ我約款ヲ出シ彼ニ示シ、

大使　事實ニ付テ貴政府ヘ御談判可致件々ハ此通ニ候、

（金　以下瀏覽）

大使　拙者ハ此事ニ關シテ貴官ノ最虛心ニテ御勘考アルコトヲ希望セリ、拙者ハ從來貴國ノ義ニ付テハ盡力致居詳細ハ姑ク置キ、彼四十萬圓之事ニ付テモ相應ニ心ヲ盡シタリ。然レバ此條款ノ如キモ他ノ費用等ハ筭セズ、全ク已ムコトヲ得ザルモノノミヲ數ヘ、專ラ公平ヲ旨ト致シタリ。御熟覽之上ハ自然御分リ相成義ト存ズレドモ、尙御注意有之タシ、貴政府

ニ對シテ難題ト申スワケニハ決シテ無之、御承諾難相成トハ存ゼザルコトナリ。

金　敝國ノ事ニ付テ大使ノ兼々御盡力相成居事ハ委曲詳悉罷居レリ、事件三回ノ内一度ハ花房ナリシガ、二度ハ大使ノ御辨理相成リシコトニテ、又彼塡補金ノ義ニ付テハ別テ御費補ヲ以テ御返却相成タルコトナレバ、此度ノコトニモ償金等ノ御話ハ有之間シキカト存ジ居レリ。

大使　塡補金返還ノ事ハ彼レ此レト情實ヲ斟酌シテ左樣相成シガ、此度ハ別ニ事件ノ生ジタルニ付テナレバ、又格別ノ相違アルコトナリ。且先年ハ死亡者モ十三人程ニテ此度ハ商人ノミニテモ廿九名ノ死亡ナリ、政府ハ人民保護ノ責アルナレバ、人民ニ對シテモ此事空ク致シ難シ、元來人民ヨリハ十分ノ高ヲ申立タレドモ、拙者ハ飽マデ精査ヲ加ヘ、聊モ證據不明瞭ナルモノハ之ヲ除キ、然ル上ニテ商民ノ損害ヲ約ソ五萬圓ト積リ、其他ハ賑恤金等ヲ算セシノミ。是ヲ前年ト比較スレバ其實際ノ處御明瞭ナルコトヽ存ズ、決シテ難題ニハ非ザルナリ。

金　決シテ十一萬ノ高ヲ多シナリト申スワケニ非ズ、今申セシ所ハ大使ノ曾テ御盡力アリシ處ヲ謝シタルマデノ意ナリ、拙者モ此條欵ニ對シ夫々御話致スベシ。

大使　諾。

金　玆ニ一ツノ願アリ、大使ニモ前ノコトハ言ハズト仰セラレタリ、此第二條ノ兵民ノ文字ハ人民ト改メンコトヲ乞フ。

大使　文字ノコト何レトモ致スベシ（卽人民ト改ム）

金　又償補ノ償ノ字ハ塡ノ字ニ先年モ改メタリ是モ願ヒタシ。

大使　夫等モ容易ノ事ナリ（卽塡補ト改ム）

金　磯林ノコトニ付テハ敝國ニテ貴國ニ對シ御氣ノ毒ハ申スマデモナク、大君主初メ我々ニ至ルマデ誠ニ遺憾ノ至リナリ、同氏ハ大君主ニモ大信用アリシ人ナリ、變亂ノ時ハ尙ホ無事ニテ外出中ナリシ、因テ他ノ道ヨリセヨト通知セシニ、運命ノ拙キ所カ南ノ道ヲ經タル故ニ竟ニ殺害セラレタリ。

大使　同人ノ事ヲ大君主ニモ夫程ニ思召サル、トノ趣キハ我聖上ニモ申上ベシ、彼レハ武官ナレバ自然其榮譽ヲ保タマントニノミ傾キタルモノナルベシ。

公使館ノ事ハ何レノ國モ同樣ニテ、大ニ其國ノ體面ニ關スルコトナレバ是ハ最モ御承諾アルベシ。

金　磯林ノ事ハ貴方ノ憤リモ我國ノ憤リモ同樣ナレバ、必ラズ相當ノコトヲ爲スベシ。

公館ノコトハ少シク御話アリ、敝國人民ノ燒タルコト證跡アレバ敝國ニテ償フハ元ヨリノコトナレドモ、反テ我國人ノ燒カヌト云證跡コレアレバ、夫ニテ御承知下タサレ、何分此條ハ御免アリタシ。

大使　其證據ト申スハ何ナリヤ、拜聽致シタシ。

金　卽チ是ナリト一紙ノ書付ヲ出ス。

大使　取テ之ヲ閲ス、卽チ我公使館ニテ使用セシ宋尙吉ニテ、始メニ朴泳孝、金玉均等ノ服ヲ變ジテ公使ト共ニ仁川ニ赴キタルヲ云ヒ、中ニ公使館ノ文書ヲ石油ヲ灌ヒテ之ヲ燒ケリ、其火或ハ延ヒテ公館ヲ燒カシナラント云ヒ、終リニ復タ朴金等ノ仁川ヨリ日本ニ赴キタルコト等ヲ云ヘルモノナリ。

大使　是ハ小使位ノ申事ニテ據ルニ足ルモノナラズ、此前後ノコト（卽朴、金等ノコト）ハ我國人ヲ遍ク取調ブルニ誰モ知リタルナシ、又書類ヲ燒タルハ前月ノ事ニテ、公使以下ノ館ヲ去リタルヨリ其時刻ヨホド隔タリタリ。又後ニ聞ケバ館内ヲ焚草ヲ推フセシトノコトモアリ、又公館以下麻浦ニ至リテ黑煙ノ上リシヲ回顧シテ公館ノ焚カレタルヲ察シタル等、貴國人ノ燒タルニ相違ナキナリ。然レドモ互ニ證據ダテシテ論ズルトキハ際限ナキニ至ルベケレバ、最初ヨリ種々ノ事ハ取除ケント申セシハ此ヲ云フナリ。

（此時淸國使臣大徵來リテ大使ニ見エンコトヲ請フニ因リ、暫ク談判ヲ停メ之ヲ接見シ、約ソ一時許ニシテ回リ去ル）

大使　吳ノ來タルハ何ノ意ナルヲ知ラズ、我往カズ、彼來ラズ、中間ノ地ヲ擇ビ此ニ於テ我ニ面スルカト思ヘリ、然ルニ其容ヲ見ルニ只貴官ニ對シテコトアルガ如シ、貴國ハ皆淸國官ノ指令ヲ受ケ、而後談話セラルヤ、然ラバ兩國條約ハ可笑キモノニ非ヤトノ感ヲ起セリ

金　彼此事ニ關シ何ノ故ニ來ルト云フ處ナキナリ。

大使　明カニ見タリト云フニハ非レドモ、吳ガ書キテ指出タルモノハ貴官ノ受ケ居ラル、所ノ全權ノ上ニ命令スルモノアルガ如ク思ハル、然ラバ段々御談判申處モ亦可笑モノナリ。

金　彼何ト思フテ言ヘルカ拙者モ其事トハ知ラズ、彼ノ來リシハ此處ニテ貴大使ト談判中ナルコトハ知ラザルカ、全ク私事ニテ來レルコトヲ說明シテ歸ヘレリ。

大使　吳ノ書ヲ差出タルモノヲ一見ヲ願ヒタシ。

金　何モ別段ノ事ナキナリ。

大使　別ニ面倒ヲ起スニ非レバ見セラレタシ。

金　吳ノ書ヲ出ス、曰ク

本大臣來此數日、爲査辨亂黨一事、最關緊要、

閣下身任政府、並不議査拏亂黨、避重就輕、卽使與、
井大使草々立約、而竟置亂黨於不問不組本大臣有詰責閣下、恐朝鮮萬民之心、憤懣不平大
不利於、
閣下此非了事也、恐了事而適以生事也、惟執事圖之。

大使　此書ニ付テ本使ハ種々ノ疑ヲ起セリ、此文氣ヲ見レバ直接ニハ云ハネド朝鮮ハ支那ノ屬
國ト云フ意ヲ婉曲ニ示シタルモノヽ如シ。果シテ貴國ハ清國ノ屬國ナラバ貴政府ト談判ハ
出來ザルナリ。若貴官等ガ清官ガ何ト云フトモソレニ構ハズ此ニ於テ決スベシト云フナラ
バ談判スベキモ、後ニテ清官ニ相談セシ上彼是ト說ノアル樣ナラバ談判セザルベシ。

金　是レハ貴大使ノ御話トモ存ゼズ、大使御承知ナキカ、此ニ決シタルコトヲ誰ガ何ト申スベ
キヤ、其證ハ前ニ屢々條約等ヲ結ビシモ清國ヨリ干涉セシコトナシ。拙者ガ不都合ニテ御
相談可致ハシラズ、拙者ヨリ未ダ言ハザルニ先ヅ其邊ノ御疑アルハ却テ如何ト存ズ。

大使　現ニ今命令スルモノアリタルハ如何、兩國辯論ノ席上ヘ他人來リ言フヲ容ル、卽其證ナ
ラズヤ、因テ此疑ヲ生ズルモ其理ナシトハ思ハレザルベシ。

金　ソレハ決シテ左樣ノコトナシ。私ニ於テ信ズルコトハ今日ノ御談判ハ早ク致方双方ノ爲メ
ナリ。

大使　試ミニ位置ヲ考ヘヨ、若シ貴官ハ他人ト公事ヲ辨ズルニ當リ、拙者其席ニ突來シ干涉ノ
言ヲ容レバ何ノ感ジヲ起サズヤ。

金　誠ニ今日彼ノ此席ニ入リ來リシハ全ク拙者ト貴使トニテ事件ノ御談判致シ居ルコトヲバ知
ラズ、御同樣ニ私晤ノ席ト思ヘル故ニ來リシモノナルベシ。

大使　彼レ全ク不知シテ私晤ノ爲メニ來リシナラバ、御互ノ談判ニ關スル說ヲ入ル、所ニハア
ラザルニアラズヤ。

金　誠ニ然リ、拙者ニ於テモ彼レ以テ此事ニ干涉シテ來ルコトハナキト存ズ、又拙者ナリ貴大
使ナリヘ談ズルコトアラバ其レハソレニテ決シテ此事ニ口ヲ容ル、筈ナシ。

大使　現ニ最初ハ己レモ此事ニ關係アルモノナレバ、御同前ニ議シ居ルコト公ナラバ、公ニ言
ヘ、是レハ拙者ト貴官ト兩人ノ私事ニ非ズト言ヒ、後ニ權理上ノ事ニ至リテハ反テ己レハ
貴國ノ事ヲ査辨スルタメニ此地ニ派遣セラレタルナレバ、拙者ニ關係ナキヨシヲ言ヒタリ

金　何卒大使御承知ナキコトニ致シタシ、最初ニハ何ト申シテ來リシヤハ知ラザレドモ、後ニ
ハ大使ニハ關セズト云タレバ、卽チ大使ニハ關セザルモノト御覽クダサレタシ。此議事ニ
付テ敝國政府ハ決シテ吳ニ干涉セシメザリシコトハ、他日同人ニ御面會相成タル節貴大使
ヨリ御問及アラバ明瞭ニ御分リ相成ルコトト存ズ。

大使　何ニ致セ困ツタ問題ガ一箇起リタリ。

金　今日彼レガ此ニ來ラザレバ無事ナルニ、此ニ來リタル故ニ餘計ナル時間ヲモ費セリ、シカシ私ニ關係セザルナリ。

大使　貴官ニハ關係アルマジキモ、我ニハ感ズル所アリ。此ニ於テハ談判ノ局面ヲ一ツ改メテ貴國ハ清國ノ屬國ナルヤ否ヤト云フ點ヨリシテ調ベザル可カラズ。

金　貴國モ前々明知ノコトニテ、國内萬般ノ事何一ツ他國ノ干渉ナク、我國ノ勝手ナリ、此ニテ決シタルコトヲ後ニ至リ何ナリ他國ニ關スルヨリ取消ヲ乞フ如キコトアラバ、如何樣ニ仰セラルヽモ不苦、ソレハ萬々ナキコトナリ。

大使　凡ソ國ト國トニテ權利ヲ爭フコトハ容易ナルコトニ非ズ、如此勢ニテハ遂ニ國王ニモ大ナル迷惑アルベキコトナリ。例ヘバ屬國ナラズト言テモ、若シ一時ノ說ナレバ憑ミ難シ。

金　拙者ハ大君主ヨリ全權ヲ委ネラレ居レバ、拙者ニ於テ此談判ヲ決スレバ、外ニ關セズト思フナリ。且ツ彼レ初メハ何カ關シソーナリシカ、終ニハアノ通リ申タレバ卽チ干渉セザル明證ナラン。

大使　拙者ハ甚ダ不愉快ノ感觸ヲ起シ居ルガ、乍去何トカ結局ヲツケズバナルマジ。但シ此事ニ付テハ支那ニ關セズ、又カゲニテモ支那官ニハ謀ラヌト云フコトヲ飽マデ保證セラルヽヤ、然ラバ御談判ニ及ブベシ。

金　此事ニ付テハ先ヨリ申ス通リ、外人ニハ關セシメズ、又關セラルヽコトナシ。是迄各國ト條約セシニ外ノ關係ナキニ、獨リ此事ニノミ關係アル理ナシ。

大使　然ラバ果シテ清官ニハカゲニテモ相談セラルヽガ如キコトナキカ。

金　若シ此事ニ關係ヲ受クル處アラバ、今日談判ヲ決セズシテ又相談スルコトモアルベケレド拙者ガ今日此處ニテ決スベシト云フヲ以テ其ノ關係ナキハ御承知アリタシ。

大使　今日談判纏マラズバ又如何ナル關係ヲ生ズルヤモ不計、因テ速カニ談結シ、今日此處ニテ調印アルコトヲ望ム。

金　今日事ヲ決シテ清書シ明日調印スベシ。決シテ言ヲ易ヘズ。

大使　能ク考ヘラレヨ、今日此場ニテ申ス所ハ拙者十分ニ考ヘタルコトナレバ、此談判纏マラネバ是ヨリシテ實ニ貴國ノ御迷惑ヲ生ズベシ。我ハ元ヨリ止ムヲ得ザルニ因テ事ヲ始ムルナレバ夫ハ覺悟ナリ。

金　敝國ノ事ヲ左程ニ御考ヘクダサルハ誠ニ難有キコトナリ。私モ談判ハ速カニ決シタシ、條款ニ付テハ細々御話致セバ言長ケレバ其ヲ略シ要ヲ摘ンデ申スベシ。御承知ナルベキコトハ速カニ承知セザルコトナシ。

金　放火公館ノ文字ハ除カレタシ、今口供モ御覽アリタルベシ。敵國人ニテ燒キタルコト、シ罪ナキ敵國人ニ罪ヲ負ハスレバ人民不服ニテ困却致スナリ。

大使　貴國人民ニ罪ナシト申サル、ハ、公館ハ貴國人ノ燒タルニ非ズト云フ意カ。

金　口供モ御覽下タサルベシ、誰カ焚ケリト云フコト丈ヲ御取消下サレタシ。

大使　文字丈ハ削ルモ不可ナキガ如クナレドモ、然ラバ次ノ條ニ關シテハ如何爲サル、ヤ。

金　要點ダケ申上ベシ。敵國ノ窮因ハ素ヨリ御熟知ニテ、塡補金モ御返還下タサル程ナリ、然レドモ公館ヲ焚ケリト申セバ大君主ニモ氣ノ毒ニ思ハル、ナリ、只此額ヲ半分ニ願ヒタシ。

大使　能々事情ヲ考ヘラレヨ、四萬圓ト言フハ過多ナリト思ル、カ知ラザレドモ、建築用ノ材木等ヲ日本ヨリ運ビ來リテ造レバスベテ一倍ノ費用アルナリ。先キニ公館ヲ建タルトキノ入費ヲ計算セシメシニ五萬圓計ナリ。然ルヲ拙者貴政府ヲ察シ、公館ニ在ル所ノ燒殘リノ煉瓦等ヲモ差引セヨト命ゼシニ、皆用ニ足ラズト云ヘリ、然レドモ更ニ以前ノ額ヨリ一層少ナク計算ヲ爲サシメ、此數ニ取極メタルナレバ、決シテ難題ト申スベキニ非ズ。十分斟酌ヲ加ヘタル上ノコトナリ。

能々御承知アリタシ。

金　成程大使ノ公平ナル御心ヲ承知致シタル以上ハ此事ハ御拒ミ申スマジ。

大使　貴國ノ御困難ハ元ヨリ御察シ申シ居ル所ナリ。今貴官ノ半額ニマケヨト申サレタルニ付テ一ノ便法ヲ考ヘタリ。高ミノ場所ニ就テ幾分ノ修繕ヲ加ヘレバ住マル、丈ノ家屋ヲ土地ト共ニ交付アリテ、其上ノ修繕料トシテ外ニ二萬圓ヲ御渡シ相成ルコトニ致シテモヨロシ此二萬圓ハ一度ハ此方ニ御渡シアルモ矢張貴國ニ於テ使用シテ仕舞ナレバ、政府ヲ出テ、人民ニ入ルノミ、到底貴國ノ外ニ出ルモノニ非ザルナリ。

金　誠ニ公平ノ御說ニテ感服ノ外ナシ。

大使　若シ此事ヲ御喜ビナサラバ至急ニスベシ。我隨員ヲシテ之ヲ擇バシムルモ可ナリ。尤兵隊ヲ置ク場所ハ公館ト甚ダ懸絕シテハ不都合ナリ、必ラズ近々ニ在ルベシ。

金　一々御尤ナリ、何レ家屋ノ適否等御相談ノ上取極ムベシ。貴方ニヨキハ此方ニ差支ヘ、此方ニヨキハ貴方ニ御不都合ト申ス樣ナルコトアルベシ。

大使　然リ、但シ家屋幾宇ヲ合スルモ構ナシ、相應ノ修繕ヲ加ヘテ渡サルレハヨロシ。

金　承知致セリ、筆ヲ援テ焚館ノ數宇ヲ削リ、又第四條ノ文ヲ此意ニ改ム。

金　第五條ニ付テ御願アリ、前回ノ約面ニハ駐在ノ兵ハ幾干トノミ書テ其數ヲ言ハズ、此後ハ決テ如此變亂ナキ筈ナレバ、公使一人ニテ足ルベシ。兵アリテハ却テ爭鬪ノ基トモ爲ルベキナレドモ、目下ハ强テ夫レヲ申シ難キコトナレバ、只前ヲ照シテ幾干トノミ願ヒタシ。

大使　ソレハ改ムルモ難カラザレドモ、實際今率フル所ノ一大隊ヲ容ル、所ノモノハ必要ナリ

金　此條ノ末文モ花房公使ノ時ノ末文ヲ照シタシ。

大使　ソレモ苦シカラズ、此一條ハ花房ノ約面ヲ照シ只兵營ヲ公館ノ近傍ニ置クト云フコトヲ加フベシ。

金　其稿ヲ作リ閲ヲ乞フ。

大使　可ナリ。

金　另輩ノ兇徒處分ノ期限ハ廿日間ニ致シタシ。

大使　諾。

金　兵隊ハ一大隊御差置ノコトニ致シタシ。

大使　ソレハ此處ニテハ暫ク御相談致スマジ。

金　第一條ノ國書ハ貴方ニテ御立稿ノ分ハ拙者拜見致置マデニ止メ、此方ヨリハ別ニ貴國ノ好意ヲ謝スルノ意ヲ以テ國書ヲ修メ差出サバ可ナルベシ。

大使　大君主ニテ國書ヲ御贈リ相成ル思召アラバ其稿本ヲ以テ御相談アリタシ。然ラザレバ國璽ノ捧シアルモノヲ俄カニ改ムル如キコトハ大イニ不都合ナルコトナリ。

金　何レヨリ見ルモ體面アシカラズ、不都合ナキ樣ニスルコトハ保證致スナリ。然レドモ其草稿ヲ以テ御相談イタスト云フハ困却ナリ。

大使　然レドモ其果シテ不都合ナキコトハ一方ニテノミハ保證シ難キコトナレバ、各國共ニ草稿ヲ以テ相談スルガ常例ナリ。難題ト思ハル、ナレバ穆氏ニモ相談致サレヨ、是ハ各國ノ同ジキ所ナリ。

（於是齋藤書記官ヲシテモルレンドルフニ此意ヲ通ゼシム、モルレンドルフ亦云、其例ニ遵ハザル可ラズト、因テ自ラ金氏ニ向テ其意ヲ述ブ）

金　誠ニ然リ、明日調印濟ノ上其事ヲ御相談致スベシ。

敝國ノ罪人未ダ緝捕ニ就カズ、或貴國ニ往クトモ云フ者アリ、若シ然ラバ貴政府ニ於テ捕獲ノ上御交付下サレタキナリ。

大使　其者ノ敝國ニ來リシト云フハ拙者出發前ニハ曾テ聞及バザルコトナリ、然レドモ此等ノ件ハ多ク先例アルコトナレバ、穆氏ニモ相談アリタシ、尤モ是レハ萬國公法ニ據リテ云ヘバ頗ル解シ難キモノナレバ、先ヅ穆氏トモ御熟商アルコトニ致シタシ。

（此時又齋藤書記官ヲシテモルレンドルフニ此意ヲ傳ヘシム）

金　拙者ハ萬國公法ニハ熟セザレドモ、敝國ト貴國トノ間ニ於テ敦好ノ情ヲ以テ公法ニ拘ラズ希望致ス所アルヤモシラズ、此六名ハ兇徒ノ渠魁ニテ捕縛致サヾレバ人民ニ對シ大ニ困却

スルコトナレバ、追テ別ニ御照會致スベキヤモ知レズ、何卒特別ノ御勘考ヲ願ヒタキナリ

大使　照會セラル、ナレバ照會アリテモ苦シカラズ。只今モ申ス通、敝等ノ事ニ都テ公法ニ基クコトナレバ敝國ニ於テハ萬一此者等敝國ニ居ルモノト假定スルモ、公法ニ從テ其ノ論ヲ究メタル上ナラデハ何トモ處置致シ難キナリ。

（此意又齋藤書記官ヲシテモルレンドルフニ細カニ傳ヘ置カシム）

金　約書冒頭ノ文字内宸念ノ二時ヲバ睦誼ト致シタシ、是兩國相互ニスル意ヲ以テスレバ後ノ悵惻ノ字ニ對セザレバナリ。

大使　是ハ全ク敝國ニノミ關スル處ニテ　宸念ヨリ拙者ヲ派出セラル、意味ニ止マレバ此儘ニ存シ置クベシ。

金　然ラバ宸念ノ字ハ据ヘオキ、均切悵測ノ四字ヲ均願敦好ト改メ、將來禍端爾生ノ六字ハ將來事端ノ四字ニ改メタシ。

大使　可ナリ。

最ニテ談判全ク整ヒ、明日（九日）午後一時仍ホ議政府ニ於テ調印スベキ旨ヲ約スルノ後、余談中ニ約書冒頭ノ文ナル京城事變ノ上ニ此次ノ二字ヲ加ヘ、又大君主均願敦好ノ處ニ宸念ノ二字ヲ加フル等ヲ商定シ、同日午後四時議政府ヲ出ヅ。

約書原稿

京城之變、所係非小、

大日本國
大皇帝深軫
宸念、茲
簡特派全權大使伯爵井上馨、至
大朝鮮國、便宜辨理、
大朝鮮國
大君主均切悵測、乃
委金宏集、以全權議處之任、
命以懲前惡後之意、兩國大臣、和衷商辨、作左約欵、以昭好誼完全、又以防將來禍端爾生、茲
據全權文憑、各簽名鈐印如左、約欵

第一　朝鮮國修國書致
日本表明謝意事、
第二　賑給此次
日本國遭害兵民遭族並負傷者、暨償補商民貨物、毀損掠奪者、由朝鮮國、揆支給一萬圓事、
第三　殺害磯林大尉及、放火公館等兇徒、查問捕拿、從重正刑事、
等四　日本公館再建費計、四萬圓、由朝鮮國照數償補事、
第五　日本護衛公館兵辨營舍、須要足置一千員、
朝鮮國任其建設修繕事、

另　單

一、約款第二、第四條金圓、以日本銀貨算、須期三ヶ月、於仁川揆完、
一、第三條處辨兇徒、以立約後旬日爲期、
一、第五條兵營屯舍、須要在干公館近地、但公館未再建之間、不論京城內外、由日本官、擇
便宜之地屯駐、其館舍須由朝鮮官吏照料、

兩國　月　日

兩國大臣